平成 23 年度

弘前大学生涯学習教育研究センター年報

第15号

平 成 24 年 8 月

弘前大学生涯学習教育研究センター

目　　次

挨　拶　　弘前大学生涯学習教育研究センター長　浅　野　　清

Ⅰ．論文等

キャリア教育の展開と大学開放
…… 弘前大学生涯学習教育研究センター　准教授　藤　田　昇　治…… 1

大学の力を活用した子育ち・子育て支援のプログラムの検討
…… 弘前大学生涯学習教育研究センター　講師　深　作　拓　郎
教育学部　准教授　増　田　貴　人
保健学研究科　准教授　古　川　照　美
弘前学院大学　講師　生　島　美　和…… 13

「地域社会から学ぶ可能性について」
～高校生地域づくりリーダー養成事業からの報告～
…… 弘前市　中　澤　俔　志…… 45

市民が期待する生涯学習教育研究センターとは（座談会）
（受講生）前田歌子さん、小山内祥代さん、鈴木庸子さん
（センター教員）浅野　清センター長、藤田昇治准教授、深作拓郎講師…… 55

Ⅱ．事業報告

１．生涯学習教育研究センター主催・共催事業
事業報告・アンケート集計結果・掲載新聞記事…… 65

２．学部の主催事業など
(1) 人文学部…… 110
(2) 教育学部…… 115
(3) 大学院医学研究科…… 116
(4) 被ばく医療総合研究所…… 117
(5) 農学生命科学部…… 117
(6) 白神自然環境研究所…… 119
(7) 総合情報処理センター…… 122

Ⅲ．センター関連規則など

１．センター関連規則…… 123
２．機構・組織…… 127
３．地図・連絡先…… 128

編集後記

挨　拶

発刊にあたって

弘前大学生涯学習教育研究センター長
浅　野　　清

本日ここに弘前大学生涯学習教育研究センターの平成23度年報を発刊する運びとなりました。これもひとえに日頃より当センターの活動にご協力いただいている皆様のお陰と感謝いたしております。

本年度は、前年度に最終開催となった「ツーリズム人づくり大学『はやて』」の次の段階を目指した､観光業に従事する方々を対象とした「あおもり観光人財育成講座」を初め、恒例の「ピアノ教員のための『ブラッシュアップ講座』」、珍しいケースとして午前11時に始まる「レクチャー・コンサート『マイ・ショパン・イヤー』」を企画開催、総合文化祭では団塊世代の方たちにはとても馴染みのある歌曲を皆で歌うイベント「集い、ともに歌おう！」などを開催し、とても多くの人にセンター事業を楽しんでもらうことができました。また、センターの主要な事業の一つである子育ち・子育てに関する講演会は、大学や市内にとどまらず、県内各地で開催されました。これは地域住民との継続的なコミュニケーションによって築かれる信頼があればこその成果であり、センターの役割・活動が受け入れられていることが実感されます。

研究成果を地元に還元するための講座や自治体との共催による講演会などを含め、多彩な内容の事業を提供することができましたので、再度ご確認いただければ幸いです。

さて、私事ではありますが、平成24年３月を以てセンター長の役務を終えることになりました。４期８年を努めたにも拘わらず、その間、公開講座受講料に関する学則制定、自治体共催事業の拡大、コラボ弘大への施設移動に伴うセンターの多目的室の設置くらいにしか貢献できなかったことを、紙面を借りて深くお詫びいたします。新センター長の元、今後はセンターの改革を推進し、なお一層の「開かれた大学」作りを目指すものと期待しています。皆様には今後も変わらぬ御協力、御指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

平成24年３月

Ⅰ. 論　文　等

キャリア教育の展開と大学開放

藤　田　昇　治

Ⅰ．はじめに

昨年の「東日本大震災」は、地域経済に多大な打撃を与え、今日なお復興の課題を残している。また、日本の貿易収支は赤字になったが、「東日本大震災」の影響もさることながら、日本の経済構造に規定されてうみだされたもの、と考えられる。グローバル化が一段と進行する中で資本輸出が増大し、国内での「ものづくり」の場が縮小する傾向が強まってきている。こうした動向は、地域において様々な地域課題・生活課題を生じさせてきており、「地域創造教育」[1)]の必要性を顕在化させてきている。

また、地域課題や国レベルでの課題として、労働・生産の担い手を育成する「キャリア教育」への関心が高まってきている。平成23年１月に出された中央教育審議会の答申「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、「キャリア教育」を積極的に学校教育で展開することの意義が示されている。またこの答申では、社会教育・生涯学習との関わりで「キャリア教育」について言及しており、社会教育・生涯学習に関わる人にも大きな問題提起をしている。

ところで社会教育・生涯学習について改めて問い直してみるならば、「労働・生産・生活」の営みに即した教育・学習が重視されてきており、現在も、さらに将来にわたって重視される必要があることは論をまたないであろう。社会教育法に示された「実際生活」に即した学習や、「自己教育」の内実をより豊かに捉える場合、不可欠な視点である、と考える。しかし、様々な理由から、社会教育・生涯学習の領域において、十分研究がなされ成果をあげてきた、とは言い難い。勿論、社会教育行政・社会教育施設以外では、多様な民間企業による教育機会が提供されていることも事実である。そうした中で、近年「大学開放」の事業の一環として「キャリア教育」が重視される傾向にあることも注目されるところである。

社会教育・生涯学習について論じる場合、「個人」の「学び」や成長発達を捉えると同時に、その成長発達をサポートしたり地域・社会発展を図る教育政策・教育改革を展望して「教育事象」を把握する必要がある、と考える。

この小論では、主として「大学開放」の事業として展開されている「キャリア教育」を念頭におきながら、「キャリア教育」を捉える基本的な視点を整理したい、と考える。

藤田　昇治（ふじた しょうじ）　弘前大学生涯学習教育研究センター　准教授

Ⅱ．教育政策としての「キャリア教育」

(1) キャリア教育のコンセプト

平成23年１月にとりまとめられた中央教育審議会の答申「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、これまでの議論をふまえ、一層学校教育における「キャリア教育」の充実を図る目的が明確になっている。

その中で、「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素には、「専門的な知識・技能」を構成するものとして、以下の５つが示されている。

すなわち、「勤労観・職業観等の価値観」、「意欲・態度」、「創造力」、「論理的思考力」、「基礎的・汎用的能力」の５つである。そして、「基礎的・汎用的能力」はさらに、次の４つの能力で構成されている。「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」である。

これらは、いわば実際に社会生活を営む上で必要とされる「生きる力」であり、職業人として働き生活を営む上で必要とされる基本的能力・資質である。実社会で「労働」するために不可欠な素養と言うこともできよう。

換言すれば、児童生徒・若者が、社会に出て職業人として、社会人として自立して生きていくことを重視し、様々な手だてを模索している、ということができる。鋭い現状認識を基礎として、これまで個別の学校・教員が対応しきれなかった重要な課題に積極的に取り組もうとしている、という意味では大いに評価できる「答申」である、と考える。

この答申では、「キャリア教育」を推進していく上で、地域に人材を求め協力を得ることを不可欠、として認識していることが注目される点の一つである。産業界などとの連携も視野に入れられている。また、教員の力量では対応しきれない要素があることも強く意識されている。

実際、地域においては、企業・農業者・団体・ＮＰＯ・個人が多様な内容で、「キャリア教育」を支えることが可能である。「職場体験」での指導は勿論、インターンシップの事前指導も可能である。実際、筆者も関わりを持っている、ＮＰＯ「Ｒ.ぷらっと」は、高校に出向いてインターンシップの事前指導を行っている。

この答申では、「キャリア教育」を、学校教育の各教科に関連づけて実施することを強く意識している。いわば、教科横断的なものとして位置づけている、ということである。労働・生産や生活を社会的に自立した個人として営む上でその前提として必要とされていることは、各教科に細分化された学習カリキュラムを単純に合算することだけで充足されるものではない。少なくとも各教科を統合的に捉えるコンセプトが必要とされているのであり、最も基本となる世界観・人間の成長発達観の育成が求められている、と考える。

関連して、本来、個人・人間が現代社会で生活していく上で必要とされる知識・技能の修得（諸能力の形成）を「キャリア教育」として捉えていることが注目される。その意味では、これまで学校教育の中で「受験」にシフトしすぎた傾向を実質的に捉え直す要素を内在させているのではあるが、「中教審答申」では必ずしもそのことを強く打ち出してはいない。また、今後の学校教育において、「キャリア教育」を基軸として抜本的に教育改革を行う展望は示されてはいない。とはいえ、個人が社会生活を送る、そのために職業人として生きていく上で必要とされている教育の基本に「キャリア教育」を据えている、と

いうことは重要である。

ここで、改めて学校教育の果たすべき役割をどのように捉えるのか、ということに触れておきたい。「学力の形成」と「人格形成」という表現をとったとしても、現代社会に対応した教育が必要とされるのであり、それはまた個人の「学習」が必要とされている、ということである。そこでは、21世紀の今日まで蓄積されてきた様々な研究の成果、科学技術、社会システムなどについての総合的な理解が求められるのであり、教育内容として精査されるべきである。また、具体的な「仕事」、「職場」、「職業」に即した知識・技能・応用力、人間関係構築能力などを修得させる必要がある、ということになる。

ところで、学習という行為においては、主体的に他者や自然・社会と関わりあおうとする姿勢が重要である。学校教育であれ社会教育・生涯学習であれ、「主体的に学ぶ」ということが大事である。そのためには、「学ぶおもしろさ」や「社会の中で個人として生きる」ということが教育の基軸に据えられるべきである。また、今日取りざたされている「学力」についても、受験にシフトしたものとしてではなく、職業人・社会人として生きていくという文脈の中で捉え直される必要があるのではないか。

「答申」では、学校卒業、社会人・職業人になっていく過程を重視している。それは、今日、児童生徒・若者において、少なからず社会人への「移行」に際して困難を感じている人がいるという実態を捉え、その問題の克服を意識している、ということである。筆者の問題意識からすれば、現代社会において、「自己完結的な自己」から「社会的存在としての自己」への飛躍が困難になっている、ということになる[2)]。青年の「自立」の問題については、以前から日本社会においては自立する年齢が、他の先進資本主義国と比較して遅い傾向にあることが言われてきた。その分析をここでする余裕はないが、個人が「社会人」あるいは「職業人」として自立することを先延ばしする傾向が強まってきているように思われる。「中教審答申」の指摘も、こうした状況をふまえたものと考える。筆者なりに捉えるならば、「社会的存在としての個人」として成長発達を図るうえでは、現在の学校教育システムや家庭教育の在り方を検討すると同時に、「職業体験」や「ボランティア活動」を含む多様な「社会参加」のシステムを構築すること、その前提として「受験」にシフトし過ぎた現行の教育システムを改革すること、が必要とされていると考える。

ここで、「キャリア教育」に関連して、筆者も多少関わりをもっている「高大連携キャリアサポート事業」の実践をふまえて、学生などが「社会参加」を体験することの重要性について簡単に述べておきたい[3)]。

第一に、社会人・職業人として社会参加していく前提条件を構成する、ということである。児童生徒が学校教育において学ぶこと、そして社会人・職業人として生きていく上で必要とされる諸能力の形成（「キャリア教育」に関連して修得することが必要とされる能力、及び各教科についての学習＝先に述べた「中教審答申」でも触れられたもの）において、多様な「社会参加」の活動に参加することで、「社会的存在としての自己」という認識を深めることができる。逆に言えば、今日の児童生徒がどのように社会人・職業人として生きていくべきか、その判断を先送りする傾向が強いという状況があるからこそ、広く「社会参加」することが必要である、ということである。

第二に、その「社会参加」においては、地域の生活課題・地域課題に関わった活動への参加が期待される、ということである。今日、地域における生活課題・地域課題は地域によって様相が大きく異なるのではあるが、「少子高齢化」や「グローバル化」の動向が反映して様々な問題が生じている。そうした「社会問題」あるいは「社会矛盾」と直にむきあうことで、「社会的存在としての自己」への「意識化」がはぐくまれるのではないか、と考える。

第三に、そうした活動に参加することで、様々な「他者」と積極的に交流することが重要である。歴史的・社会的に形成されてきた「自己」と向き合うには、年齢・性別・職業・学習歴・人格などが異なる「他者」との交流が重要な要素になる、と考える。もっとも、今日では「交流」することを忌避したり表面的な「交流」に終始する傾向が強いのではあるが。ネットやツイッターといったバーチャルな世界への依存傾向が危惧されるからこそ、「生身の人間」との交流が重要な意味を持つ、と考える。

第四に、「キャリア教育」を構成する「諸能力」の形成を、「社会参加」の活動の実践の中で育む、という視点が大事である。換言すれば、「学校教育」は「学校」という、いわば閉じられた社会の中で「教科」を基本として教育実践を行う傾向が強い。しかし、社会の中での人々の多様な生活の営みを前提として教育されなければならない、ということである。

第五に、社会的な様々な団体・組織との連携を基盤として学校教育の実践、「キャリア教育」の追究が図られるべきである、と考える。

ここで学生の「キャリア教育」に関連して、学生自身が教育主体としての役割を果たすことの重要性について確認しておきたい[4)]。地域の中で、住民等とともに生活課題や地域課題について考えたり、学生より年下の高校生等に教育的に働きかけることで、学生が大きく成長する可能性があるということであり、それはとりもなおさず「キャリア教育」の内実を構成するものである、と考える[5)]。

また、筆者も関わる中で大学生による「キャリアサポート」の事業がこの間展開されてきたが、その重要性を改めて確認したい、と考える。とりわけ学生にとって、そのコミュニケーション能力の形成などで、具体的に効果を上げている。また、同時に、高校生の「キャリア教育」という意味で大きな成果を上げている、ということができよう。

関連して、近年「キー・コンピテンシー」について注目されてきていることを確認したい。すなわち、「キー・コンピテンシー」について、ＯＥＣＤなどでも盛んに議論されるようになってきている[6)]。そこでは、様々な職種・業務に共通するものとして、「職業能力」の内実が議論されているのである。

また、大学教育においても、「キー・コンピテンシー」について志向する動きがうまれてきている[7)]。

なお、「労働」に関連する用語について検討することも必要である、と考える。この小論では、深く検討する余裕はない。「労働」については、「資本―労働」という関係において捉えられる具体的有用労働と価値形成過程を統一した概念として整理したい。「キャリア教育」に関する言及の多くは、「価値形成過程」については捨象しているように思うが、

「労働」概念を深める上で、価値形成過程を視野に入れることは不可欠である、と考える。この点については別の機会に論じたい。「職業」については、これまで述べた「労働」概念とは異なる次元の用語で、「社会生活を送る上で生活費を稼ぐ主要な方法」、ということになろう。「職業」について具体的に考えると「労働」概念との接点を持つのではあるが、換言すれば実体概念には「労働過程」や「価値形成過程」を含めてイメージされることになるが、主として「生活費の入手方法」という概念になろう。「仕事」については、「労働」を部分的に分割して捉える、あるいは「職業」をより具体化したものとして捉えることが多い、と考える。

(2)「キャリア教育」を推進していく社会的条件

キャリア教育を実施している機関、さらに今後実施することが期待されている機関について、この小論の意図することに関連づけて若干検討しておきたい。

これまで触れてきたように、中央教育審議会の答申では「学校教育」に重点をおいて、キャリア教育の充実を図っている。大学も含め、児童生徒・若者を主たる対象として、初等教育および中等教育においてキャリア教育が今後充実されるべきであることは明らかである。

周知のように、厚生労働省所管では、職業訓練機関や職業選択・キャリアアップを図る機関として「ハローワーク」や、「ジョブカフェ」が重要な役割を果たしてきた。また、職業・業務に関わる様々な資格取得が必要とされる場合が多いのだが、これらについて、厚生労働省の認可にもとづいて研修を実施し、資格付与を行っている機関・協会といった組織も多数存在している。高校あるいは大学を卒業した人を対象とした専門学校には、職業人としての養成や資格取得を前提としたものも多い。

「キャリア教育」の範疇を「生活スキルの向上」というものを含めて捉えた場合、さらに多様な学習機会を提供する機関・組織が存在していることになる。「趣味」や「お稽古ごと」に関わるものだけでも、書道や生け花、茶道等々が挙げられる。それらの中には、一定のレベルまで到達した段階で「職業」的に自立できる場合もあるが、多くは「生活スキルの向上」として位置づけることができよう。

対象を実際に社会生活を営む人とした場合、何よりも企業内教育が一定の比重を占めていることを確認したい。つまり、企業・業界単位で、従業員の技能向上・企業への忠誠心涵養などを内容とした、多様な企業内教育が実施されている、ということである。

福祉や教育など、様々な生活を営む上での「スキルアップ」も重要なものの一つとして考えられる。家族の介護を行うに当たって、「ホームヘルパー」の講習を受講し、自己のスキルアップを図る場合も多い。さらに、資格を取得することで、「介護保険法」の適応を受けた事業所で「ヘルパー」として勤務するようになる、という事例もある。

「キャリア教育」を推進していく上で、「教育支援プラットフォーム」についても一言触れておきたい。

後にも触れるが、「キャリア教育」は、初等教育・中等教育という学校教育に限定しても、その内容・方法をより実効的なものとするために、地域の企業や労働・職業教育機関、さらにＮＰＯなどとの連携が必要とされてくる。その意味では、これまで「学校支援地域本部事業」の取り組みの中で蓄積された「地域の教育力」や、「教育支援プラットフォーム」が組織化され有効に機能することが求められる、と考える[8)]。

(3)「キャリア教育」の基本視点をめぐってー労働過程と価値形成過程ー

先にも簡単に触れたが、「キャリア教育」に関連して、労働過程と価値形成過程について検討しておきたい。

労働者教育や農民教育という用語を使用する際、そこでは「労働過程」と「価値形成過程」とが統一的に位置づけられている、と考える。「資本の下での労働、即ち賃労働」は、具体的な有用労働を合理的に遂行する、さらに労働編成を主体的に行う、という側面を持つ。同時に、資本によって搾取されるという側面、それは主として労働条件（上司と部下といった労務管理を含めて）ということに集約される。「年功序列的賃金体系」や、「終身雇用制度」などとしてとりざたされることも多い。

一方、農民教育という場合も、具体的な有用労働という側面と、価値形成過程とが統一的に捉えられるべきである。ここで言う農民とは、土地を持つ、自らの労働力を活用する、そして農産物を販売する、ということが遂行されていることが前提となっている。労働者と比較した場合、土地や機械などの生産手段を保有していること、したがって、生産物の販売によって価値実現を図るまでの「経営者」としての立場にもある、という特質を持つ。つまり、生産物を販売する（商品の価値の実現を図る）ことによって経営を営むということであり、そこで求められる学習は、「経営」に係わる多面的な知識・技能の修得ということになる。

このように「価値形成過程」を強く意識するのは、具体的な有用労働としての労働の側面だけで考察した場合、労働が社会的諸関係、とりわけ生産手段の所有をめぐる対立・矛盾関係の中で遂行されるということが、軽視ないし無視されることになりかねない、と危惧するからである。

この点に関連して、「中教審答申」では労働者の権利などについても言及はしているが、「資本主義」ということからくる「資本―賃労働」の矛盾関係について掘り下げることまでは踏み込んでいない。その意味では、「従順」で資本にとって「使い勝手の良い労働力育成」という批判は今後展開される可能性を持っている。

関連することであるが、「生活者」としての視点が弱い、ということも指摘できよう。「ワーク・アンド・バランス」といった用語も使用されているが、それは個人の価値観・行動規範として重要な意味を持つというだけでは不十分で、それを許さない（実質的に超過勤務・長時間労働を強いている現状があるがそれを改善する）社会的条件、即ち企業活動への規制が必要であるという点については踏み込んでいない。

また、「生活キャリア」という、生活の営みをより充実させる上で必要とされる知識・技能・他者とのコミュニケーション能力等々も積極的に位置づけられる必要がある、と考える。コミュニケーション能力などは、「職場における人間関係」だけで問題になるのではないのであり、また家族・学校・地域といった「社会」において十分発達させることができるのであり、それができてこそ「職場」においても発揮できる能力として捉えることができるのではないだろうか。

Ⅲ．地域に即したキャリア教育の志向

(1) 地域に根ざした教育プログラムの開発

「キャリア教育」について実践的・実証的に追究しようとするならば、地域の実態を十分ふまえることが必要とされてくる。

すなわち、一方では、地域の労働力市場の展開に即した「キャリア教育」の構築が必要とされてくる。また、地域で事業展開している企業などの積極的な協力が必要とされてくる、ということになる。他方で、地域の個別性を捨象し一般化して「キャリア教育」を構築していく努力が必要とされてくる。青森県の場合、地元雇用の絶対者数は少なく、高校卒業時の未就職者が多く、完全失業率などは高く、全国と比較して極端に悪い状況にある。

こうした厳しい労働力市場の状況は、決して青森県だけではない。地元企業において雇用されるにしても、むしろ他県に就職先を求める人が多いという状況は、多くの地域において確認できるところである。

このような事情をふまえ、実践的に高校における「キャリア教育」のカリキュラムを開発しようとするならば、地域に事業展開する個別企業の協力をえることで個別具体的な労働過程に即した学習、あるいは職業について学習するとともに、一般化したコンテクストの中に位置づけることが重要な意味を持つことになる。

また、「生活キャリア」に注目して生活課題・地域課題を具体的に分析し、その課題解決を担う「主体」について探究して行こうとするならば、「住民」をより具体的に把握することが必要とされてくる。もっとも、個別的な条件をふまえて「個人」に即してそれぞれの個人が生活課題・地域課題についてどのように関わりをもっているのか（意識・人間関係・利害関係等において）ということが詳しく探究される必要がある。

人間の意識を規定する要因についてここで全面的に展開する余裕はない。しかし、基本的な条件として、生産手段の所有・非所有、企業や行政の中での地位・役割、学歴、文化資本、等々が総合的に考察される必要がある、と考える。

(2) 地域課題・生活課題とキャリア教育

「地域」といっても、その実態は「地域」を構成している条件によって大きく異なっている。ここでは、「キャリア教育」に関連させて農業に焦点を当て、地域課題・生活課題との関連で検討してみたい。

ＴＰＰへの加盟をめぐって議論がおこなわれているが、日本経済の方向性をめぐって、「貿易国日本としては加盟やむなし」という安易な捉え方が懸念される。加盟賛成派の意見として、一方で、工業製品を輸出し経済発展をはかるためには関税はゼロの方が日本には有利である、という捉え方がある。他方で、今後の日本農業はその品質の高さを生かして海外進出を図るべきである、また、そうした「強い農業」を推進すべきである、といった意見が出されている。

しかし、世界的規模で農業・食糧問題を考えた場合、日本農業の果たすべき役割は異なって見えるのではないだろうか。今や世界の人口は70億人を超え増加の一途で、饑餓に苦しむ人は決して少なくない。中国などの発展著しい国では食の消費動向が大きく変容し

つつあり、よりエネルギーや土地を必要とする傾向が強まっている。アフリカの一部の国・地域でも工業発展が進行することで都市住民が大量に形成されてきており、食糧生産の必要性は急激に強まってきている。また、「温暖化」にともなって、世界的規模で天候不順の状況があり、食糧生産は不安定さを増大させている。一旦干ばつや大洪水などが発生した場合、これまでの食糧輸出国が輸出を制限することで世界的な食糧市場が攪乱されることが現に生じている。こうした傾向はより強まるものと懸念されるところである。

こうした状況にあっては、日本の高い農業生産技術水準を国際的に活用することが図られるべきであり、同時に、国内農業の振興も追求されるべきである、と考える。日本農業の担い手は急速に高齢化しており、生産力構造の脆弱化・危機的状況をまず問題にする必要がある、というのが実態であろう。

また、今日なお地方では、農業を主要な産業としている地域が多い、という点も指摘したい。「平成の大合併」以降においては、「市町村」という行政単位でみた場合には必ずしも大きな比重を占めていないとしても、合併以前の「市町村」というエリアでみた場合に農業の占める割合（就業人口、生産高など）が比較的高い、ということがある。また、「集落」単位でみた場合には、農業が中心の地域である、という場合も多い。

こうした状況では、農業の振興ということが地域課題として、住民の生活課題として、地域を活性化させる課題として、今日なお重要な問題となっている。そうした中で、「担い手」を育成するという意味では、農業という個別産業領域についての「キャリア教育」のプログラムの開発が必要とされている、ということになる。学校教育に軸足をおいた場合の「教育プログラム」とともに、社会教育・生涯学習における「キャリア教育」のプログラムの開発も必要とされている、ということである。

かつて、「労農大学」や「生産大学」といった住民の学習運動が展開されていた。それらは、今日取りざたされている「キャリア教育」とは歴史的・社会的条件が大きく異なった下での住民の学習運動であり、その参加者層も、農民、農業関係の専門家（獣医、技術者など）・研究者、自治体職員、農協労働者、教員、主婦、学生など、多岐にわたっている。

こうした学習運動は、「労働・生産・生活」を統一的に捉える（生産者と消費者との協同志向を内在させている）という特徴を持っていた。農業生産者が、自らの生産・経営の在り方を、生産物の販売でとどめるのではなく、流通過程を経て最終消費者まで関連づけて捉え直す、ということが可能になっていたのである。また同時に、消費者としては、単にスーパーなどの店頭に並べられた「商品（農産物）」について、価格や食味・形状などだけを捉えて判断するのではなく、直接生産者がおかれている農業に関わる労働や生産そして経営の実態を理解することが可能となっていた。例えば、かつて農夫症という農業労働に起因した疾病が存在していたこと、農産物のコストを構成するものには機械の償却費や肥料・農薬代、借入金の返済等が大きな比重を占めていること、等々について生産者と共通の理解が可能になった、ということである。そして、それはまた、社会教育でいう共同学習運動としての性格を強くもっていた、ということができる。とりわけ、学習しようとするテーマ・内容を自らの労働・生産・生活の分析の中から解き明かしていくということで、「教育学習プログラム」を主体的に編集する、という側面をもっていたことは、今日改めて高く評価されてよいものと考える。

Ⅳ.「大学開放」と「キャリア教育プログラム」の開発

(1)「大学開放」への期待

これまで述べてきたような住民の学習運動を捉え直そうとしたとき、また、筆者がこの間関わってきた「あおもり観光人財育成講座」[9)]という実践をふまえたとき、「大学開放」と「キャリア教育」に関連して、以下のような視点・課題認識が重要になるのではないか、と考える。

第一に、大学に蓄積された「知」の積極的な評価・位置づけが重要である、ということである。かつて、T.パーソンズが大学の社会的役割として「地域における調査研究のセンターとしての役割」ということを指摘している[10)]。勿論、当時の大学のおかれている事情と今日の日本の社会状況は大きく異なるものではある。しかし、高等教育機関が社会的に果たすべき役割として期待されていることの一つとしては、今なお、否、今後一層期待される重要な役割である、と考える。その意味では、地域の生活課題・地域課題を行政・企業・住民などの共有すべきものとして状況把握しその課題解決の方向性について共通の認識を深めることが求められる。さらに、それらの課題に対して共同で取り組む実践が必要とされている、ということである。

第二に、「労働・生産・生活の主体」を育むことが教育の基本となる、という視点である。これまで、日本企業社会では、高度経済発展期の「モーレツ社員」や「企業戦士」といった「会社人間」タイプの「労働者像」は基本的にかげをひそめ、「ワーク・ライフ・バランス」という用語に象徴されるように、「仕事」と「生活」の調和をはかる価値志向が一般化してきている。その意味では、「キャリア教育」を貫く人生観・世界観にも「労働・生産・生活の主体」という基本的なとらえ方が据えられるべきではないか、と考える。また、すでに「『キャリア教育』の基本視点をめぐって―労働過程と価値形成過程―」(Ⅱ(3)) で触れたように、「労働過程」とともに「価値形成過程」についても捉える必要がある。「資本―賃労働」という関係が現存する中で、ややもすると、また今日のように労働組合の組織率が低下し、不安定就労層（劣悪な雇用条件下にある人々）が増大し、労働組合運動が低迷している状況にあっては、「資本」の側が絶対的に優位な立場にある。そうした状況にあるからこそ、「主体の確立」ということをどのような内実で捉えるのか、ということが問題となる。

こうした「主体」の形成について考えるのは、初等・中等教育では追求するための条件が十分整っていないことから、大学に期待せざるを得ない、ということである。

第三に、「社会的協同」ということについて触れておきたい[11)]。「主体」の内実を規定する条件の把握にも関わるのだが、個人の価値判断・行動規範の形成ということとも関連して、「労働・生産過程」の編成を行うにあたって、「社会的協同」という視点が重要である、と考える。個別企業における労働過程に即した「キャリア教育」を出発点として、それを一般化する中で「キャリア教育」の内実を豊かにする、「学校教育」および社会教育・生涯学習において活用し得る教育プログラムとする、ということが今後実践的に必要とされてくる。その場合、個別企業から一般化を図る上で、「社会的協同」ということが、企業の個別性を捨象するとともに、地域における企業の発展方向を見据えた「労働編成」が客観的な意義・意味を持つものとして位置づけることが可能になる、と考える。この間の、

弘前大学における「あおもりツーリズム人づくり大学『はやて』」の実践からも、そうした一般化をはかることができるのではないか、と考える。

(2) キャリア教育プログラムの模索

これまで「大学開放」として展開されてきた住民を対象とした事業は、施設の「開放」などもおこなわれてきたものの、その主体は「公開講座」や「正規の授業開放」といった教育機能に基盤をおいたものであった。また、企業や行政等を対象として「産学連携」も行われてきたが、それは主として研究機能の「開放」として位置づけられてきた。

「キャリア教育」に焦点を絞った場合、「住民一般」というよりは「企業」への協力期待が大きいものとなるのだが、現時点では必ずしも企業の協力が容易に得られるとは考えにくい。

この間、筆者が関わってきた「教育支援プラットフォーム」では、企業・社会教育施設やＮＰＯの協力なども含め、漸く具体的に活動が追求されるようになってきた、というところである。とはいえ、そうした実践やこの間の「大学開放」の実績から、次のような具体的な課題が追求し得るのではないか、と考えている。また、現在ＮＰＯとして活動している組織、「Ｒ.ぷらっと」にも関わりをもっているのだが、この組織の活動などもふまえて、以下の点についてふれておきたい。

第一に、「キャリア教育」の一部をＮＰＯが実施している、という事例を紹介したい。すでに中学や高校では、児童生徒のインターンシップが定着をみせている。そうした、企業で職場体験を行う「事前指導」を、民間企業で働くＮＰＯスタッフが担当し、大きな成果を上げている、ということである。教師が担当する場合と単純に比較することはできないが、より職場の条件や「働く」ということの意味をふまえて、効果的な事前指導がなされている、ということである。

第二に、「教育支援プラットフォーム」を構成する団体・組織の中で、学校教育において利用できる「教育プログラム」の開発が進み、そのなかで「キャリア教育」につながるものが追究されてきている、ということである。

第三に、職業に関連する知識・技能の修得や資格取得に関わる事業を、企業やＮＰＯが実際に担っている、ということである。その中には、「大学開放」の事業展開と連携し得るものが多く存在している（例えば、「防災士」の養成講座を実施する等）。

第四に、社会人の学習の機会を積極的に大学・大学院が提供するようになってきている、ということである。

関連して、リカレント教育の重要性について触れておきたい。

平成23年に出された中教審答申の中で、生涯にわたる基礎的な能力の獲得について触れられている。今日の雇用状況、労働力市場の展開との関わりを今少し検討する必要がある、と考える。また、就職後、常に企業などで求められる技術革新などに対応した職業に関する新たな知識・技能の修得、自己能力の開発ということに対応して、高等教育機関に期待されることが大きい、と考える。とりわけ、中小企業などでは、企業内教育をアウトソーシングする傾向があるが、「基礎・基本」を重視し、その上で「応用」する能力を涵養するという意味では、高等教育が「リカレント教育」として展開するものへの期待が今後いっそう高くなるものと考える。

大学が研究・教育機能を積極的に「開放」しようという傾向が強まっているが、少子高齢化の傾向は、一段とそれに拍車をかけている。18歳人口を中心とした受験生の絶対数が減少する中で、入学定員を確保することが次第に困難な大学・学部が増加してきていることは否定できない。定員割れしないまでも、学生の確保を戦略的に展望して、現職の層や高齢者にも「大学で学ぶ」ということのすばらしさを体験してもらおうという試みや、そうした人々のニーズに対応した教育機会を提供しようという試みは確実に進展している。

Ⅴ．結び

「キャリア教育」への関心が高まり、学校教育において様々な実践が追求されるようになってきているとはいっても、必ずしも十分理論的に深められているとは言い難い。学校教育の基本的な役割として、「社会人・職業人を育む」ということよりも「受験」にシフトして「学力の向上」を図ることに終始している。今後真に「キャリア教育」の充実を図るならば、受験偏重の現状を変える「教育改革」も視野に入れる必要がある。

また、「キャリア教育」の「教育プログラムの開発」を追究していく上で、一方では地域における労働力市場等の実態をふまえ企業等との連携が必要とされている、と考える。他方では、一般化した「キャリア教育」の内実が深められなければならない。

さらに「学校教育」と「生涯学習」を結ぶことを視野に入れた場合、リカレント教育といった職業人を対象とした「教育プログラム」の開発も同時に必要とされているのであり、そこでは「大学開放」への期待も大きい、ということができる。

〈注〉

1）鈴木敏正「内発的社会経済発展と『地域をつくる学び』」（宮崎隆志・鈴木敏正編著『地域社会発展への学びの論理　下川町産業クラスターの挑戦』、北樹出版、2006年）。

2）なお、この点については、拙稿「生涯学習を拓く大学での学び」（『佐藤三三先生退官記念論集』、東信堂、2012年）を参照されたい。

3）「社会参加」を体験することの重要性に関連して、筆者は別の機会に「学習の成果を生かす」ということとの関連で触れたことがある。拙稿「生涯学習と社会参加」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第13号、2010年）参照。

4）この点については、すでに別の機会でふれているので参照されたい。拙稿「キャリア教育へのアプローチ―基本視点を模索して―」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第14号、2011年）。

5）高校生のリーダー育成事業において、大学生がファシリテーターとして重要な役割を果たしている、弘前市の事例がある。中澤倶志「地域社会から学ぶ可能性について～高校生地域づくりリーダー養成事業からの報告～」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第15号、2012年）参照。

6）ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク著／立田慶裕訳『キー・コンピテンシー』（明石書店、2006年）。

7）前田耕司「学校学力から生涯学力へ―生涯学習社会における学力の再構築―」（前田耕司・佐藤千津編著『学校学力から生涯学力へ―変化の時代を生きる―』、学文社、

2011年）。

8）「教育支援プラットフォーム」については、青森県教育支援プラットフォーム調査研究委員会『ボランティアスタッフ主体の推進エンジンをもつ「教育支援プラットフォーム」の構築に関する調査研究事業調査研究報告書』、2011年）を参照されたい。

9）平成23年度に青森県の受託事業として実施したもの。「人財」という用語は青森県の強く意図したもので、「人」の育成こそが「財産」である、という意味が込められている。この事業の詳細については別途紹介したいと考えている。なお、この間弘前大学では、「キャリア教育」としての性格を強く持つ事業として、「あおもりツーリズムひとづくり大学『はやて』」を、平成16年度から実施してきている。これをよりバージョンアップしたものとして「あおもり観光人財養成講座」が、2011年11～12月に企画実施された。これまでの「あおもりツーリズムひとづくり大学『はやて』」では、「ホスピタリティ」と「地域のプロデュース能力」の向上を図ることを主眼としてプログラムが用意されてきた。しかし、この「あおもり観光人財養成講座」では、受講者を「観光業・観光行政に従事している人」としており、プログラムの位置づけも、「企画・調整者」としての育成ということで、より専門性を高めたものに設定されている。さらに、「受講者参画型」の講座を志向して、「教育プログラム」の作成の段階から関係機関・団体（弘前市観光物産課、弘前商工会議所、弘前観光コンベンション協会、弘前青年会議所）と大学との「協働・協同」を追求していることが大きな特徴となっている。

10）藤田公仁子「今日的な大学の役割と地域生涯学習の方向性―持続的な発展を目指して―」（『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』、第13巻、2011年）。

11）鈴木敏正『教育の公共化と社会的協同―排除か学び合いか―』（北樹出版、2006年）。

大学の力を活用した子育ち・子育て支援のプログラムの検討
―育児世代への調査を中心に―

深　作　拓　郎
増　田　貴　人
古　川　照　美
生　島　美　和

Ⅰ．緒　言

１．本研究課題の背景

弘前大学生涯学習教育研究センター（以下センター）では、平成21年度より「子どもの育ちを考えるプチゼミナール」（以下プチゼミ）「託児付の連続育児支援講座」（以下育児支援講座）を開催している。プチゼミは、子どもに関心を持つ学生から現職の教員、保育士が話し合いをベースとした相互学習を繰り広げることで、学生の育児観・子ども観形成などの力量形成に寄与しているほか、社会人との関わりによる職業観や弘前という街への関心を高めている。社会人は大学で学びあうことでキャリアアップの機会となるだけでなく、学生と関わることによってボランティアの活用などの相互交流もみられつつある。育児支援講座は、転勤族や結婚とともに弘前に来た人など一定の学歴とキャリアのある方々で地域に友人知人の少ない層が多く参加している。

また、託児付の連続育児支援講座は、2009年から毎年11～12月に４回ぐらい、育児に関連する講座を開催し、３年間で延べ220人が受講してきた。講座では、一方的な講義だけでなく、受講者同士あるいは講師と受講者が交流できるようなプログラムを取り入れている。交流の場から、「高齢出産」「方言」「文化」「転勤で弘前へ来た」「近くに友だちがいない」という声が聞こえてきていたが、受講者アンケートからもそれを裏付けるデータが出てきた。30代・40代の受講者がほとんどで20代と回答したのは３年間で数名であった。また、短大卒以上が80％を占め、平成23年度では88％であることもわかった。自由記述を読むと「久しぶりに大人と話をした」、「自分は間違っていないという自信になった」などが書かれてあった。子育て支援センター等が整備されていても、大学の講座へ通う背景には、その内実はママ友がつくりづらい何らかの環境があり、それでもつながりたいという想いから大学の公開講座を受講していることが想定される。

このことから、受講動議についてさらに深く掘り下げて把握することが必要と考え、2011年の２月～３月に受講者からヒアリング調査を実施した。協力いただいたのは６名の方々である。ヒアリングから、ママ友がつくりづらい理由として大きく３つの柱があるこ

深作　拓郎（ふかさく　たくろう）　弘前大学生涯学習教育研究センター　講師
増田　貴人（ますだ　たかひと）　弘前大学教育学部　准教授
古川　照美（こがわ　てるみ）　弘前大学保健学研究科　准教授
生島　美和（おじま　みわ）　弘前学院大学文学部　講師

とがわかった。１つ目には、結婚や就職、夫の転勤がきっかけで弘前市へ転入してきており、人とのつながりが乏しいなかで育児がスタートしている状況にある。２つ目には、津軽地域に残る方言や生活文化、強固な同級生ネットワークに足がすくんでしまっている。３つ目には、人とつながるきっかけ探しをしようと努力している姿が浮かび上がった。大型スーパーのフードコート、文化センターや総合学習センターなどの公共施設のロビー、なかには支援センター等の育児サークルのいくつかをはしごする「サークルジプシー」をしているという声も聞こえてきた。

このことから、従来の育児支援施策では手の届かない層があり、その人たちは何らかの課題を感じ、自分なりの方法で課題の解決を目指した試みをしているが、解消には至っていないということが見えてきた。育児支援に求められていることとして、単なる育児サービスの充実・拡充だけではなく、人・サークル、あるいは行政をつなぎ、育児の問題を、学びと仲間づくりを通して、①自分たちの課題として、自分の存在・あり方を確認する、②「つながり」「支え合い」の関係構築、この２点を視座に置いた仕組みづくりが必要ではないかと考えた。

仲間づくりを目的とする子育て支援の事例として、大阪府貝塚市の取り組みがある。貝塚市では中央公民館が核となり、公民館主事がコーディネーターとなり、人やサークルをつないでいたが、そこには大学研究者がアドバイザー的立場で関わっていた。弘前の場合「学都弘前」として、大学の力や機能（研究者・学生・施設）と有機的につながりを創っていくことが可能性としてあるのではないかということに気が付いた。

２．研究目的と研究計画

そこで、見えてきた課題を踏まえ、大学の持つ力（研究者・学生・施設）を子育ち・子育て支援に活用する方策を検討することを目的とした調査研究を２カ年計画で行うことにした。

平成23年度は、弘前大学と弘前市との連携調査研究委託モデル事業の助成を受け、市民と学生を対象に育児に対する肯定感や地域に対する意識を把握するための調査を行い、その調査の分析をもとに、24年度では、育児支援講座のあり方、学生主体の地域との交流をより盛んにする子育ち支援プログラムを検討し、大学・学生・親・支援者それぞれの学習プログラムを相互連関させて、学都弘前における子育ち・子育て支援に活用する方策を検討し、市に政策提言することを目指している。具体的には以下の段取りを考えている。

１．学生の力を活かしたプログラムの実証研究と提言
　①23年度調査の分析継続と学生参加プログラムの検討
　②学生の育児支援プログラムの試行（弘大21世紀教育科目で特設科目を設置）
　　⇒育児支援、託児に関する知識・技術の学習、実践（託児ボランティア）
　③試行プログラムの検証と具体的方向性の検討
　　⇒参加場面（託児ボランティア、学童保育、子育て支援センター）、
　　参加形態（ボランティア、実習、単位）、
　　市内６つの高等教育機関での参加の可能性

2．市の子育て支援施策と研究者のパートナーシップの構築への提言

従来の審議会や委員会への協力に留まらず、子育て支援施策や事業でのパートナーシップを組んでいくための仕組みづくり。学園都市ひろさき高等教育機関をベースに６つの高等教育機関との関係構築を検討する

3．公共施設（公民館・児童館・児童センター・子育て支援センター等）への提言

4．シンポジウムの開催

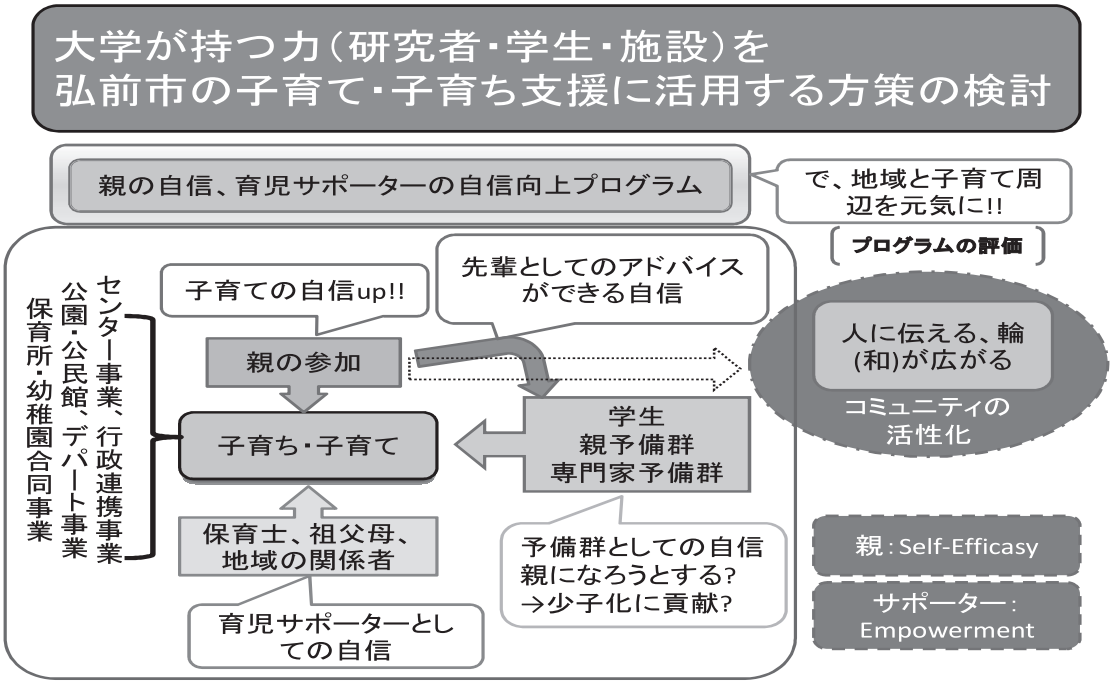
年度末に政策提言も含めて、大学の力と市が連携した子育ち・子育て支援のパートナーシップのあり方について、公開シンポジウムを開催する。

本研究は、親、保育者、子育てサポーターの支援をすることにより、地域の育児機能の強化が見込めるとともに、学生がプログラムに参加することで、育児に対するイメージが良いものへと変わり、少子化対策につながることも期待できる。親だけでなく、育児支援者へのアプローチ、学生の参加により複層的に子育ち・子育て環境の整備に発展させることを意図し、子育ち・子育てしやすい街づくりに寄与できるものであると考えている。

なお、本研究プロジェクトをイメージ化したものが図表１である。

本稿においては、平成23年度研究のうち、本研究の枠組みを検討するにあたり大いに参考とした大阪・貝塚における子育てネットワークの事例をもとにしたモデル分析、ならびに育児に対する肯定感や地域に対する意識結果について、その一部を報告する。

図表１　研究プロジェクトのイメージ図



Ⅱ．モデルケースの検証　―「貝塚子育てネットワークの会」について―

１．貝塚への注目

本プロジェクトは、調査研究、およびそれをふまえた実践として、単なる育児サービスの充実・拡充だけではなく、個人、各種団体・サークル、行政をつなぎ、学びと仲間づくりの場づくりを企図している。そこでは育児を自分たちの課題としながら自分の存在・あり方を確認するとともに、「つながり」「支え合い」の関係構築を行うことのできる仕組みづくり、といったビジョンを持つ。このような視角での先行事例として、大阪府貝塚市に見られる「貝塚子育てネットワークの会」の活動実践は注目することができよう。それは、子育て中の親同士が関心や課題を共有することでつながり合い組織化されていること、またその組織同士がネットワーク化されることで、地域での面的な広がりをもつ子育て環境がつくられている。多年代の子どもを持つ親がその時その時の状況下で支える側にも支えられる側にもなるという、持続的で主体的な関係が構築されていることにある。

大阪府貝塚市は、大阪府の南部に位置する、人口約９万人の近郊都市である。以前は繊維などの地場産業が立地していたが、現在は大阪や和歌山のベッドタウンとして、また至近の関西国際空港関連で働くサラリーマンとその家族によって、転出入者が多いが、総じてみれば人口は増え続けている。

「貝塚子育てネットワークの会」を成立させたせてきた背景には、住民の主体的な学びを支え、促進しようとする公民館活動（事業・場）および公民館職員の存在を看過できない。貝塚市では、戦後間もないころから社会教育関係団体により公民館設立の要望が高まり、1953年に900席を有する公会堂を併設した公民館が設置された。40年近くこの１館で貝塚市の公民館活動が展開されてきたが、この公民館が文字通り「文化活動の拠点」として地域に定着してきていた。1990年前後に新設された２館は若い新住民の利用を促すことになり、そのことはそれまでの趣味･教養的な内容が主流の講座から、子育て･教育･福祉･医療などの生活課題を中心とする学習が広がったという。さらにそうした学習は、建物のなかにとどまることなく、地域の学習の組織化や地域づくりに展開しているのである。

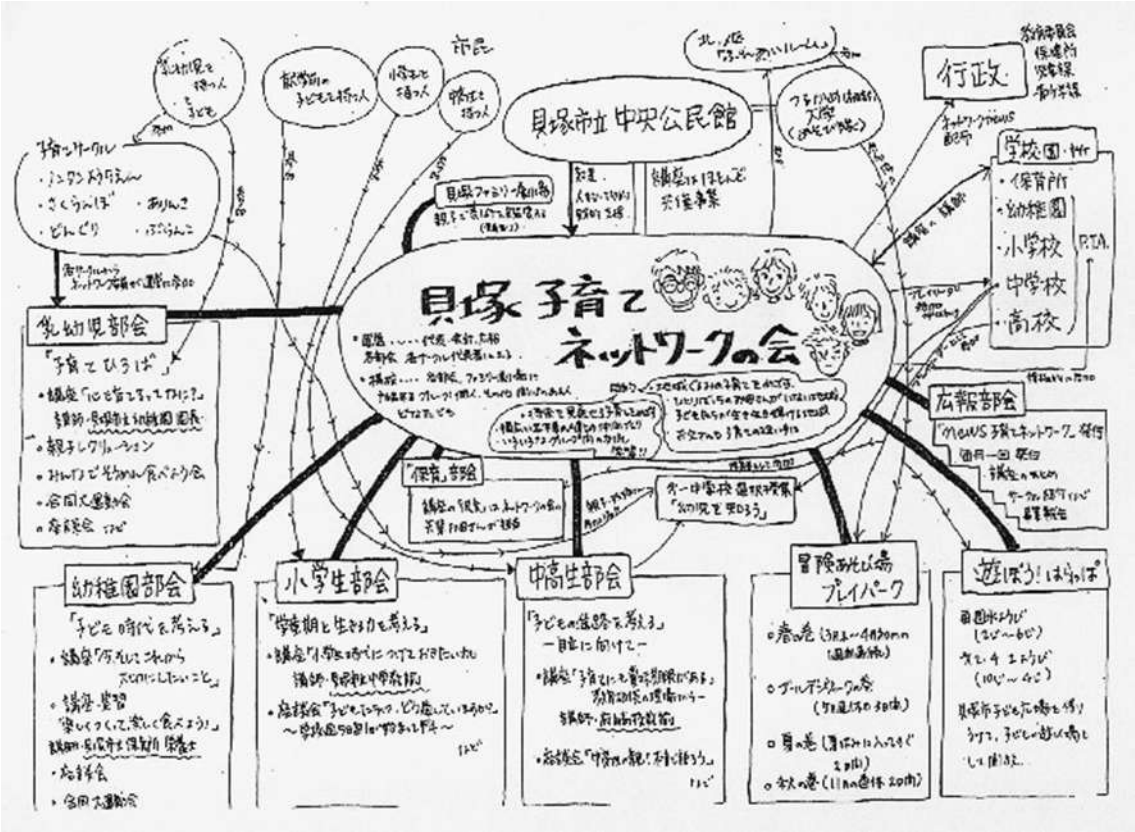
２．貝塚の活動の概要

1988年、保育つき講座、子ども文化の支援などを積み重ねてきた公民館の呼びかけにより、子育てグループの交流の場がもたれた。この際、公民館が実施した保育つき講座から生まれた自主グループ、保育グループ、親子劇場や公民館の保育ボランティア、母親連絡会などの７つの団体と、保母や保健婦などが参加した。そしてこれがきっかけとなり創設されたのが「貝塚子育てネットワークの会」である（図表２を参照）。

「貝塚子育てネットワークの会」は、活動の目的として「ひとりぼっちのお母さんのいない地域をめざそう」「こどもたちがいきいきと輝ける地域をつくろう」「お父さんも子育ての担い手」を掲げている。そして乳幼児部会、幼稚園部会、小学生部会、中高生部会といった部会を設けて活動を拡げている。子どもの年代、各団体の特性や活動内容に多様性を持つ団体が個別に活動するだけではなく、それらの団体同士がつながり合い有機的に結びつくことによって、自分たちが行っている活動を基盤としながら、地域の子育て環境を作っていこうとするものである。

このような、まさに子育てに関わる地域団体のネットワーク組織である「貝塚子育てネットワークの会」が実施する独自の活動としては、公民館講座の共催やリーダー研修の企画・運営、日常的な取組みとしての「プレイパーク」や、学校と地域社会との連携事業がある。さらに1995年の阪神淡路大震災を受け、「子育て」の取組みだけでなく「老い」の活動との交流を行い「支え合い、助け合いの地域づくり」が進められてきた。

図表２　貝塚子育てネットワークの会　組織図



３．貝塚の活動の特徴

「貝塚子育てネットワークの会」の特徴について、弘前市の現状および子育て・子育ち支援について引きつけて考察すると、次の３点に注目することができよう。

第１に、「地域ぐるみの子育てをめざす」と言われているように、面的な広がりの中で、多世代でのネットワークを構築し、「支え合い、助け合いの地域社会」を目指した活動が行われている。そのことは、同じ年代の子どもを持つ親同士がつながり合うだけでなく、自分の子どもよりも少し大きな子どもを持つ「先輩親」との関わりを持つことにもなり、「将来を見通せる子育てをめざす」ことにもつながっている。こうした関係は、参加者が子育てを終えたのちも、子育て支援者や自らが暮らす地域社会形成の担い手として継続的な関与を促すことにもなっている。

第２に、「貝塚子育てネットワークの会」が行っていることは、育児支援サービスの受給者を漏らさないようにすることではなく、一人ひとりが子育ての担い手であるという主体者意識を醸成していることである。言い換えれば一方的な育児サービスの提供をするの

ではなく、「子育て」を巡るさまざまな悩みや状況を自らが直面する生活課題として共有し、語り、学び合いながら、つながりあう・支え合う関係を構築してきていることである。この直面する課題に対する学びだけでなく、課題を共有できる仲間づくり、個人の問題を公共の課題として公準化させていくといった一連の動向が、「子育てネットワークの会」の事業を成立させる基盤であり、また参加者の学習の深化として捉えることができる。

第３に、こうした参加者の学習の深化・展開を成人の学び・生涯学習として支えているのが、公民館及び公民館職員によるファシリテートである。公民館は場所や学級・講座といった学習機会の提供を行うことが目的の公共施設ではない。それらをきっかけとしながら、市民の主体性を引き出し、社会に参画する力量形成を行うことを念頭においている。したがって公民館職員は、当該地域に暮らす全住民（公民館に通わない住民も「潜在的な公民館利用者」である）に目を向け、学級・講座などをきっかけとしながら、同じ課題を持つ人との出会いや学習のきっかけを作りながら、彼らの学習活動の広がりや深まりに寄り添い、見通しながら、ネットワーク形成のコーディネート、人・団体をつなぐ役割を果たしているのである。貝塚市の、こうした地域社会形成に参画する市民の力量形成の場としての公民館を重要視し、そこでの市民の学習活動に対する職員のファシリテートに期待を寄せていることは、公民館主事に社会教育主事有資格者を充て、社会教育部門の「専門職員」として位置づけていることからも理解することができよう[1]。

４．考察

弘前大学生涯学習教育研究センター主催の託児付き育児支援講座において見られた、参加者の子育て・子育ちを暮らしの課題として向かい合う姿と、「つながり」「支え合い」の関係構築への希求を念頭に置くとき、まさに1990年初頭からその実践を作ってきている「貝塚子育てネットワークの会」の活動、およびそれを支える貝塚市の事例は、まさに我々のモデルケースとなると言えよう。この貝塚の事例を参照しながら、弘前市が持つ歴史的・文化的・社会的背景や資源や弘前市民の生活状況をもとに「弘前モデル」を作っていくことが求められる。

①大学・高等教育機関の関与

貝塚市の場合は、戦後直後、社会教育関係団体の要請活動により設置されてきたことで市民の期待と信頼を受け、専門職員としての配置によって学習を支えることで、それに応えてきた公民館が中心となってネットワークが構築されている。ネットワーク構築は、こうした貝塚市における社会教育および公民館に対する歴史的・社会的な背景と切り離して考えることはできないであろう。

一方、弘前市の場合は、大学（高等教育機関を含む）の存在こそが資源であり、特徴であり、また市民の生活を行う上で切り離して考えることができない[2]。これは研究・研究者しかり、教育の場・施設しかり、学生（若い力）しかりである。公共施設・教育機関も含む行政セクター、市民団体のみならず、大学が組織的に関与したモデルを構築することが弘前市の実態に沿うものとなると考えられる。2010年以降、市内にある６つの大学・高等教育機関が連携し、大学が持つ力の向上、学生・研究者間の有機的な交流、地域貢献を目指す事業が動きつつある。大学が持つ資源を地域に発信し共有することは、こうした機関と地域がともに成長していくことになる。

②長期居住者・短期居住者を見据えた地域コミュニティの構築

城下町であり、津軽地域では中核的な地方都市として政治・経済活動の活性化が期待される弘前市であるが、そうであるからこそ、津軽の歴史的・社会的・文化的背景をもつ地域社会の一方で、流動人口も多いという多面性を持つ地域である。地域の歴史・文化を強調することももちろん必要であるが、それが見えない壁となる層があるという仮説も導出されてきている。これらを検証しながら、居住の長短に関わらずに子育て・子育ちをしやすい持続的な仕組みづくりをすることが求められよう。

また、長期居住者に多く見られる三世帯同居などからは、子育て世代が雇用労働者となり、祖父母世代が孫の世話をする、いわゆる「孫育て」の実状も浮かび上がっている。

加えて、貝塚市においては、阪神大震災がネットワークのあり方を見直すひとつのターニングポイントとなっていたが、弘前市においても2011年の東日本大震災時に感じた危機意識・共助・公助の動きと想いを希薄化させてはいけないであろう。震災後の弘前市の動向は、直接的被害を免れたことから、被災地支援への傾注が大きい。しかしながら、停電・断水、物流の遮断といった非日常の経験は、弘前市においてもまた貝塚で掲げられた「支え合い、助け合いの地域をどうつくるか」を検討される必要があることを突き付けている。我々が持つ研究ビジョンは、単に子育て中の親だけの問題ではなく、孫育てに関わる祖父母世代や、豊かな育ち・自己形成とともに次世代の親となる児童・若者の世代、一人暮らしもしくは通学をする短期的滞在をしながら、弘前を学びの場とする学生という具合に、弘前で居住・通学・通勤といったすべての市民の生活のセーフティネットの必要性を浮かび上がらせるものであり、そうした事業のひとつの萌芽的実践になるであろう。

Ⅲ.「弘前市における子育て・孫育てに関する意識調査」の概要

1．調査目的

これまでに示された、1．研究の背景、および2．貝塚市のモデルケースの検討に基づく背景、すなわち、「大学が持つ力（研究者・学生・施設）を弘前市の子育て・子育ち支援に活用する方策の検討」のモデルをとおして地域のなかで子育てをするシステムを再検討するとき、その支援は、現在子育てをしている人たち（以下、“育児群”）への支援に留まるものではないことは明白である。つまり、①育児群に対する育児と生活への支援を軸としながらも、②既に子育てに一段落している人たち（以下、“離育児群”）による地域参加や子育て世代への先輩としての助言・援助、“孫育て”に対する支援や学習、③今後子育てをする世代の人たち（以下、“学生群”）に対する子育てへの意識醸成・親性準備性学習・専門家予備軍としての教育、といった支援も包括するような、生涯学習的視点による支援体系を検討していく必要がある。この視点は、金田（2003）の視点[3]とも大いに重なる。すなわち、大人の生活活動について、「自己決定の公使」「労働による社会的生産活動」「生活の自立」といった自己が主体となる活動に加えて、自己を抑えて次の世代のことを考える「世代の再生産」の視点活動を加えなければ、望ましい各種の習慣や技術が持続していかないことを指摘するものである。

大学は、教育対象として学生群の世代を数多く抱えているだけでなく、地域に根ざした

社会貢献活動として幅広い世代に対して有益な活動に取り組むことが強く求められるようになった。中規模総合大学として地域の知の拠点であることを自負する弘前大学、また弘前に立地する他大学、いずれにせよその例外となる大学は存在しない。子育て・子育ちの視点でこれらをみたとき、青森県の学都・弘前を主たるフィールドとして、全ての世代に対して専門的な助言・支援ができる立場にある大学を効果的に活用しながら各種活動の活性化を図っていく視点は、自然な考え方といえる。

しかしながら、子育て・子育ちの支援を世代の再生産、もしくは生涯学習的視点で見直していくことについて、あるいは弘前の大学が子育て・子育ち分野に貢献していくことについて、それぞれ散発的に展開されてきた例がないわけではないにせよ、体系的に検討されているわけではなかったことから、これまで十分に知的蓄積があるとは言い難い。そこで本調査では、学生群・育児群・離育児群それぞれに対して、地域での子育て・子育ちに関する調査を実施し、支援プログラム検討に際しての基礎資料としたいと考える。

2．調査の手続き

調査対象は、詳細は図表３のとおりである。2011年11月～2012年１月を調査期間とし、学生群・育児群・離育児群それぞれに対し、調査紙を郵送した。すなわち対象は、学生群として弘前大学および弘前学院大学の学生298人、育児群および離育児群は、弘前市子育て支援課の協力の下、弘前市住民基本台帳から対象者を無作為抽出し、育児群は０～６歳の子ども2,500人の保護者5,000人、離育児群は50歳以上の男女2,500人である。そのうち、宛先不明により返送されたものは、学生群０通、育児群29組58通、離育児群35通であった。

調査項目は、①基本属性、②子育て･子育ち観に関する24項目、③親性に関する25項目、④地域生活における関心や姿勢に関する23項目、⑤自由記述、にて構成されている。なお調査紙の作成にあたっては、学生群・育児群にとっては子育て・子育ちに関する調査となるが、離育児群にとっては子育て・子育ち以外に孫育て・孫育ちの視点も含むことを考慮している。

本報告書においては、調査結果について、a.①基本属性の特徴、b.②子育て・子育ち観に関する24項目・③親性に関する25項目・④地域生活における関心や姿勢に関する23項目についての調査対象市民全体の結果、c. b.と同じく②～④の全項目についての各群別の結果、d.育児群に焦点化した分析結果、として報告する。⑤自由記述については、分析途中であることから、本報告では結果の詳細について割愛する。

図表３　　調査対象

	配布数	回答数	回収率	備　　考
【学生群】 弘前大学・弘前学院大学の学生	298	288	96.6%	複数の授業を通じて配布。一般教育科目を中心に専攻の偏りは可能な限り考慮した。
【育児群】 ０～６歳の子どもの保護者	4942	1031	20.9%	０～６歳の子ども2500人の保護者として、２通ずつ配布。29組（58通）返送。
【離育児群】 50歳以上の男女	2465	759	30.8%	35通返送
合計	7705	2077	27.0%	

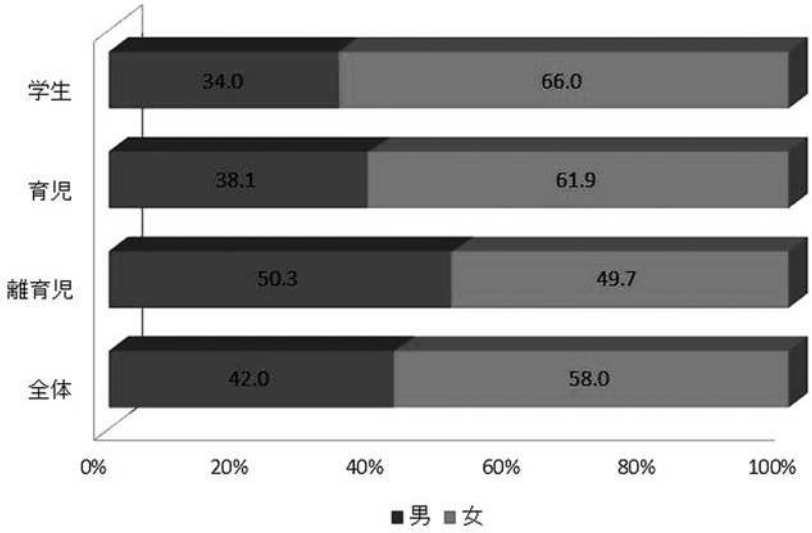
３．調査結果 ―全体的な傾向―

１）属性について

①男女比及び回収率

まず本調査において、図表３のとおり、回収率が、学生群が96.6%、育児群が20.9%、離育児群が30.8%となったことについて言及しておきたい。子育てに関する調査は、どの調査においても、概ね男性の回答率が極端に低いことがよく知られており、対象が母親主体になりがちである。本調査も、育児群においては回答の６割以上が女性による回答となる（図表４参照）など、この例に漏れない結果であった。このことは、単なる調査手法の問題だけではなく、地域における男性の育児意識も影響している可能性がある。これらはさらなる分析・検討課題となるものと思われる。

図表４　　調査対象別にみた回答者の男女比



②居住年数

居住年数を検討した結果が図表５である。

学生群については、全国各地から学生が受験しており、県内でも中南津軽地域出身者以外は長期居住となりにくいという背景がある。実際、弘前周辺地域出身者は36名（12.5%）であった。

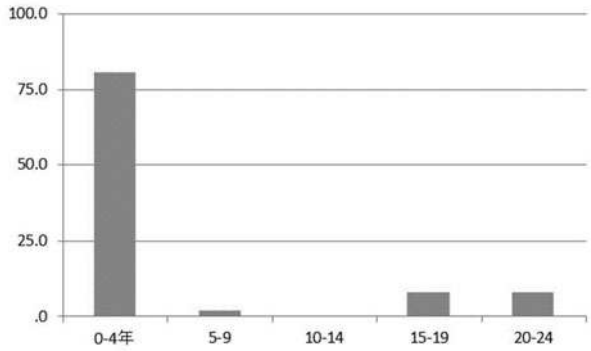
育児群は、回答者が近年弘前で居住し始めた層、いわゆる転勤族と、長年居住している層とで二極化している傾向が読み取れる。長年居住している層の中核となる弘前で生まれ育った回答者は295名（28.6%）であり、従来の子育て支援がこの層に効果的に機能していたのに対し、そこには加われなかった層が大学の託児付連続講座に流れていたのは既に記述されているとおりである。その背景を考慮すると、育児群で長年居住している層は拡大家族・三世代同居層が、近年弘前で居住し始めた層と核家族層とが相関している可能性が非常に高い。

離育児群は、その大半（63.2%）が30年以上の長きにわたって弘前に居住しているという結果であり、居住年数29年以下の全ての層が７％に満たしていなかった。調査対象市民全体の結果としては、居住年数４年以下と30年以上との双極的分布であったが、居住年数４年以下は学生群・育児群、30年以上は離育児群の影響が色濃く表れていると思われる。

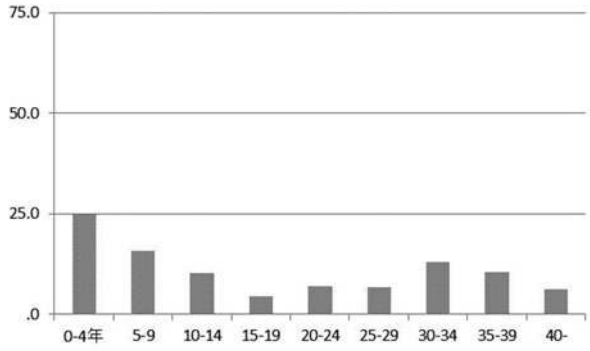
図表５　　調査対象別にみた回答者の居住年数

（いずれも横軸が居住年数カテゴリー、縦軸は％を示す）

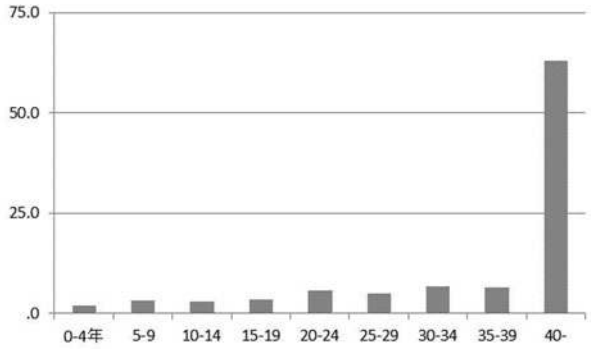
ア．学生群



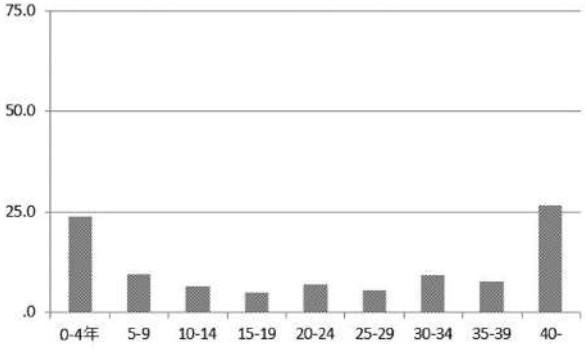
イ．育児群



ウ．離育児群



エ．全体



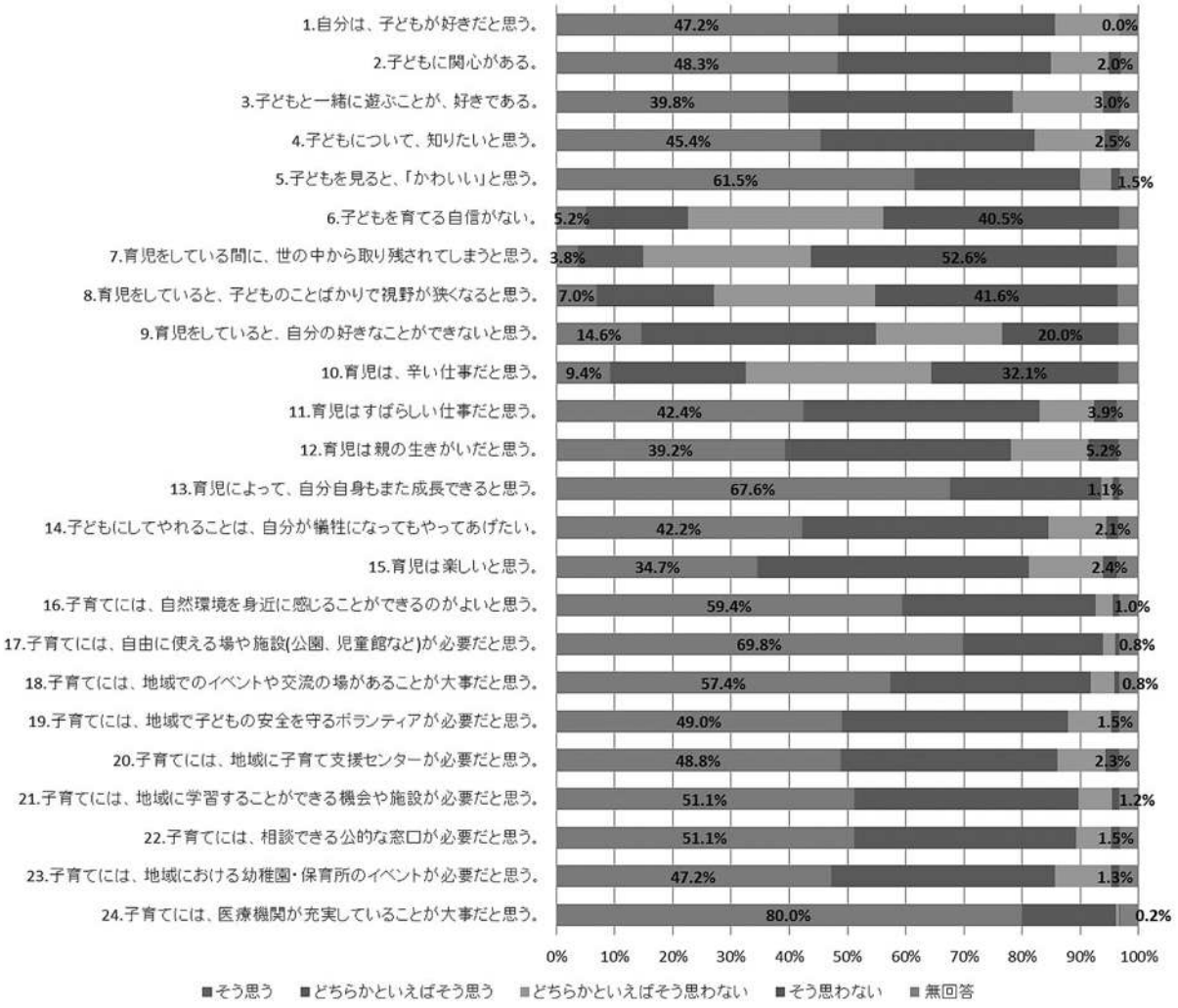
２）学生、育児、離育児群すべてを市民全体ととらえた、子育てに対する考え方

市民全体の子育てに対する考え方を示した結果が図表６である。

弘前市民の約2,000人となる対象者の子育てについて意識について、半数が子どもに好意的であり、育児にポジティブなイメージを持っていると思われる。さらに、13.育児によって、自分自身もまた成長できると考えている人が67.6%もあり、育児が大人の精神的成長につながると捉えている。また、子育てには、医療機関が充実していることや自由に使える場としての公園や児童館が必要だと思っている。

図表６　　子育てに対する考え方（市民全体）

（図の％は大変そう思う、全然そう思わないのみ記載）



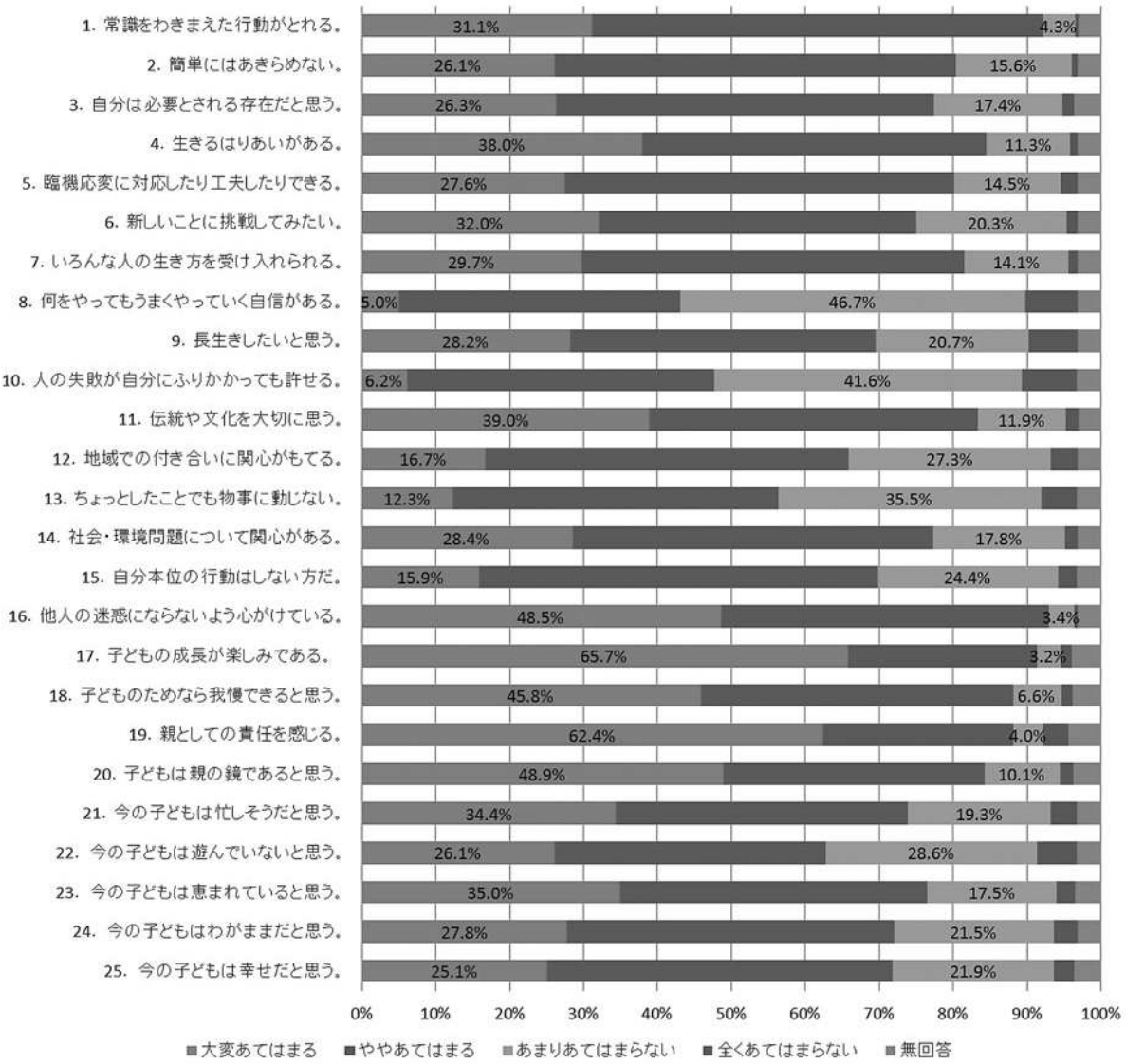
３）学生、育児、離育児群すべてを市民全体ととらえた、親性、子ども観について

市民全体の親性に対する考え方を示した結果が図表７である。

親としての人格特性である親性の項目１～16のうち、ほとんどの項目の３割弱が大変あてはまると答えている。「地域での付き合いに関心がもてる」が16.7%とやや低いが、「伝統や文化を大切に思う」が39.0%である。子どもの成長を楽しみにしており、親としての責任も感じている。子ども観について、遊びや忙しさ、わがまま、幸せなどは、あてはまる、あてはまらないと捉え方が半々であり、現代の子どもの状況が必ずしも良好だとは言えないと考えていると思われる。

図表７　　親性・子ども観に対する考え方（市民全体）

（図の％は大変あてはまる、あまりあてはまらないのみ記載）



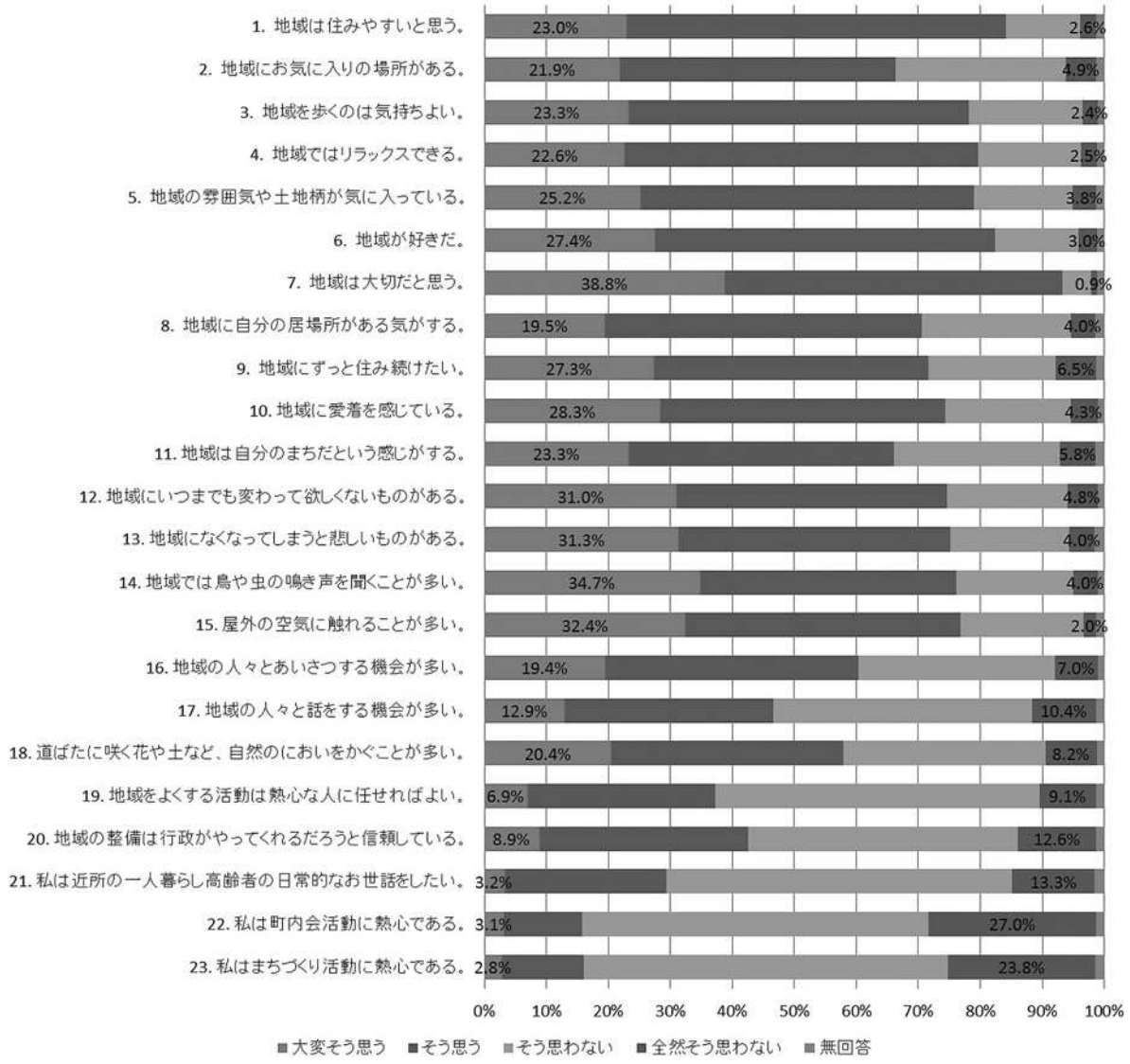
4）学生、育児、離育児群すべてを市民全体ととらえた、地域生活における関心や姿勢について

市民全体の地域生活への関心や姿勢を示した結果が図表８である。

まちづくり、町内会活動以外の項目については、大変そう思う、そう思うと合わせると約７割の人が肯定しており、地域愛着を感じている人が多いと考えられる。特に「地域は大切だと思う」は９割以上を占めている。また、８割以上の人が住みやいと思っている。住みやすさや地域の大切さ感から、地域活動参画への動機づけをすることによって、地域生活が良好になり得るのではないかと思われる。

図表８　　地域生活への関心や姿勢（市民全体）

（図の％は大変そう思う、全然そう思わないのみ記載）



5）子育てに対する考え方、項目別学生群・育児群・離育児群の比較

子育てに対する考え方の各項目について、比較した。学生は、離育児群より子どもへの関心があり、子どもについて知りたいと思っており、また遊ぶことが好きであると答えている。子どもとの遊びを通してなどにより、子どもへの関わり方を学ぶ機会を与えることで、育児予備群としての自信をつけていくことができると思われる。

育児観としては、離育児群が「育児をしている間に、世の中から取り残されてしまう」「育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなってしまう」「育児をしていると自分の好きなことができない」といった、育児のマイナーなイメージを持っている割合が少なく、経験者ゆえの、世間一般的に言われている育児のマイナーなイメージを打ち消すことができると思われ、学生や育児群に対して、育児に対するポジティブなイメージを醸成できる可能性がある。また、育児群は「育児はすばらしい仕事」「育児は楽しい」と思っている割合が高く、育児当事者としての楽しさ、素晴らしさを学生に伝えることができると思われる。

子育てに関する環境については、育児当事者である育児群が、ほとんどすべての項目について必要性を感じている割合が高く、自然環境の身近さや自由に使える場所や施設、子育て支援センターや交流の場を望んでいる。一方、離育児群では、子育て支援センター、学習できる機会や施設、幼稚園・保育所のイベントの必要性をどちらかといえばそう思わない（必要でない）と答えている割合が高かった。子育て支援センターや学習する機会や施設などは、離育児群が育児していた時代にはなかった可能性があり、必要性を感じていないことが推察される。地域での幼稚園・保育所のイベントは、過去より行っていたと思われるが、離育児群はいわゆる専業主婦で、幼稚園・保育所との関係が薄かった可能性も考えられる。

以上から、世代によって、子育てに対する考え方は異なり、それぞれの世代で持つ、育児に対するポジティブなイメージを活用し、育児予備群である学生への育児支援プログラムや、離育児群が持つ、経験者ゆえのポジティブなイメージを活用した、育児世代への育児応援プログラムに示唆がえられると思われる。

6）親性、育児肯定感各項目の学生群、育児群、離育児群の比較

親としての人格特性である親性16項目では、育児群と離育児群では構成割合がほぼ似ていたが、学生は異なっていた。例えば常識をわきまえた行動、必要とされる存在感、生きる張り合い、臨機応変に対応したり工夫したり、社会･環境問題についての関心などである。このようないわゆる社会性と位置付けられる意識は、必ずしも親になってから備わるものではないと思われるが、親になってからさらに高まってくるものと思われる。また、一度親になることで高まった親性は、育児を終えてからの世代になっても変わることなく、持続する可能性も示唆される。

一方で、いろんな人の生き方を受け入れることや新しいことへの挑戦は、若い世代ゆえの柔軟性が感じられる。離育児群は、伝統や文化を大切に思う割合が高く、この項目は育児を終えた後においても向上していくことが考えられる。しかし、地域での付き合いに関心がもてる割合が、離育児群が低く、伝統や文化を大切に思う反面、地域への関心は必ずしも高いとはいえず、その背景にある要因を検討していく必要はある。

育児肯定感である「子どもの成長が楽しみである」「子どものためなら我慢できる」「親としての責任を感じる」「子どもは親の鏡である」は、離育児群が学生よりは肯定する割合が高いが、育児当事者である育児群がさらに高く、まさに育児している状況下で認識できる感情と思われる。そのような感情を育児予備群に伝えることで、親としての心理的な準備につながる可能性がある。

現代の子ども観については、大変あてはまる、ややあてはまるが離育児群、育児群、学生群と順になっているが、大きな差は認められず、「現代の子ども」としての考え方は、一般的に言われている子どもと近所の子ども、さらに自分の子どもの像と、あまり異ならないのではないかと思われる。社会一般的に言われている子ども像は、都市部でも農村部でもあまり違いがない可能性が示唆される。また、大人たちの意識としても「現代の子ども」として、自分自身の、あるいは近所の子どもたちを捉えているのではないかと思われる。「現代の子ども」の共通理解と世代間共通の「子ども観」を活かして、子育て支援プログラムを構成してくことで、世代のギャップを感じさせないことができるのではないかと思われる。

7）地域生活における関心や姿勢の各項目の学生群、育児群、離育児群の比較

世代で違いがなかったのは「地域は大切だと思う」の項目であった。世代を違えてもその大切さは変わるものでないということが示唆される。住みやすさや地域への愛着、ずっと住み続けたいという意識は、学生より育児群、離育児群が高く、大学就学のために一時的に在住している学生が、地域の住みやすさを感じ、愛着を育み、住み続けたいと思うような取り組みがあれば、この地域に永住する可能性が考えられる。一方で、学生の方が地域にいつまでも変わって欲しくないものや、なくなってしまうと悲しいものがあると答えており、「地域ならでは」のものを感じていることが推察される。今後は、それは何かを問うことで、この地域の残しておくべき文化や財産が明らかになると思われる。

「地域はリラックスできる」「地域の雰囲気や土地柄が気に入っている」「地域が好きだ」「地域に自分の居場所がある気がする」という地域愛着感は、大変そう思う、そう思うを合わせれば、離育児群が多く、長く住むことで愛着感が高まっていることも考えられるが、居住年とともにさらに詳細に解析する必要がある。

離育児群は、地域の人々とあいさつする機会や話をする機会が多いと答えている割合が多く、ともに鳥や虫の鳴き声を聞くことや屋外の空気に触れること、道ばたに咲く花や土など、自然のにおいをかぐことが多いと答えている。これは、学生や育児群に比べ、日中外出する機会が多く、それゆえ空気や草花に触れ、さらに外出することで、地域の人々とあいさつする機会や話をする機会に恵まれているからではないかと思われる。学生や育児群に対して、地域の人々とあいさつや話をする機会をつくるためには、休日などを利用して外出することや、地域を散策することなどを勧めることも効果があると思われる。

地域の人々とあいさつする機会は、育児群、離育児群になるにつれ多く、学生は4割弱であった。学生では地域の人々と話をする機会はさらに少なく、学生が地域の人々と交流する機会が少ないことが伺える。しかし、町内活動や町づくり活動は、学生と育児群はほぼ同様で、地域活動に関心が薄いこの世代の特徴とも思われるが、地域の人々との交流の場を増やし、さらに活動に積極的な離育児群との交流の場をつくることで、地域活動への

意識が向上するのではないかと思われる。離育児群に対しては、学生や育児群と交わる活動が、ひいては町づくり活動につながる可能性があることを示唆するよう、相互の町づくり活動の活性化につなげていくようなプログラムが有効であると思われる。

4．調査結果 ―各群の傾向―

1）各群の子育て・子育ち観について

子育て・子育ち観について、その結果を群別に示したものが図表９～11である。

学生群

子どもへの愛玩性（5.）や育児による成長期待（13.）などの項目への肯定的回答、もしくは育児による孤立感（7.）や視野狭窄（8.）などの項目への否定的回答から、育児についての憧れや願望が大きい一方他人事として見聞きする範囲に留まっていて現実性には欠

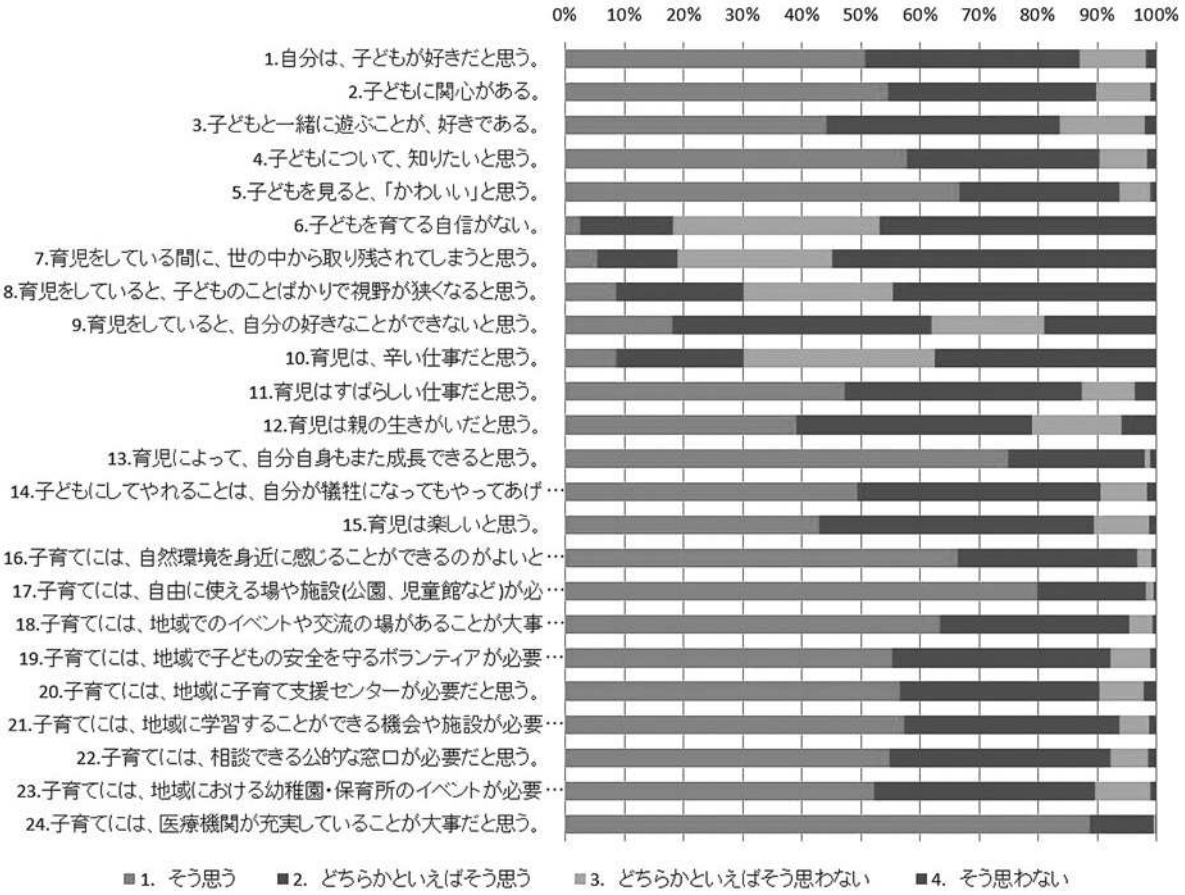
図表９　　子育て・子育ち観の結果　（学生群）

けており、自分のこととしてとらえ切れていないことが示唆される。そのため、子育てへの自信（6.）や育児の辛さ（10.）のように我が事として考えることが求められる項目は、賛否の意見が大きく割れる結果となった。

育児群

全般的に、育児について肯定的な回答が目立つ。育児に対する自信のなさや孤立感、視野狭窄、私的活動の制限、辛さ(6.～10.)についてはいずれも否定的回答が目立つ。また、(6.)や肯定感がある人が多い。また、子育てにおける関係資源（公園や児童館、医療機関など）の充実の必要性についても、その意識が高いといえる。

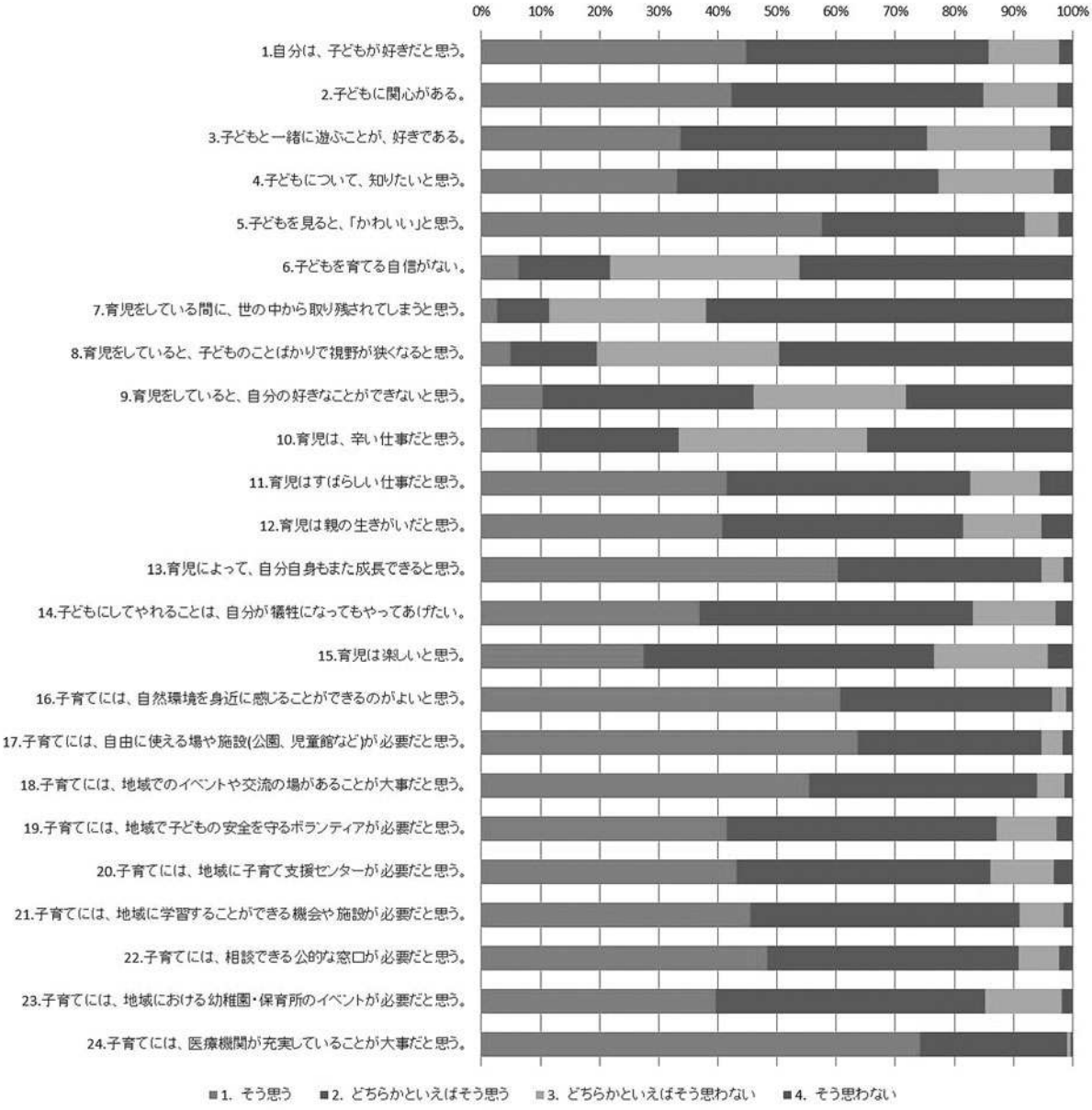
図表10　　子育て・子育ち観の結果　（育児群）



離育児群

回答の傾向は、育児群と同じであるが、その肯定的回答の傾向が育児群よりも強い。これらは一度育児を経験していることをふまえて、「今ならうまく子育てできるのではないか」という思いの表れとも読み取れる。一方、子育てにおけるイベントや関係資源（公園や児童館、医療機関など）の充実の必要性については、育児群ほど意識が高いとは言い難い結果である。

図表11　　子育て・子育ち観の結果　（離育児群）



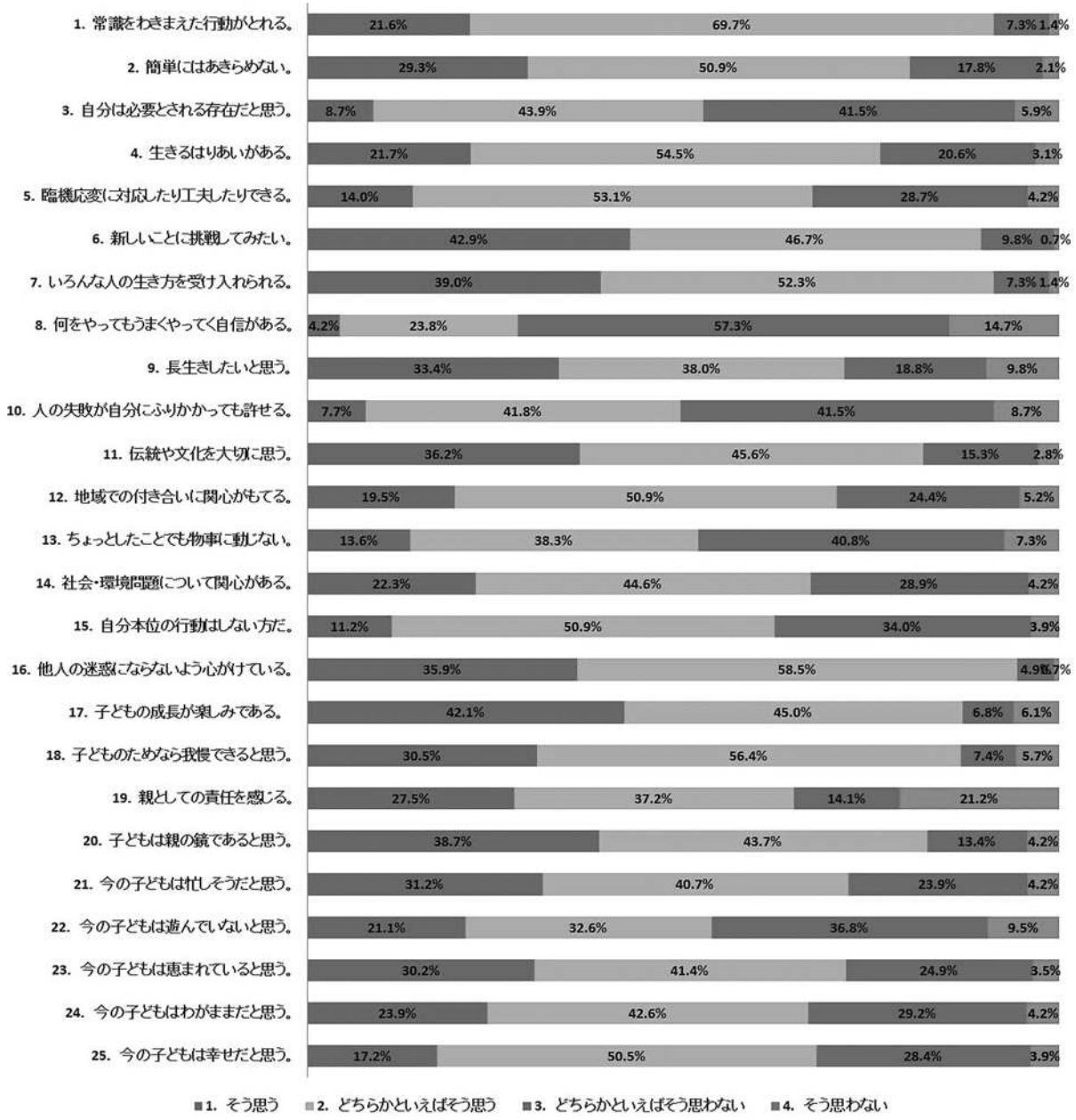
2）各群の親性・子ども観について

親性・子ども観について、その結果を群別に示したものが図表12～14である。

学生群

各項目への回答は概ね肯定的であったが、他者から必要とされている意識（3.）や活動に対する自信（8.）の低さ、あるいはちょっとしたことにも動じてしまうという自覚（13.）が特徴的である。すなわち、できるだけ常識的に振る舞おうとするものの、自信がないため周囲にあわせようとする傾向が強いことが示唆される。

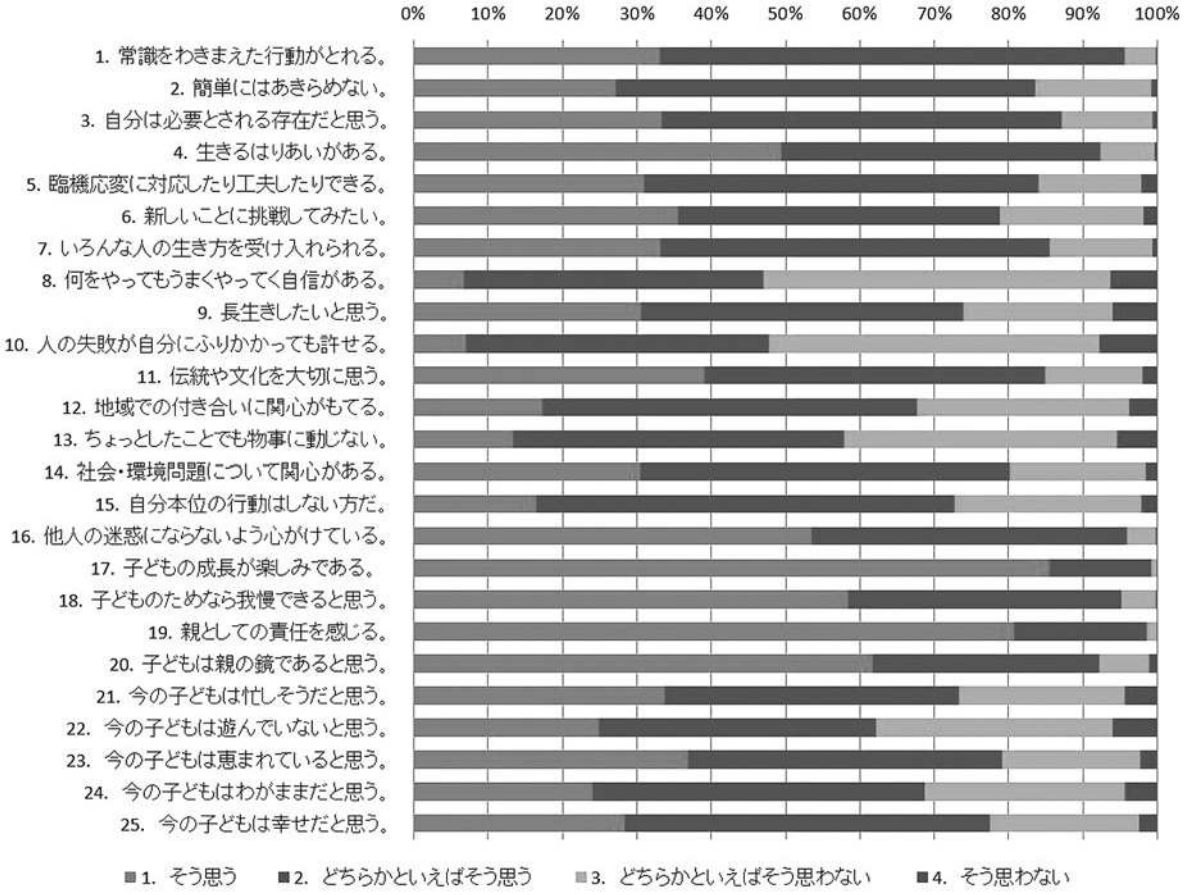
図表12　　親性の結果　（学生群）



育児群

生きるはりあい（4.）を持っていたり、伝統や文化を大切に思っている（11.）傾向が読み取れる。また、子どもの成長を楽しみにしており（17.）、親としての責任として常識的な行動をとることにも意識が高いようである（1.、16.～20.）。

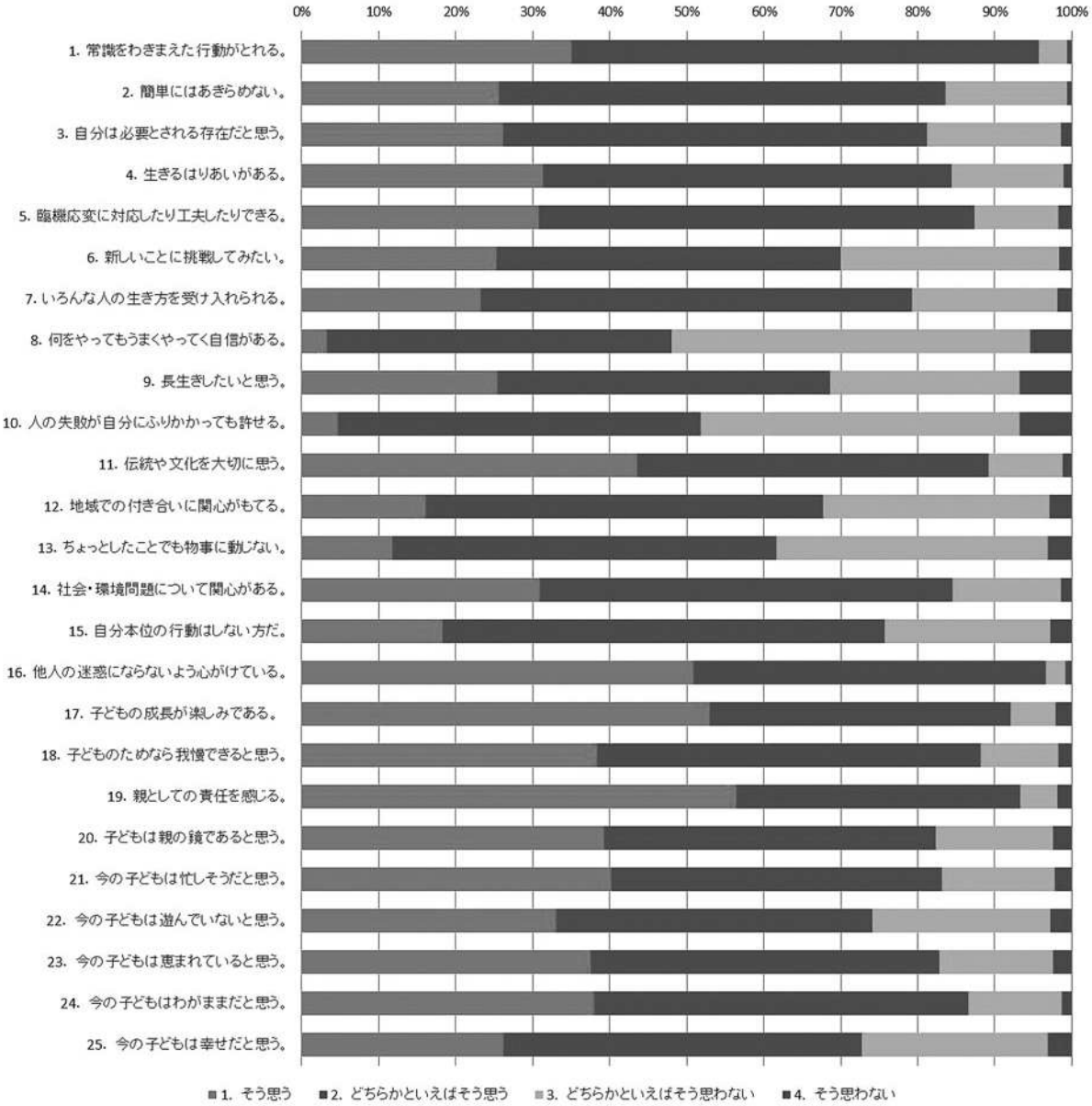
図表13　　親性の結果　（育児群）



離育児群

回答の傾向は、やはり育児群と近しいようにみえるが、特に子どもの成長（17.）への期待は大きく、また常識（1.）や他人への迷惑（16.）、親としての責任（19.）の肯定の強さが目立つ。一方で、周囲とうまくやっていく自信は乏しく（8.）、社会・環境問題への関心の高さ（14.）など、家族関係のようなミクロ的視点から地域・社会といったマクロ的視点へと育児の関心が転換していることがうかがえる結果となった。

図表14　　親性の結果　（離育児群）



3）各群の地域への愛着について

地域への愛着について、その結果を群別に示したものが図表15～17である。

学生群

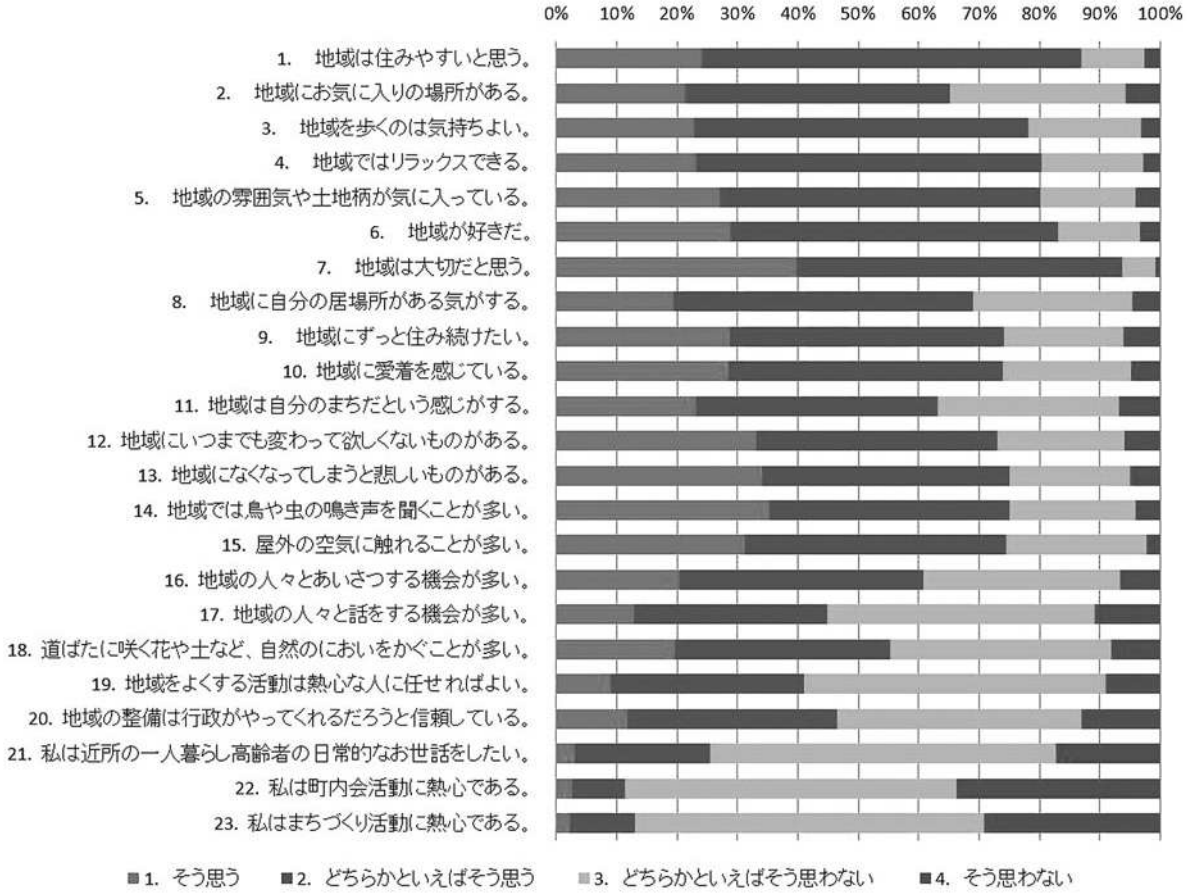
学生群において、中南津軽出身者１割強であったことや、居住年数が４年以下の層が最も多かったことを考慮すると、学生群の多くは弘前という地域との関係は希薄であり、愛着もそれほど感じていないと考えられる。しかし地域の大切さ（7.）への意識は高く、あくまで弘前との関係が乏しいのであって、出身地である自分の地元は大事であり、その地域への強い愛着をもっていると考えるのが妥当であろう。

図表15　　地域との愛着　（学生群）

育児群

地域の大切さ(7.)、変わってほしくないもの(12.)、なくなってほしくないものがある(13.）と思っている傾向が高い。また地域に対する住みやすさ（1.）を感じているなど、地域に対する肯定的意識がうかがえる。しかし、町内会やまちづくりなどの活動（22.～23.）には熱心ではないことを自覚しているようでもある。

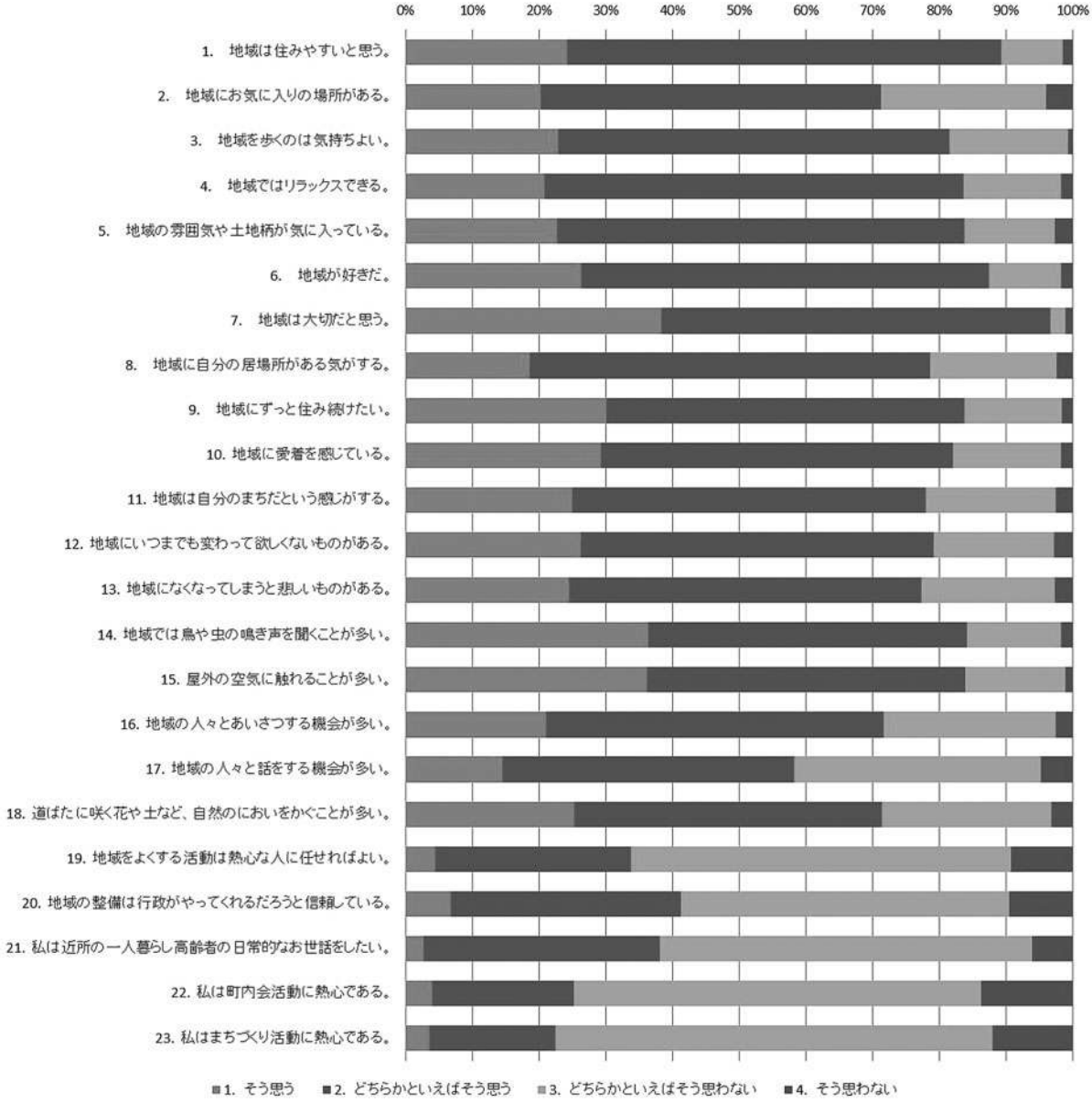
図表16　　地域との愛着　（育児群）



離育児群

地域に対する住みやすさ（1.）や大切さ（7.）は非常に高い意識があると考えられる。また屋外活動や自然との接触（14.～15.）の肯定的回答が高い点も特徴的であるといえる。しかし育児群と同様、町内会やまちづくりなどの活動（22.～23.）には熱心ではないことを自覚しているようでもある。

図表17　　地域との愛着　（離育児群）



5．育児群の分析

1）地域生活における関心や姿勢による下位集団化の試み

本報告では、特に育児群についてさらに焦点化して分析したいという意図から、育児群の調査対象市民の類型化を試みた。本研究プロジェクトの背景にある貝塚市の事例では、子育てにおける地域との関係性が重視されている点をふまえ、地域生活における関心や姿勢に関する23項目をもとに因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、下位集団化を試みた。なお、この因子分析による回転後の因子行列を示したものが図表18である。

因子負荷量が0.45以上の項目を採用することとしたところ、解釈可能な５つの因子が最終的に確認された。その結果、各項目群についての解釈から、因子１は“地域肯定感”、因子２は“快適感”、因子３は“屋外行動”、因子４は“地域社会への参加”、因子５は“他者依存”とそれぞれ命名された。これら５つの因子は、Cronbachの信頼性係数が算出され、

それぞれ“地域肯定感（α＝0.878）”、“快適感（α＝0.898）”、“屋外行動（α＝0.922）”、“地域社会への参加（α＝0.947）”、“他者依存（α＝0.907）”と0.85以上を示していることから、このデータが一定の信頼性が確保されていると判断することができる。

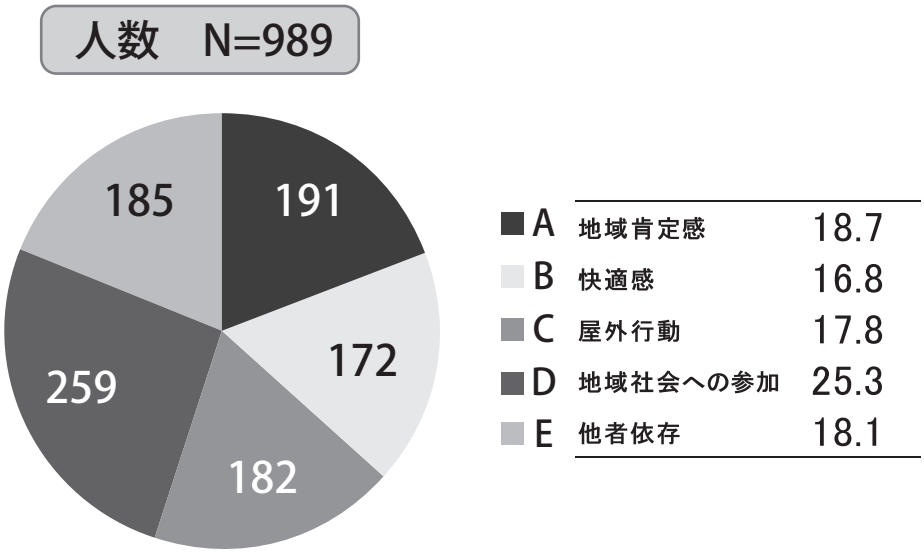
図表18　　回転後の因子行列

	因子１	因子２	因子３	因子４	因子５
10. 地域に愛着を感じている。	0.850	0.248	0.152	0.134	0.055
11. 地域は自分のまちだという感じがする。	0.816	0.188	0.197	0.161	0.070
９. 地域にずっと住み続けたい。	0.744	0.269	0.110	0.125	0.127
６. 地域が好きだ。	0.662	0.542	0.120	0.055	0.007
８. 地域に自分の居場所がある気がする。	0.655	0.303	0.263	0.118	0.024
12. 地域にいつまでも変わって欲しくないものがある。	0.634	0.211	0.236	0.078	−0.185
13. 地域になくなってしまうと悲しいものがある。	0.600	0.191	0.223	0.083	−0.264
７. 地域は大切だと思う。	0.594	0.284	0.169	0.061	−0.084
３. 地域を歩くのは気持ちよい。	0.304	0.693	0.231	0.107	−0.045
４. 地域ではリラックスできる。	0.449	0.676	0.207	0.044	0.005
５. 地域の雰囲気や土地柄が気に入っている。	0.594	0.599	0.126	0.066	0.058
２. 地域にお気に入りの場所がある。	0.374	0.555	0.161	0.081	−0.140
１. 地域は住みやすいと思う。	0.336	0.530	0.056	0.114	0.112
15. 屋外の空気に触れることが多い。	0.1231	0.1885	0.6781	0.0675	0.0952
14. 地域では鳥や虫の鳴き声を聞くことが多い。	0.181	0.083	0.660	0.034	0.062
16. 地域の人々とあいさつする機会が多い。	0.214	0.042	0.659	0.204	−0.065
18. 道ばたに咲く花や土など、自然のにおいをかぐことが多い。	0.080	0.203	0.644	0.159	0.046
17. 地域の人々と話をする機会が多い。	0.240	0.039	0.616	0.267	−0.069
22. 私は町内会活動に熱心である。	0.087	0.031	0.157	0.858	0.016
23. 私はまちづくり活動に熱心である。	0.118	0.080	0.187	0.823	−0.097
21. 私は近所の一人暮らし高齢者の日常的なお世話をしたい。	0.124	0.109	0.156	0.479	−0.083
19. 地域をよくする活動は熱心な人に任せればよい。	−0.095	−0.088	0.018	−0.095	0.595
20. 地域の整備は行政がやってくれるだろうと信頼している。	0.058	0.078	0.046	−0.018	0.517

２）下位集団別の属性

各下位集団の属性については、図表19～21のとおりである。“地域社会への参加”の人数が最も多く、“快適感”の育児群調査対象市民の平均居住年数が低い結果が得られた。また、育児群調査対象市民の学歴をみると、“他者依存”は中学・高校卒、“快適感”は短大以上卒が多くを占めていたことが明らかになった。

図表19　下位集団別人数



図表20　下位集団別平均居住年

平均居住年

	(年)
A地域肯定感	21.4
B快適感	11.7
C屋外行動	18.36
D地域社会への参加	19.06
E他者依存	19.25

図表21　下位集団別最終学歴

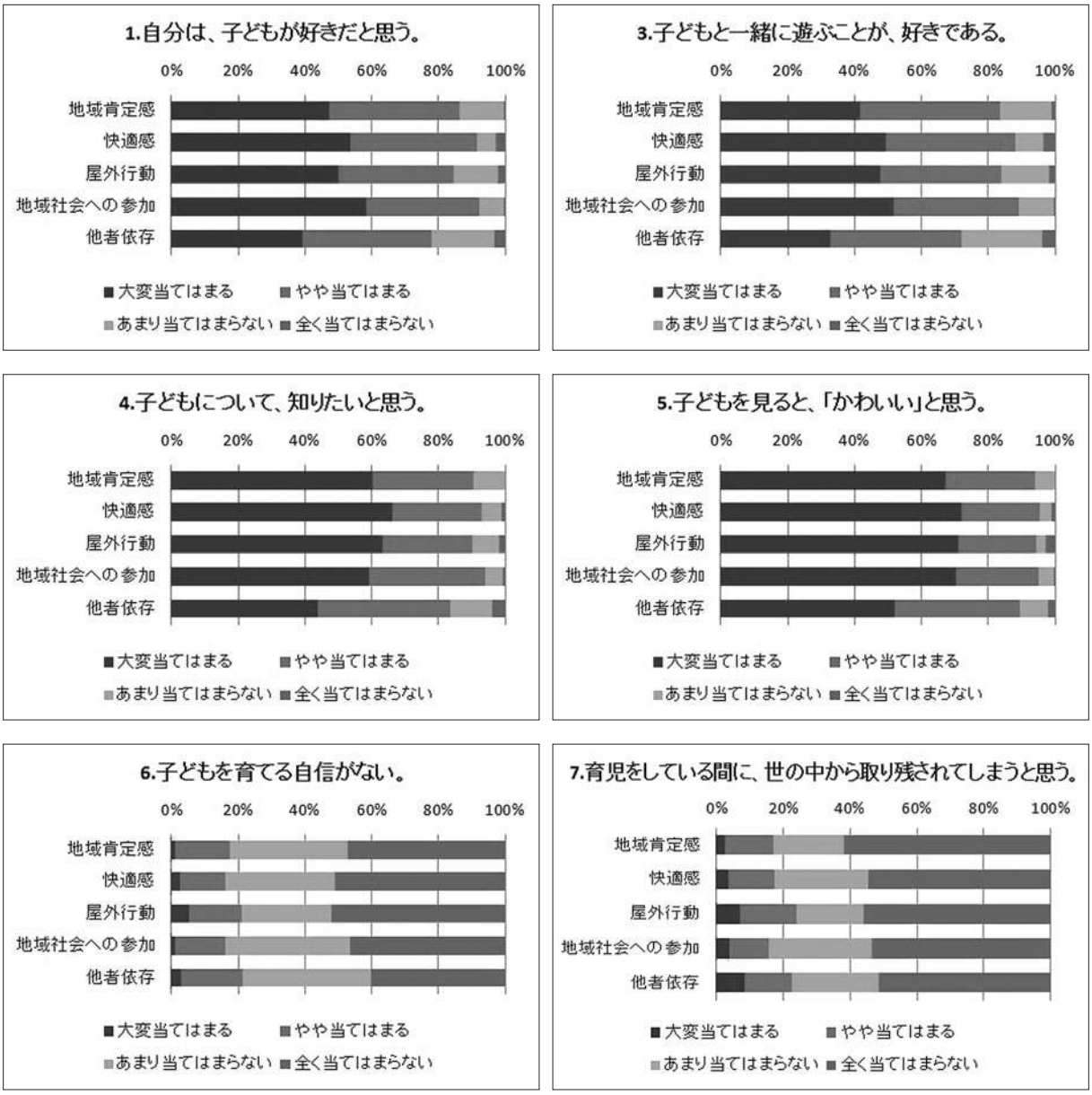
学　歴

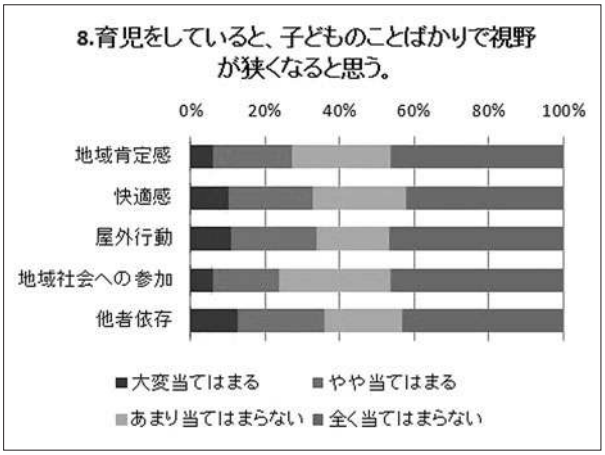
	中・高校卒	(%)	短大・大学卒以上	(%)
A地域肯定感	64	(33.5)	127	(66.5)
B快適感	50	(29.2)	121	(70.8)
C屋外行動	75	(41.2)	107	(58.8)
D地域社会への参加	128	(49.6)	130	(50.4)
E他者依存	97	(53.3)	85	(46.7)

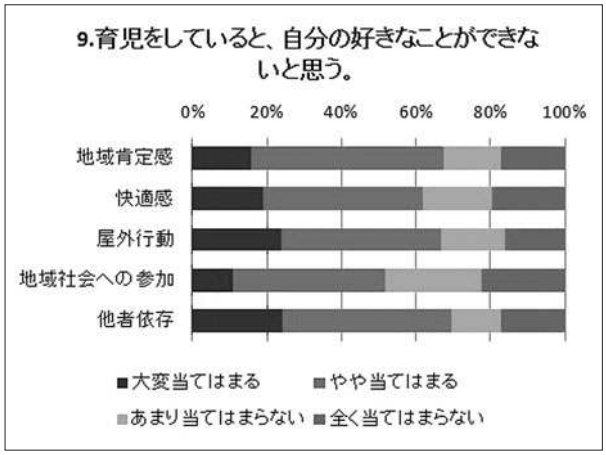
3）下位集団別の子育て・子育ち観

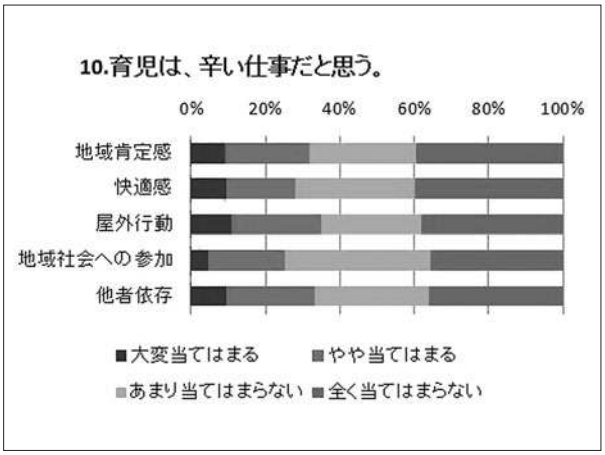
子育て観・子育ち観の各項目で、“地域肯定感”グループは施設や公園などのハード面、“地域社会への参加”グループはイベントなどのソフト面から、育児環境の充実を重要視しているように思われる。“快適感”グループは子どもへの関心や知識欲が強く、また“屋外行動”グループは育児による成長などへは肯定的回答が高い一方子どもへの関心や遊ぶことには肯定度が低い傾向がみられた。また、“他者依存”は子育てに対する自信や積極性が低く、関心も比較的低いように思われる結果であった。子どもへの好意的意識や知識欲については、接触経験の多さと相関関係にあるといわれており、育児への自信の低さとあいまって、行政や他人任せにする姿勢を鮮明にしたり、そうではなくても自身の活動を優先させながら地域の人たちの協力を安易に得ようとしているのではないだろうかと考えられた。これらの解決には、接触経験を早期から重ねるために、中学・高校の学校教育を巻き込んだ展開が不可欠であろう（図表22参照）。

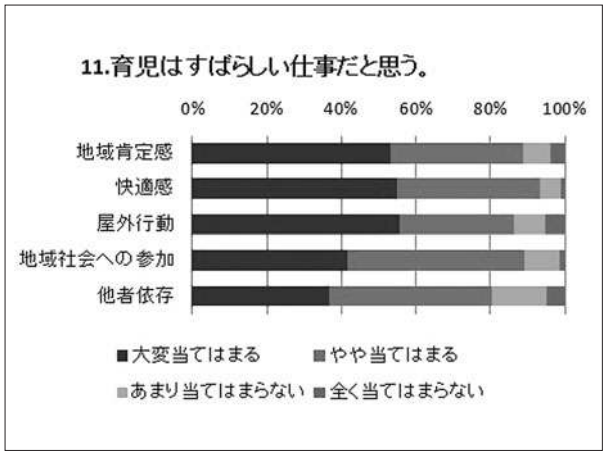
図表22　下位集団別子育て・子育ち観

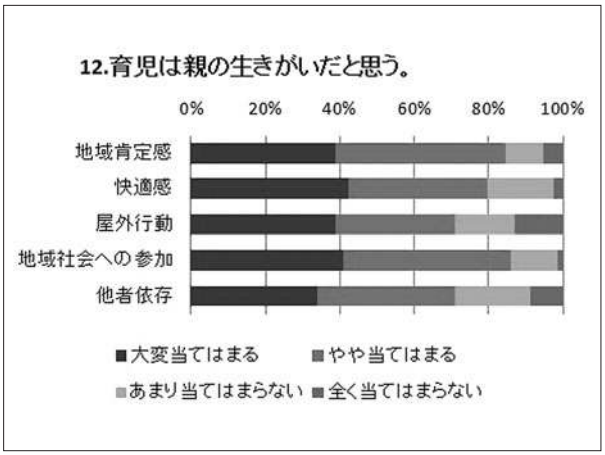


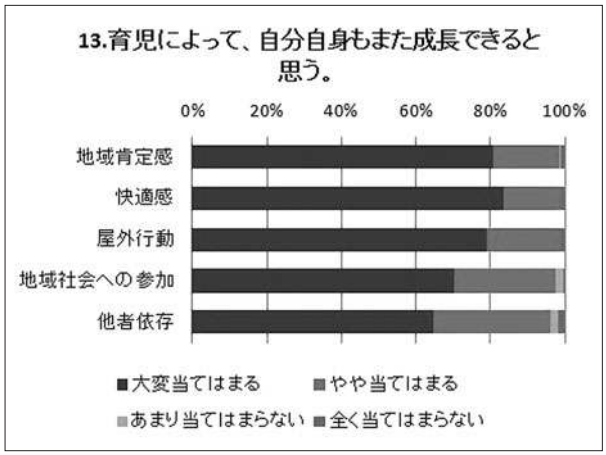

8.育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない

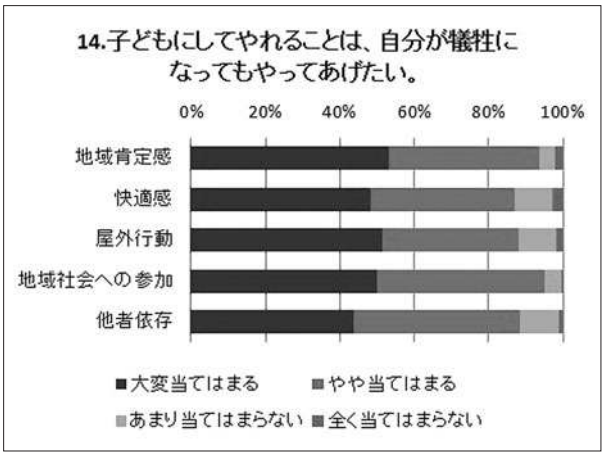

9.育児をしていると、自分の好きなことができないと思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない

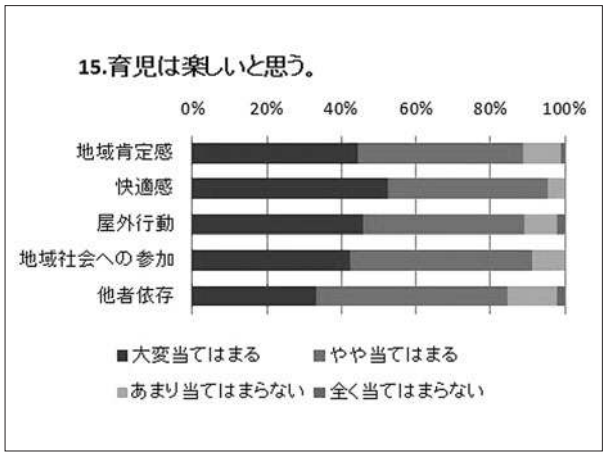

10.育児は、辛い仕事だと思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない


11.育児はすばらしい仕事だと思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない

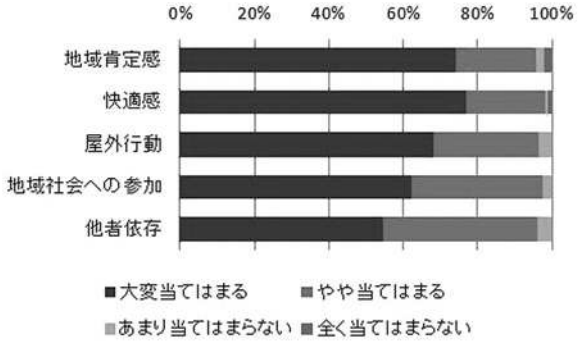

12.育児は親の生きがいだと思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない


13.育児によって、自分自身もまた成長できると思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない

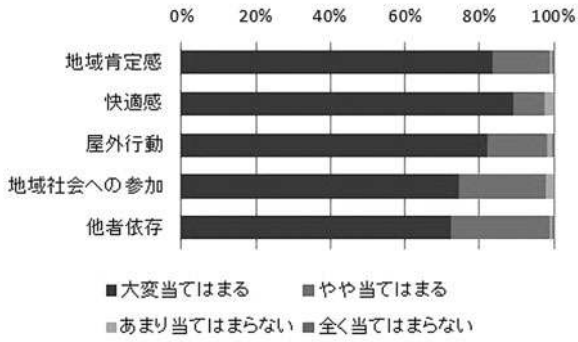

14.子どもにしてやれることは、自分が犠牲になってもやってあげたい。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない


15.育児は楽しいと思う。
0%
20%
40%
60%
80%
100%
地域肯定感
快適感
屋外行動
地域社会への参加
他者依存
■大変当てはまる
■やや当てはまる
■あまり当てはまらない
■全く当てはまらない

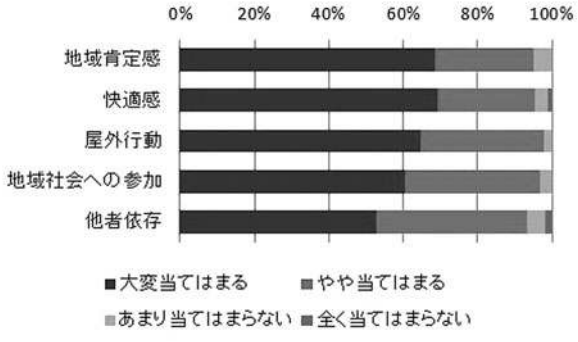
16.子育てには、自然環境を身近に感じることができるのがよいと思う。



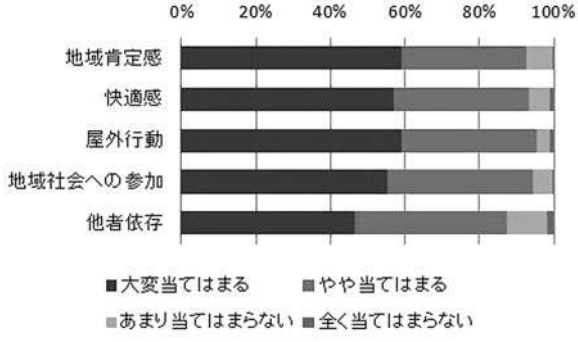
17.子育てには、自由に使える場や施設(公園、児童館など)が必要だと思う。



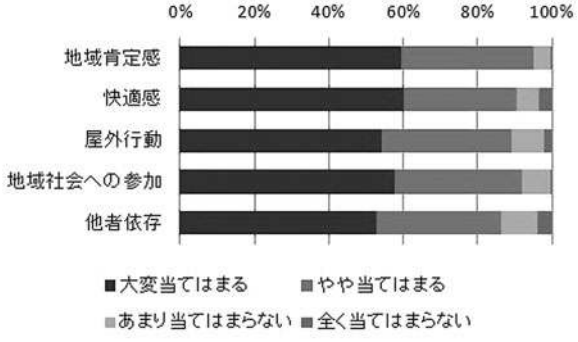
18.子育てには、地域でのイベントや交流の場があることが大事だと思う。



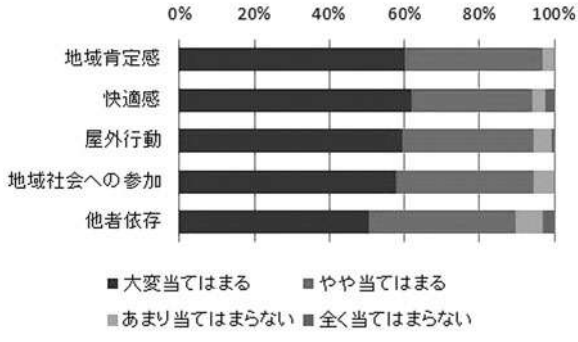
19.子育てには、地域で子どもの安全を守るボランティアが必要だと思う。



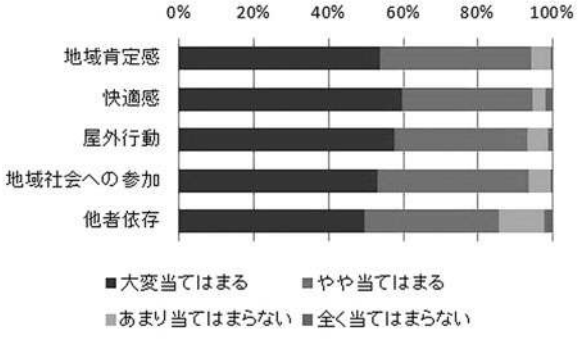
20.子育てには、地域に子育て支援センターが必要だと思う。



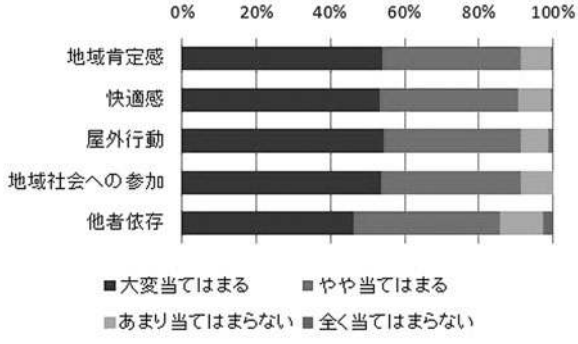
21.子育てには、地域に学習することができる機会や施設が必要だと思う。

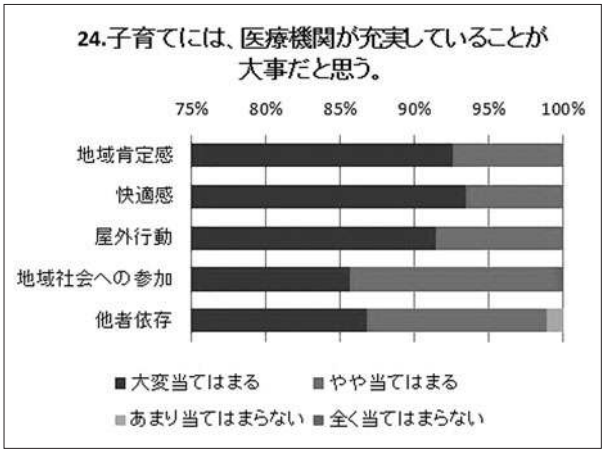


22.子育てには、相談できる公的な窓口が必要だと思う。



23.子育てには、地域における幼稚園・保育所のイベントが必要だと思う。





Ⅳ．まとめと考察

本研究の目的は、「子育て・子育ち」に関し、育児にかかわる当事者が学びと仲間づくりを通して、①「つながり」「支え合い」の関係を構築し、②自分たちの課題として共有し向かい合うことで、自分の存在・あり方を確認する、という視角から、そのための仕組みづくりを行うことである。この目的を達成するにあたり、学都であるという弘前市の特色を生かし、大学が持つ資源を活用することも一つの視点としている。本研究は２カ年計画で進めるものとし、１年目である2011年度は、支援プログラム検討に際しての基礎資料とするために、学生群・育児群・離育児群に対して、地域での子育て・子育ちに関する意識調査を実施し、その分析から実態把握を試みた。

アンケート調査の結果から、次の６点を指摘することができる。

①男性からの回答率が低い。

②育児群では、長期居住者と短期居住者というように居住年数が二極分化している。

③育児群、離育児群ともに、地域肯定感は強いものの、町内会などの地域活動には熱心ではないという傾向がみられる。

④育児群と、離育児世代すなわち「孫育て」をする群の結果を比較すると、認識のギャップが見られる。

⑤親準備世代である学生群は、生まれ育った地域への愛着が高く、子どもへの興味関心も強いが、何をしていいかわからない／自信がない、という傾向がみられる。

⑥育児群を類型化すると「地域肯定感」「地域社会への参加」「快適感」「屋外行動」、「他者依存」の５つに分類することができ、それぞれに次のような特性がみられた。

・地域肯定感　　：施設や公園などのハード面の充実に関心が高い

・地域社会への参加：イベントなどのソフト面の充実に関心が高い

・快適感　　：子どもへの関心や知識欲が強く、高学歴層や居住年数が低い層が多い

・屋外行動　　：育児を通して自分が成長することへは肯定的だが、子どもへの関心や遊ぶことには肯定度が低い

・他者依存　　：子育てに対する自信や積極性、関心が比較的低く、中学高校卒が多い

次年度も今回のアンケート調査の分析を進めていくとともに、次のことについて取り組んでいく計画である。

第１に、子育て支援センターや市内公民館等の社会教育施設、NPOなどが行っている事業内容や施設・空間の利活用の状況、相談やニーズなどの対応状況などを検証することにより、子育て・子育ち支援について育児群、育児群と離育児群との関係づくりや学び合いの実態を把握していくことである。言いかえれば、数値では表れにくい子育て・子育ち支援への参加の実態、あるいは育児群と離育児世代の間にあるギャップ克服のための方策や双方の主体形成のための地域での取り組みについて、公共施設や社会教育活動などから検討していく。その際、本年度の調査において男性の回答率の低さも見られたことから、男性の育児参加を促す事業や自主的活動の有無といった視点も持ち合わせていくことにしたい。

こうした質的調査を弘前市内の子育て・子育ち支援に関わる施設や団体のスタッフを対象に実施することはまた、単なるデータ収集としてのみならず、相互に持つ情報や考えを共有し、結び付けていくといった実践的アプローチを行うことになる。それにより、本研究が持つ目的の一つである地域に面的に拡がる子育て・子育ち支援ネットワーク化への一助となるものと考える。

第２に、育児に対しての自信が得られるような機会の設定、「つながりあい」「支えあい」の関係を築き、育児を自分たちの課題として向き合うことで、自分の存在やあり方を自覚できるようなプログラムを検討していくことが必要である。これについては、弘前大学生涯学習教育研究センター主催の「託児付育児支援講座」において、過去３カ年実施してきた調査結果を反映させるとともに、地域の資源や子育て・子育ち支援者と連携した講座づくりを行う。合わせて、大学の地域貢献・大学開放の観点から、大学機関が持つ可能性についても検討していく。

第３に、親準備世代である学生群は、居住年数が短いため弘前市との関係が希薄であるが、生まれ育った地域への愛着が強く子どもへの関心も高いということ、一方で、想いはあっても行動に移すことが苦手という傾向が見られた。子どもへの好意的意識や知識欲については、接触経験の多さと相関関係にあると言われており、育児群に見られた育児における他者依存（無関心）層を今後膨らませないためにも、親準備群である大学生や中高校生へのアプローチは有効であると考える。そのため、学生群を対象に、参加したいという想いが実践に結びつき、それが学習の機会として活かしていけるような、いわゆる主体形成・力量形成につながるプログラムと実証的検討を試みていく。

これら３つの観点から検討を深めていき、年度末には研究報告を兼ねたシンポジウムを開催し、大学の力と市が連携した子育ち・子育て支援のパートナーシップのあり方についてまとめていくことにしたい。

【附記】

本稿を作成するにあたり、研究全体の構成は全員で討議した上で、深作が調整しⅠ及びⅣとして執筆した。Ⅱ貝塚の事例検討については深作・生島が担当し、生島が執筆を担当した。Ⅲの調査については、項目の策定や内容の検討を全員で討議・作成した後弘前市の協力のもと深作が配布、増田･古川が集計･分析、さらに１・２・３の１）を増田が、３の２）～７）と４を古川が執筆した。

【参考文献】

・村田和子「ネットワークづくり」日本公民館学会編『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』エイデル研究所、2006、pp.245-246。
・上田幸夫「貝塚市調査」『社会教育・社会体育行政とNPOのパートナーシップ構築に関する総合的研究 研究成果報告書』（科学研究費補助金 基盤研究(C)(1)）、2005、pp.58-64。
・松岡伸也・村田和子・山本健慈「地域の課題、住民の要求に応える公民館実践の歩み－大阪府貝塚市－」小林文人・佐藤一子編著『世界の社会教育施設と公民館』エイデル研究所、2001、pp.453-467。

【注】

[1] 内田和浩「公民館主事」日本公民館学会編『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』エイデル研究所、2006、135-137頁。

[2] 貝塚市の場合、大学の研究者が公民館職員や市民との学習会を設けることで関与していたことは付記しておきたい。ただし、機関としての組織的な支援・関与があったわけではないことから、ここでは区別している。

[3] 金田利子「育てられる時代に育てることを学ぶ」、新読書社、2003年、15-18頁。

〈実践報告〉

「地域社会から学ぶ可能性について」
～高校生地域づくりリーダー養成事業からの報告～

中　澤　倪　志

1．はじめに

社会教育は、私に多くのことを気付かせてくれた。「他者の存在の大切さ」、「学ぶことの意義」、「地域のこと」、「子ども達のこと」、「教育環境のこと」、「興味関心を持つこと」、「コミュニケーションの大切さ」…、何よりも一番の衝撃は、「社会（他者）から学ぶこと」である。それまでの私は、知識は本や新聞、インターネットなどで気軽に手に入ると思っていた。それにより得た知識だけで満足していた。しかし、その知識を活用する場がないことに気付かされた。何故人は、学ぶのか。自分のためだとすると、そのこと自体が自分の中で完結してしまい、それが正しいのかどうかを判断できない。知識や考えが正しいかどうかは、周りの社会や人間に聞いてみる必要があり、判断してもらう必要がある。私には、その手段がない。社会性が無いからだ。社会と繋がっていない知識は、使いようが無い。つまり人が学ぶのは、社会に還元したり貢献したりするために学ぶのだと今は考えている。社会教育は、学びの根本的な楽しさや知ることの達成感を社会生活の中で体験できる貴重な機会である。

今回私が平成22年から23年にかけて関わらせていただいた「高校生地域づくりリーダー養成事業」は、まさしく社会の中で多くの人が関わりながら学ぶ集団体験であったといえる。前述したとおり、「学ぶこと」は「社会の中で生きること」と直結して始めて価値を持つ。今回の事業を通して目指したものは、高校生に対し地域社会へ興味関心を持ってもらい、自らが考え主体的に関わってもらうことである。また、地域活動を通して学んだことを学校生活にフィードバックできることも期待している。そのために、必要なコミュニケーション能力を高めることや他者との関わり方を知ること、社会性を育むことなどをワークショップ形式で自発的に学べる取り組みを行った。同時に、地域の次世代を担う子ども達を育成する持続可能な体制整備を目指した大人達にとっては、子ども達を見守る修練の場でもあった。

この報告書は、地域づくりの観点から、子ども（高校生）の成長を支援するよう真剣に考える多様な立場の大人たちが集まって試験的に取り組んだ２年間に及ぶ協働の記録である。

2．高校生リーダー養成事業について

「高校生地域づくりリーダー養成事業」は、平成22年度から平成23年度に行われた弘前大学の先生と大学生、民間の社会人、地域づくり団体、行政がプロジェクトチームを立ち

中澤　倪志（なかざわ　ちかし）　弘前市

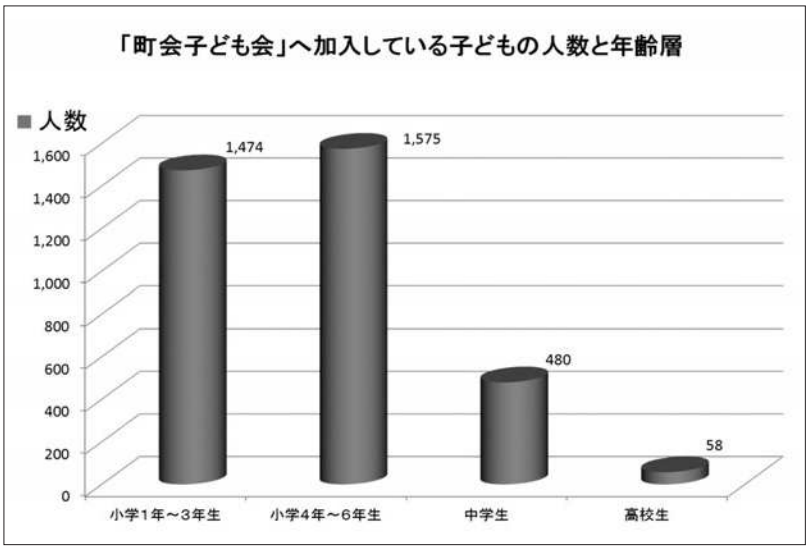
上げ協働しあい築き上げた画期的取り組みである。なぜ画期的なのかというと、これまでこの地域では社会教育の観点からこのような協働の取り組みの事例がなかったからである。

また、弘前市においても高校生を対象とした事業は実践事例が少なく、先行き不透明な状態でのスタートであった。社会教育に精通した人の話では、「今の高校生は忙しいので社会教育に参加しないのでは」、「今の高校生はコミュニケーション能力が不足しているのではないか」、「地域の子ども会ですら高校生の参加者が減ってきている」…などなど、たくさんの意見を頂いたものである。

確かに、そのとおりだった。かつては、この弘前地域では子ども会が活発に行われており、地域の子ども達が大人と一緒に年下の子ども達を見守り育むシステムが機能していたようである。

図－１は、弘前市中央公民館が、各町会を対象に平成22年１月に行った子どもの活動に関するアンケート結果である。市内対象町会328中、回答250町会〔回答率76％〕であった。

このグラフによると、年齢が上がるにつれ、子ども会への加入は少なくなっていく。特に、この地域においては、高校生リーダーと呼ばれる子ども達は、現在“ゼロ”となっている。つまり、現在は、地域の中で次世代を担うリーダーが育まれていないのが現状である。



図－１：弘前市子どもの活動に関するアンケート結果

それではなぜ、これまで地域の中で「子ども会」が担ってきた人材育成システムが機能しなくなったのか？本当に高校生は忙しいのか？人との関わりがなくなってきているのか？

聞き取り調査などから、これまで地域活動を熱心に支援してきた「大人の指導者」が高齢化している現状が分かってきた。加えて、新しい30代から40代の親の世代の指導者が極端に不足している。現在行われている子ども会の活動についても、慣例化して行事を消化することに終始してしまい、その目的も定かでないものも多々見られる。これでは、子ども達は地域の中で活動することに魅力を感じられないのではないだろうか。

地域の大人たちは、この現状を分かっていながらもどうにも打開できなかったようである。原因は様々であると思われるが、大きな要因として考えられるのは、親の世代の忙しさにある。また、現代社会は、多様な生活や考え方が尊重され、干渉されない社会となっていることも影響している。60代以上の世代が子ども会活動に関わっていた時代は、共働

きをする家庭も少なく、世の中の経済状況も安定しており、地域の繋がりも強く残っていたと思われる。子ども会のあり方も時代の変化に合わせ、変化していく必要があるように思われる。

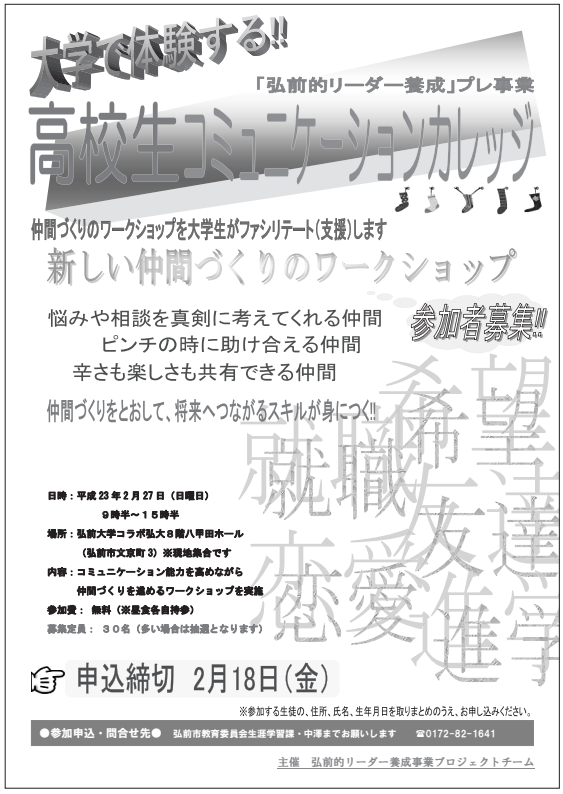
現状の問題は、地域における子ども達を育む教育力の低下により、そのしわ寄せが学校教育にもたらされているところにある。特に小中学校の現場では、先生方の事務量増加が囁かれるようになり、地域活動に協力的な先生が減ってきている。本来教科書を使い学問を教えることを専門とする学校の先生が、生きることやキャリアに関することなどの社会性全般を教える必要に迫られている。これは、家庭や社会の教育力の低下に起因しているところが大きいのではなかろうか。

地域には地域の中でしか学べない大切なことがたくさんある。そのことを子ども達に気づいてもらいたいと考え、地域の中で子ども達を育む環境をもう一度整備するべく私達の挑戦が始まった訳である。また、地域における社会教育が子どもを育む責任をもう一度真剣に考え担っていくことができるなら、学校教育への貢献も果たせると考えている。

私達の挑戦は、上記の子ども会のグラフが示す通り、今まで社会教育に縁のなかった高校生を対象としている。公民館活動を始め社会教育の場では、活動に参加する数において年齢層毎に違いがあり、小中学生と高齢者が突出して多く、高校生から40代まではほとんど関わることのない空白の年齢層となっている。この高校生の世代に対し地域に関心を持ってもらいながら社会教育の場に参加してもらえることが可能となれば、その空白地帯を埋める流れができることも期待しているところでもある。

３．高校生を地域活動に向かわせる工夫

「高校生地域づくりリーダー養成事業」プロジェクトチームは、平成22年度の１年間、月１回～２回の会議を開催し、子ども達を育む地域づくり活動をどのように実施していくのか何度も話し合った。その結果、まずはコミュニケーション能力を高めることからはじめることが重要との認識に至った。なぜなら、学校ではなく地域でしかない特有の学びである他者や異世代との関わりから生まれる学びこそがコミュニケーションを一番必要とし、地域の中で学ぶことの第一歩と考えたためである。子ども達は、安心の傘の下、学校と家庭で限られた人に関わって生活し成長しているといえる。しかし、多くの場合、学びと好奇心は外からもたらされるものと考えられる。現代社会は多様性にあふれ、数々の選択を迫られる。子ども達が社会に向き合うときにしっかりと対応できるように、または、



画像－１：
高校生地域づくりリーダー養成事業チラシ

その心の準備を事前にできるように、まずはたくさんの人と関わってもらう術を学ぶ必要がある。コミュニケーション能力こそが、子ども達の社会性を育むことや自立を促すためには絶対的に必要な能力と考えた。

また、リーダーの育成の考え方については、コミュニケーションを高める仲間づくりから社会性を学んで欲しいという想いから、一人の強いリーダーを育むこととはせず、一人ひとりのリーダーシップ（役割）を気づかせ育むことが重要であると考える。地域活動の場面や、社会に出てからのことを考慮すると、どうしてもチームとして課題解決に向かうことが多く、共通理解の下、目標に向かって進む場面で必要となるスキルでもある。

プロジェクトチームの中でその手法や仕掛けなど検討を重ねた結果、高校生がコミュニケーション能力を高めながら仲間づくりを進めることで、自分たちの可能性に気付き、地域に目を向け、飛び出していくことを期待し、平成23年２月、高校生地域づくりリーダー養成プレ事業「高校生コミュニケーションカレッジ」を実施することとなった。

画像ー2：高校生コミュニケーションカレッジの様子

事業を実施する上で、プロジェクトチームで約束事とされたのが、『やらせないこと』、『与えないこと』、『気付かせること』であった。なぜなら、学校をはじめ社会には他者から押し付けられたり強制されたりすることがあり、その多くの場合において、自主的に考え決めた事に比較し、他者から押し付けられた事は、学びの効率が悪く自分のためにならないことが考えられる。つまり、自主的に自分の責任のもとに考え行動したことは、たとえ失敗したとしても他者に責任転嫁することがなく、振り返り効果も高く、長期的な観点から自らのためになると考えた。加えて、何事も納得して楽しんでやることが大切である。そのため、参加募集についても、関係団体へ参加強制もお願いも極力しないことに決めたのである。

それでも事業実施の当日は、高校生15名の参加があった。

この事業で一番重要なポイントは、４名の大学生がファシリテーターとして役割を担ってもらった点である。これについては、高校生や大学生にとっても、大人にとっても良い成果を得ることができた。高校生にとっては、大学生は年の近い兄弟のようなもので、大人が話すよりも心に響くのである。大学生にとっても、事業の全体を把握し、ねらいを理解し、人を育むことの意味を考え、自分達の役割を認識して行動できた経験は、きっと将来に役立つことと確信している。また、大人は、事業の邪魔をせず、じっと我慢して見守ることを学んだ。

このように、プロジェクトチームが手がける初めての高校生を対象としたリーダー養成事業は、一応の成功を収めた訳である。

しかも、この事業の成果は、これだけではない。

この事業に参加した２人の高校生からプロジェクトチームに、「フリーペーパーを作りたいのだが、手を貸してほしい」という申し出があったことである。

当初、地域活動を自主的に行える行動力やリーダーシップを養えるようにコミュニケーションや仲間づくりの大切さを知ってもらう目的で事業を行った。しかし、この段階では高校生から具体的にやりたいことが出てくるとは思いもしなかった。

この事業開催から遡ること４ヶ月前、プロジェクトのメンバーは、事業をより良いものにするための視察を行い、東京都品川を訪れていた。ここでお話を聞かせてもらった地域活動を実践している高校生達に大きな衝撃を受けたことを記憶している。女子高生４人のメンバーだったが、地域の高校生を集めて、高校生にできることを探る意見交換イベントを企画していた。その企画内容をお話ししてもらったが、手書きのノートを使い理路整然と目的や実施方法をプレゼンする高校生たちは、考えが深く、ひどく輝いて見えた。プレゼンが素晴らしく素直に応援したくなってしまうのである。なによりも４人が楽しそうに話すのが印象的だった。プレゼンが終わってから話を聞くと、同じ学校の４人は、いつも教室に残って、３時間も４時間も時には喧嘩もしながら議論するそうである。そうやって、やりたいことの考えをまとめ社会に対し自分たちの存在を強烈に発信していた。

この視察の後、帰りの新幹線で、プロジェクトメンバーは意見交換を行った。皆一様に意気消沈し衝撃を受けていたが、同様に考えていたことは、「弘前の高校生の中にここまで深く考えている高校生がいるか？」ということである。東京と弘前では、教育環境も違うし、歴史も違う。しかし、同じ年の高校生である。この時の私達は、大人も子ども達も、まずは一歩ずつ成長していく努力が大切であると確認し合ったことを覚えている。

だからこそ、弘前の高校生からのフリーペーパーづくりの提案は、プロジェクトメンバーにとって青天の霹靂だった訳である。

４．弘前の高校生が自主的に立ち上がった

高校生リーダー養成事業実施１ヶ月後の平成23年３月、フリーペーパーづくりを提案した２人の高校生は、再びプロジェクトメンバーを驚かせることになる。ノートに手書きで書いた企画書とスケジュール表を作成し提出してきたのである。確かに、高校生に対し「どういったものが作りたいのか、具体的に教えてほしい」とお願いはした。それが１ヶ月という短い期間で形になった。

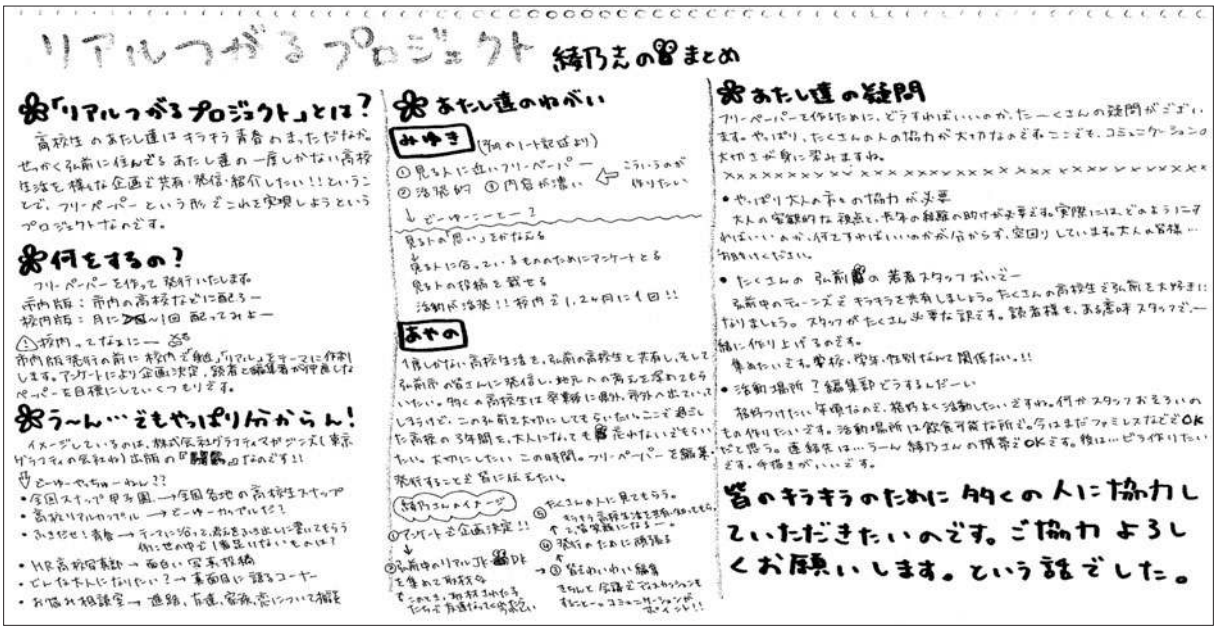
高校生達がフリーペーパーを通してやりたいことは、

①高校生の視点で自分達のリアルな生活を切りとり同年代に発信し共有すること

②同じ目標を持つ仲間を増やし、活動すること

③弘前市の良い所や面白い情報などを紹介すること

（以下に、手書きの企画書の一部を紹介する）

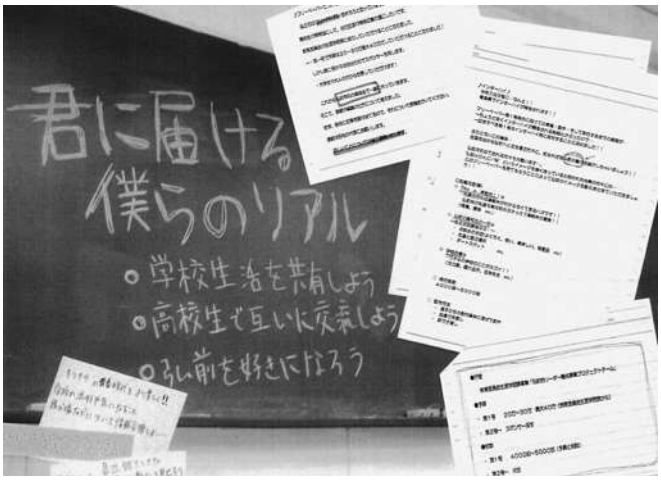


画像－3：高校生の手作り企画書

後に話を聞くと、この企画書を作るために、２人の高校生は放課後何度も話し合ったそうである。この企画書が、プロジェクトメンバーの心を動かした。弘前市教育委員会では、高校の先生方からのアドバイスを頂きながら、このフリーペーパーをつくる印刷費を準備し、７月後半から８月中旬まで行われる全国高校総体に全国から集まる選手たちへの配布資料とすることを決めた。民間のメンバーは、土手町の商店街の中に、高校生が集まって話し合いができ、かつ編集作業や資料作成などができるようパソコンを設置した無料スペースを開放した。大学側には会議室を無料で開放してもらい、大学生のメンバーは、高校生の集まりに積極的に顔をだし、相談に乗り、的確なアドバイスを与えるなど見事なファシリテーター役を担ってもらった。

こうして、高校生フリーペーパーづくりが多くの大人達と大学生を巻き込みながら動き出した。関わる人々がそれぞれの強みを生かして、皆で高校生を応援する強力な支援体制が出来上がったのである。

平成23年４月には、市内のいろいろな高校からフリーペーパーづくりに興味のある高校生が一堂に会し、説明会が開催された。この時集まった高校生は、32人。なんと全て最初の２人の高校生が依頼文書を作成し、各高校の生徒会をまわって周知することにより集まった高校生であった。もちろん、プロジェクトチームが開催した高校生リーダー養成事業へ参加した高校生も多数含まれてはいたが、高校生の可能性とパワーを感じずにはいられない出来事であった。



画像－4：高校生手作りの参加募集チラシ

5．紆余曲折と苦労の連続

最初の全体打合せにおいて、高校生達が皆で話し合って決めたフリーペーパーのタイトルは「colors」。意外とすんなり決まった。それぞれの個性あふれる色を出し合って一つの大きな絵を完成させるイメージであろうか。

《表－1：活動経緯》

23.3	市内高校にてプロジェクトチームと高校生との打ち合わせ
23.4	高校生フリーペーパーづくり始動（32名参加）
23.5	取材活動開始
23.6	編集作業開始
23.7	原稿完成
23.8	フリーペーパー完成 全国高校総体及び市内にて5000部配布

何はともあれ、その後の全国高校総体が始まる７月後半までの３ヶ月は、関わる大人にとっても高校生にとっても、怒涛の３ヶ月となった。何かを生み出すことはたくさんのエネルギーを必要とする。そして、関わる人の覚悟も必要になる。この時、プロジェクトメンバーは、徹底して裏方に徹し見守っていくことに決めた。

この活動は、高校生達にとっても大人達にとっても、未経験の活動であり、何をやるにもハラハラドキドキの経験だった。それでも、大学生と高校生達は良くやってくれたと思う。大学生の一人が高校生達のメールアドレスを一括で管理し、大人と高校生達を繋ぐ連絡の重要な役割を果たしてくれた。また、高校生達は、４月から６月までの間に、３回の全体会議を市内各所で開催。テーマ毎に自分達で取材班を結成し、取材活動を行っていった。そんな中、進捗管理と編集を総括するのが最初の発案した２人の高校生であった。

大人からは、取材活動をする上での簡単な注意事項を伝えるだけであった。アポイントメントの取り方、話し方、話の聞き方など、今になって思えばもっとたくさん伝えることがあったような気がするが、とにかく関わる大人の人に迷惑をかけないようお願いした（ちゃんと理解してくれていたのかどうかは疑問であるが…）。

また、後から聞いた話では、実際の取材活動も大変だったようである。取材班毎の打合せは、市内のファーストフード店かファミリーレストランに集まり、何時間も過ごしたらしく、中には、はしごするところもあったと聞く。すごいパワーだ。自分達で選択し、自分達で決めて、行動しているからこそ、このパワーが発揮されていたと考えられる。大学生もまた、この取材打合せに同席していたらしく、回を重ねるごとに仲良くなっていった。それにしても大人達の目には、このときの高校生達が、あまりにもいきいきと活動しており、輝いて頼もしくも見えていた。

そんな中、大人たちの苦労と心配とは無関係に、高校生達は休むことなく活動していた。最後の１ヶ月は、高校生達もかなり苦労したようである。レイアウトやデザインなどの編集作業は、慣れないパソコンのソフトを使う必要があり一部の高校生に作業量が偏ってしまったり、原稿が予定の締め切りに間に合わなかったりして、取りまとめをする高校生も大変だったと聞く。結局、フリーペーパー完成データを印刷会社へ渡す約束の期限には、間に合わなかった。

そこからは大人が頑張った。印刷会社と全国高校総体関係者には、予定の遅れを謝罪し、今後なるべく急ぐよう計画変更を伝え理解してもらった。本当は、出来上がった初

稿内容を各高校へ確認してもらう予定も、十分時間を取って見て貰うことができず、急ぎ（約２～３日）でチェックをお願いした。取材先のお店には、プロジェクトメンバーがこっそり足を運び、フリーペーパーへの紹介記事掲載の最終確認も行った。

こうして最終的にフリーペーパーが完成したのが、当初予定の１週間以上も後だった。結局、全国高校総体の最初の競技には間に合わなかったものの、途中から全国の高校生へ配布し、弘前の高校生のリアルな姿を伝えることができた。また、弘前市内の公共施設や各高校にも配布し、多くの高校生や市民にも読んでもらえた。他のチラシと一緒にラックに無造作に並べられたフリーペーパーは、意外にもすぐ無くなってしまって追加をお願いされた施設もあったほどだ。産みの苦しみがあった分、喜びもひとしおだ。

このフリーペーパーを配布する時も、高校生は積極的に動いてくれた。市内公共施設や高校については、市役所より依頼文を添付し配布したが、その他デパートや人が集まりそうな場所には、高校生が出向き、置かせてもらえるよう直接お願いして歩いた。感動的だったのは、高校生達がお世話になった中学校の恩師がいる学校へ持参したことだ。想像するに受け取った中学校の先生達は、子ども達の成長に驚きと喜びを感じたことと思う。

今回のフリーペーパー作成を振り返ると、何故か幸せな気分になる。前述したとおり苦労も失敗もたくさんしたし、多くの人に迷惑をかけたにもかかわらずである。高校生達はもちろん、大人のメンバーも、これに関して達成感と充実感を感じているのだ。出来上がったフリーペーパーは、手書きの個所があったり、写真がぼやけていたり、手作り感いっぱいの味のある仕上がりとなっているが、関わった皆が誇りに思っている。高校生をはじめ、関わった大人達も皆同じ目標に向かい力を合わせた仲間である。今回は、その一体感を感じることができたことが大きな収穫となった。

画像－５：完成したフリーペーパー表紙

６．高校生のその後

フリーペーパーを作った高校生達はその後どうなったか興味深いところである。

中心となって活動した２人の高校生は、来年の大学受験のため、現在勉強に励んでいる。その他、制作に協力してもらった高校生達は、就職を目指す人、大学進学を目指す人、それぞれバラバラとなったが、進路や高校は違えども現在もメールでやりとりをしているようだ。

フリーペーパーが完成した後、第２弾絶対作ろうと言っていた高校生達は、自分達の生活に忙しくその第一歩を踏み出せないでいる。それでも良いと思う。今まで誰も作ったことのない高校生によるフリーペーパーを完成させた貴重な経験を持っていることは大きい。普通の高校生活をしているだけでは得られない経験だからだ。おそらく、これは誇りか自信なのだろう。私達大人も含め、失敗もしたし、苦労もしたが、今回の経験がこれからの勉強にも社会に出たときにも役立つときがくると信じている。将来、苦難にぶつかった時や難しい仕事を目の前にしたとき、きっと成長した彼らは、何とかして仲間をみつけ乗り越える手段を探ることだろう。

実は、あれから２回ほど、中心となった２人の高校生に私は会っている。

１回目は、埼玉県で地域活動を主体的に行っている高校生のグループを弘前市に招待し、弘前市の高校生と意見交換をしてもらう企画に参加してもらった。このときは、２人だけではなく他のフリーペーパーづくりの中心メンバーも参加してもらった。お互いの地域での活動報告をしてもらったが、弘前の高校生も堂々として物怖じせずハッキリと考えを相手に伝えていた。埼玉県の高校生達からは、弘前での活動を高く評価してもらった。

２回目は、24年２月で、地元の新聞社の会議室に２人を招いた。３月の高校受験を控え不安を抱える中学生に対して、高校生活のことや地域活動のことを座談会の中で話してもらい、応援メッセージを送るという企画に参加してもらった。

高校生２人は、相変わらず悩んでいた。そして、以前までと変わらず、放課後教室に残って議論していると言う。今度は、２人ではなく３人で話し合っているようだ。仲間が増えたようで楽しそうに話していたのが強く印象として残った。

７．結び

プロジェクトチームが手がけてきた「高校生地域づくりリーダー養成事業」は、平成24年度も継続していくことが決まっている。

平成23年12月プロジェクトチームの中心的な役割を担ってきた民間メンバーとその仲間達がキャリア教育支援のためのＮＰＯ法人「Ｒ.ぷらっと」を立ち上げた。平成24年度からは、このＮＰＯが弘前市から補助金の支援をいただきながら「高校生地域づくりリーダー養成事業」を企画運営していくこととなる。

平成24年度は、これまでどおり高校生の自主性を尊重しながらも新たな企画と新たなメンバーを加え、継続的に高校生を応援していくこととしたい。今年はどんな高校生と出会えるのか、どんな可能性を実現していくのか今から楽しみにしている。

協力してくれた大学生が印象的な言葉を私達に残してくれた。

《表－２：平成24年度活動予定》

５月	プロジェクトチーム企画会議
６月	大学生ファシリテーター研修会
７月	高校生コミュニケーションカレッジ開催
８月	高校生カタリバ（仮）
９月	自主活動企画ワークショップ
10～２月	自主活動

「自分達の高校時代にこのような取り組みがあったら絶対参加したかった」と。

まさしく、このことは、参加した大人達もそう思って関わってきている事である。自分達の高校時代に「もっとこうしたかった」とか「後悔している」といった事を、経験に基づき、後世の高校生達に楽しんでもらえる仕掛けを社会的に創造している。

平成24年度は、前年の経験と反省から、事業に関わった高校生が学び獲得する成果にこだわり、もう一歩踏み込んで新しいことにチャレンジできる体制を整えて一緒に歩んでいきたいと考えている。

地域には、大人と子供がいる。何歳から大人になるかは、個々それぞれである。高校生にとっては、大学生は大人であり、中学生にとっては、高校生は大人である。社会の中で「学ぶ」ということは、この他者との関係性の中から得られるものが大きい。それも、大人から子どもへ教えるのではなく、お互いが学び合えることが社会教育の醍醐味だ。逆に、お互いにとって学び合えないことは、やらない方が良い。この２年間に及んだ「高校生地域づくりリーダー養成事業」を振り返えると、常にこのことを念頭において関わってきた。この事業に関わる大人のメンバーは、皆ボランティアである。月１回夜に集まって会議をするのも、日曜日に高校生と集いワークショップをやるのも、全てボランティア。関わっている大人達は、皆、地域のことを真剣に考え何とかしたいという想いを持って参加しているが、やはり自分達にとってもメリットが無いと続いていかない。お金にかえられない「学び」という価値が必要である。

また、私達は学校教育の中で「教えられる」ことに慣れすぎている。それも自分で望まないことや強制される「教え」である。なぜ学ばなければならないのか。どうして教科書が必要なのかをきちんと考えることが大切である。今の学校教育は、一人ひとり自らが「知りたい」、「学びたい」という欲求を待てずに、簡単に「教える」ことにより、知ることの達成感や試行錯誤する一番おもしろい過程を省略し妨げている。自らが望まないことよりは望んだ知識の方が身につくし、応用も利くことは明らかである。自発的に考え、学ぶ要求を高めるためには、社会で学ぶことが効率的であると今回の経験が教えてくれた。

そういった意味では、今回の一連の事業は大成功を収めたと言ってよい。高校生達は、確実に達成感を得て自信を身につけた。今は受験や就職に忙しそうであるが、いずれは、プロジェクトメンバーと一緒に高校生や中学生の成長を支援する場に関わってもらいたいと内心期待している。また、大学生も同様に貴重な経験をしたようで、今でも私達の活動に理解を示し、継続して関わってくれている。この現場で重要な役割を担った経験をいかし、きっと社会に貢献できる立派な社会人になると確信している。

プロジェクトチームも今回の経験から、自信という大きな収穫を手にしている。今後は、高校生に楽しんでもらえるような機会を準備しながら、彼らと真剣に向き合っていきたい。この取り組みをしっかりした人材育成の環境基盤のもと持続的に実施していく事で、多くの人が関わりあいながら、人を育み地域が豊かになっていくことと期待している。

【座談会】市民が期待する生涯学習教育研究センターとは

参加者：（受講生）前田　歌子さん、小山内祥代さん、鈴木　庸子さん
（センター教員）浅野　　清 センター長
藤田　昇治 准教授
深作　拓郎 講師

深　作：弘前大学生涯学習教育研究センターは設立から14年が経過し、これまでさまざまな公開講座や講演会などに取り組んできました。今日は、受講されている方々との座談会をして「市民が期待する弘前大学の生涯学習教育研究センター」について方向性を探っていきたいと思います。

小山内：小山内祥代といいます。「子どもの育ちを考えるプチゼミナール（略して「プチゼミ」）」でご縁があり、「子どもの育ちと親の育ち」の講座にも２年間参加しました。プチゼミに参加していろいろな方の話を伺い、刺激を受け、一昨年に「青森県にプレイセンターを創る会」を立ち上げるきっかけにもなりました。

前　田：前田歌子と申します。会社を経営しています。2005年からNPO法人「青森県日本文化を伝承する会」の代表もしています。観光資源として良いものが青森県にはたくさんあります。しっかりと根を張って草の根交流を続けていきたいと思い、「あおもりツーリズム人づくり大学『はやて』」に、２年目から受講しています。また、毎年夏に開催の「弘前大学シニアサマーカレッジ」に参加しています。

鈴　木：鈴木庸子です。託児付の「育児支援講座」に連続して参加しています。あとショパン・イヤーのコンサートも参加しています。今はまだ育児中で、ほとんど家にいる専業主婦です。結婚する前は、東京で７年働いて

【深作拓郎講師】

【小山内祥代さん】

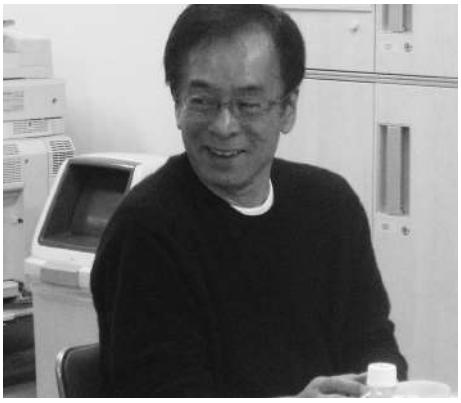
【前田歌子さん】

いました。特に何がしたいとかはないのですが、家の中にずっといることもないと思い、大学の講座に参加して勉強しています。

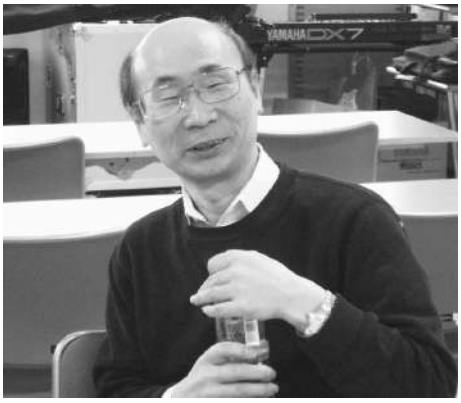
浅　野：センター長の浅野です。センター長になりまして、はや８年になります。

藤　田：生涯学習教育研究センターの専任教員の藤田です。ここのセンターが平成８年にできて、そのときからの専任教員です。専門領域としては、例えば博物館学関係とかボランティア関係の授業を担当しております。

【鈴木庸子さん】



【浅野清センター長】



【藤田昇治准教授】

本学の生涯学習教育研究センターを知ったきっかけ、受講の動機は？

深　作：このセンターの存在や、センターや大学の講座を知るきっかけは何か、また参加の動機などを教えていただければと思います。

前　田：大学だといろいろな方たちのお話を聞ける、それが第一の魅力です。また、大学の先生だけではなく、県内外の地域の第一線で活躍されている方のお話も楽しみです。

深　作：講座の情報は、どのように知ったのですか。

前　田：チラシもそうですが、校門前の掲示板も見ています。ちょっと待ち合わせしたりする時に。今は、大学からのメールで案内を受けている状態なので。あと、弘前まで来られない方たちもいると思います。可能であれば、青森で年に何回か開催してほしいです。

小山内：私は、プチゼミに関してはボランティア支援センターのほうから案内のメールが来ました。その頃は弘前に来てまだ１年半だったので、仲間というかお友達が欲しいなと思い参加しました。

鈴　木：私はこの（センター作成の）パンフレットですね。市立図書館に置いてありました。パンフレットは上土手スクエアや道の駅に行くと、案外置いてあって、そういうのをみて参加しました。

子どもが生まれる前は子育てとか興味がなかったので、その時は（不妊治療をしていたこともあり）医学部の講座を見ていました。関心のあるものをやっぱり目にします。

深　作：今、鈴木さんがおっしゃられたように、その状況によって自分の興味とか関心と

いうのは変わってきますよね。その興味や関心が情報とうまく合致したときに行こうと思う動機になるのですね。

鈴　木：講座の案内はホームページには出ているんでしょうか。

小山内：ホームページは割とみるんですよね。

鈴　木：子どもが赤ちゃんの時はホームページを見たり、表に出られるようになったらチラシをみたんですけど。

前　田：今は高齢者でもみんなパソコンで情報を収集しますから、ホームページにたくさん載せてあるといいですよね。

公開講座・講演会を受講した印象

深　作：鈴木さんは、医学系の講座や、ここ数年間のうちのセンターの講座に参加していかがですか。

鈴　木：どちらもすごく参考になります。本では勉強できないことが勉強できるというところが魅力です。あと、講座は効率がすごくいいです。テレビの講座とかもみますが､それプラス実際にお話を伺うというのはまた違った意味で勉強になります。

深　作：実際テレビを通じて学ぶのと、リアルタイムで学ぶ違いはありますか。

鈴　木：とてもあります。先生のお話はもちろん、講座に出ている受講生同士のお話というのもすごく大きいです。音楽の演奏をテレビで聴くのとコンサートで聴くのとの違いぐらいの感じだと思います。

小山内：私は昨年、この「明日の教育を考える」講座の２回目のほうに参加しましたが、初めて八戸とのテレビ中継をしながらの講座でした。やはり先生の視線が自分のほうに向いているというのはすごく大事だと思いました。

藤　田：やはりメディアを通して聞くのと目の前に講師がいるのでは迫力が違いますよね。

弘前大学に対するイメージ

深　作：いろいろな講座に参加するようになって、参加する前と後では特に大学に対するイメージというのはどうでしょう。

前　田：何というのかな「おらほの大学」だという感じ。

小山内：何となく自分の居場所になりつつあるような、そんな感じは受けています。

鈴　木：イメージはやはり講座に来るようになってから良くなりますね。あと、学食に行ったりして子どもが大学に対してすごく親しみをもつんですよね。私は図書館も利用しますし、地域にある大学で、いいなと思いますね。

不満というか、対象が例えば小学生とか結構限られているのも、この子を連れていきたいんですよ、すごく。対象が決められている場合でも、邪魔にならない範囲でみられるようにしてほしいというのはありますね。

浅　野：要は対象を小学生ではなくて、小学生向きみたいな形で。

鈴　木：はい。雰囲気だけでもみせたいというのはすごくあるんですよね。

深　作：それは例えばどんなもの？

鈴　木：例えば昆虫博士とか…。あと、理工学部の数学の講座とか、化学もそうですね。高校生対象のものとか。内容も聞いてもわからないかもしれませんが…

深　作：空気を感じ取る。

鈴　木：そうですね。方向性とかそれだけでも。というか、どのレベルというかどんなふうに話をしているのかとか、そういうのもすごく興味がありますね。

前　田：たまに体験を伴うものも取り入れてみたらどうかなと思います。市民文化センターなどでやっているのとまた違うレベルの高さで大学でやってもらえれば。私は期待します。

小山内：この前「ゴニンカン」に行ったんですよ。例えば、そこに数学的な見方を入れるとか。ただ数学の何とかといわれても抵抗がありますが、「ゴニンカンに学ぶ○○」とか、身近なキーワードが入っているもので専門的なことも学べると、やっているほうも聞くほうも楽しいと思います。

前　田：いいですね。

深　作：弘前での講座を、弘大でやるということに関して何かありますか。

前　田：私は弘大の講座に参加というと、やはり大学でやってほしいです。

鈴　木：そうですね。大学に来られるというのはありますね。

前　田：そうそう。おらほの大学ですから。

小山内：おととい初めてバスでここに来たんですけど、意外にバスの本数が多いんですね。

鈴　木：駅からの本数はありますね。

小山内：例えばバスの発着とか、交通機関との連携みたいなものがパンフレットにも載っていれば…。バスで行けるとわかると違うのでは。駐車場の心配もいらないし。

鈴　木：ここを100円バスのコースに入れてほしいです。

小山内：大学循環100円バス。

開催時間の工夫、受講しやすい環境づくり

深　作：ショパン・イヤーのレクチャーつきのコンサートに行かれてどうでした？

鈴　木：本当に良かったです。

浅　野：あえて11時からというとんでもない時間に企画してみました。

鈴　木：時間もとても良かったです。

深　作：11時という、イレギュラーだけど、もう少し参加しやすい時間帯、日時というのを常に模索しているんですけども、日時設定、時間設定というのはいかがでしょう。

鈴　木：子育て関係に関してはちょっと早いんですよね。「幼稚園のバスを送り出してから来られない」と一緒に来ていた人がいっていました。

深　作：そうすると、11時？例えば託児つきで午後というのは？

鈴　木：というと、またお昼寝してしまうんですね。

鈴　木：子育て講座の参加者が毎回変わったり、来られない人が結構多くて。期間が冬場というのもあったと思います。子どもが風邪引いたとかね。

深　作：３年前から託児を少しずつ取り入れていますが、託児というのはどうですか。

鈴　木：ありがたいですけど、預ける子どもの状況にもよります。託児というのはいいと思います。それがなければ申し込みもできないというのもありますね。

深　作：託児というのは１つのバリアをとるという意味では有効かもしれませんね。

小山内：お友達が（大学ではない）ある講座で託児の問い合わせをしたら、託児って何ですかみたいな対応だったらしいです。関係ない方は全然関係ないと思いますし、子育て世代からすれば、託児があれば行ってみようかなというきっかけにはなりますよね。

鈴　木：でも、案外その講座は子どもを連れていけたのかもしれないですね。

小山内：そうですね。託児は無いよりはあったほうがいいですが、無くても「一緒に連れていっても大丈夫ですか」と最近は聞くようにしています。この前も、大人の講座で、託児について聞いてみたら､「一緒に連れてきてください」といわれて。

藤　田：ちょっと一般的な話として、皆さんの世代ぐらいだと、例えば自宅でベビーシッターを頼んで、それで用事を足しに行くという利用って結構あるんですか。

小山内：今、結構幼稚園で預かってくださったり保育園で１日預かりがあったりするので、多分そっちのほうを利用されている方が多いと思います。

藤　田：そうすると、そういう別な施設とか保育施設とかで預かって半日ぐらい大学の講座に来る、そういう選択はあり得る。

小山内：ただ預ける方も、例えば赤ちゃんであれば、ずっと抱いておぶわれているのがせつないから、もう預けないとかという方もいるんですよね。

鈴　木：家がちらかり過ぎていて、ベビーシッターを呼んでというまでが時間かかるので、もう出かけられなくなります。片づけしていてそれで終わってしまう…。

藤　田：お子さんは、まるっきり初めて来たベビーシッターの人とコミュニケーションをとることができないという現実もあるでしょうね。

鈴　木：そうですね。保育園に預けるほうが一般的ですね。

大学の生涯学習教育研究センターの特色とは

深　作：例えば公民館とか民間のカルチャースクールと、大学の公開講座だと気持ちや気構えというのは違いますか。

前　田：期待感が違いますね。数字の羅列のようなかたい話ではなく、肉付けして、ちょっと楽しいような、いわゆるジョークを飛ばしてもらえればいいですね。聞いていて何か１つでもいいから残るようなものでなければ。そういう意味で、大学の講座に対しては期待感が違います。

小山内：いろいろな講座がありますけど、大体１回きりって多いですよね。私、子育ちと親の育ちの講座を２年連続で受講して、内容は大体同じでしたが、１年後に聞くと、あ、そういえばと、また違う気づきがあったりします。

前　田：何年か継続してほしいですよね。

藤　田：でも、企画する側からすると、同じテーマを続けると、参加者が集まらない場合もあります。お二人の話はよく理解できるし、ありがたい言葉なんですが、企画する側からすればちょっと…。

鈴　木：私は、講座に割と参加していますが、大学の講座で取り上げる内容はとても良いです。大学が行う一般向けの講座というのはまた別の意義があると思います。文化センターで学べることとまた違いますよね。

深　作：大学の研究者がかみ砕いて皆さんにお話しするというのは、皆さんにとってもかなりの期待感や満足感というのはほかの講座よりも高いということですか。

前　田：そうですね。

深　作：こういうことを講座で知り得ると、さらにこういう部分で発展させる、自分の活動にさらに生かせるというのがあれば教えていただきたいです。

小山内：私の場合だと、講座で知った先生との接点はありますが、大学の学生さんとの接点が余りないと。でも、そういうのもあってもいいと思っています。おもちゃ病院のときに、弘大生が４年間通い、今回無事に卒業して関東に戻ることになりましたが、彼のその４年間の変わりぐあいを間近で見て、そういう意味だと一緒に学べるというか、講座の参加者に学生の層があってもいいのかなと思いました。

藤　田：今のお話にぴったりなのは、本学の国際交流センターの授業の１こまが、弘前市で１月にやる国際交流パーティーの事業を準備するプロセスとして、正規の授業をずっとそのパーティーの準備の時間とする。学生と市民ボランティアも入り、共同の目的で共同の作業をやります。もうちょっと参加しやすいものとすると、テーマ、内容が学生さんも一緒に参加して学べるような講座も企画してほしい、そういう意味ですかね。

小山内：そうですね。

藤　田：学生にとっては、今、大学の授業に出たりバイトが忙しいとかということで、センターが主催する講座は初めから眼中にないという傾向があると考えられますが、逆に市民と交流したり参加していろいろ質問を出したり、あるいは参加者同士で意見交換したり、学ぶ場の共有化みたいなものをもっと積極的に考えたほうがいい、という意味ですね。

小山内：そうですね。この前参加した講演会では、その後の質問で教育学部の学生さんが何人か質問をして、学生さんの思っていることを聞けて良かったなと思いました。

前　田：「はやて」にはいつも学生さんが来ていましたよね。

藤　田：昨年度まではそうでしたが、今回のあおもり観光人財育成講座は実際観光業に従事している人というふうに限定しました。

前　田：やはり学生さんと触れ合う機会というのが余り多くないですよね。学生たちといろいろな意見交換できるような講座があればいいなとは思っています。

鈴　木：私は学生と一緒というのは特には期待しないんですけど、医学部の講座は学生も来ていますよ。子育て講座に関しては教育学部の学生さんとかが出てくださると何かおもしろいかなと思います。

深　作：大学の財産といったときに、研究者だけではなくて学生というもう１つの財産・資源がある。市民の方と学生との接点をどうつくるか、皆さんのお話から学び合いをしたいというニーズがあることを感じました。

藤　田：先ほど参加者同士の交流ということがありましたけれども、それをさらに次につなげるものが何なのかと。希望としては、地域の大学の学びを出発点にしてネットワークを広げていくということを考えていかないといけないんじゃないか、やる必要があるんじゃないかと思っているんですけれども。

小山内：そこで終わらなくて、一貫した何か目的やプロジェクトのような、目的とかがないとなかなか集まれないので、そういうことを、ぜひやってほしいというか、機会が欲しいです。

藤　田：例えば参加者同士でメール交換とか、ツイッターでつぶやいて講座の情報を教え合うとか。一人ひとりが講座に参加して、はいおしまいというのではなくて、次に何らかの形でつなげていければなと思います。

小山内：興味がある講座で何回か会っていたら、どんどん顔見知りになってというのはありますよね。

藤　田：そのもう一歩先に進めることがあったらいいのでしょうか。

鈴　木：難しいですね。実際に気の合う人ってそんなにいないですよね。講座に来て、また会いたいと思う人って…。目的は気が合う人を探すわけじゃないですから。

前　田：文化センターなどの講座では、この方はまた今回も一緒だわという感じの、参加する人は同じなんですよね。

鈴　木：それが嫌でやめる人もいます。

前　田：そうそう。います、います。

浅　野：ただそこで時間を共有するのではなくて、何か１つ資格なり免許なりをとる、そういうものに向かってみんなで足並みをそろえていく。その後、少しずつみんなが枝分かれしていくみたいな、そういうものをできたらいいなというふうに思っていたんですけど。

資格や免許をとった時点で、じゃあなたはどうするの？という、地域に戻って社会活動をするのか、そうではなくてもっと上を目指したいという人もいるかもしれない。何かそれが本当の意味のコミュニケーションだと思います。好き嫌いではなくて。

鈴　木：より専門的に学びたくなった時、専門性を学べる部分からは有料にしてもいいかもしれないですね。

小山内：そうですね。きっかけは無料ですけど、本当に自分が学びたいこと、資格とかだけではなく､そこに一歩つながっていくものは多少支払っても構わないのかなと。

鈴　木：そうですね。

小山内：子どもが質問した時に、学生さんなり先生がちゃんと夢のある答えを出していただけるとか、そういう教育をしてほしいです。子どもの教育じゃなくて。

浅　野：例えば学生教育ってありますね。教育学部では教員を目指して勉強していますが、それは確かに勉強もしなければいけないんですけど、地域の人とコミュニケーションをとる、あるいは将来はPTAになる人と話をしておくということも本当は１つ勉強と思います。そういう勉強もあるということからすると、資格も含めてですけれども、何か目指すものはあるけれども、いろいろなものが重なっていくんだよという教育のカリキュラムみたいなものが生涯学習のほうにあってもい

いと思います。
鈴　木：そうですね。
小山内：津軽弁の初級、中級、上級じゃないけど、私も流暢な津軽弁をしゃべりたいです。
浅　野：そういうのにしても、例えば医療や介護の現場ではこういう勉強も必要ですよというのを伝えてもいいわけですよね。単に「津軽弁講座」ではなく、こういう場面でも活用できますと。

情報を集める手段

藤　田：皆さんはふだん、ネットで情報を集めるということがかなり大きな比重を占めているんですか。
小山内：お母さんたちは携帯です。何かあると全部携帯で検索していますね。パソコンを使うよりも携帯の人が多いですね。
前　田：みたいですね。
浅　野：メルマガはどうでしょう。情報を受け取るだけですよね。
小山内：あと、よくやっているのはフェイスブックとかツイッター。
深　作：SNSは必須になりましたね。
浅　野：もしセンターのほうからこういう講座がありますとか、そういうお知らせをもらうと役に立ちそうですか。
鈴　木：それは役に立つと思います。
小山内：見る人は限られても、いろいろな人がいるので、それぞれ対応しているとそれなりに集まってくると思います。あと、口コミは大きいですね、やっぱり。
深　作：やはりふだんは口コミになりますよね。
前　田：今、高齢者でも、メールなんですよね。ファクシミリよりもメールが多いです。
深　作：医療福祉大で介護をやられている先生からすると、今度、高齢者のネット・ケータイ問題があと５年後ぐらいに絶対問題になってくると。
前　田：そうですね。
鈴　木：何かいろいろ詐欺とかもいっぱいありますしね。
藤　田：今、個人情報がいろいろな形で流出しているから…。
鈴　木：怖いですね。

受講アンケートの実施について

浅　野：毎回センターの授業とか出るとアンケートをお願いしていますが、いつも同じことを書かなければいけない。例えば年齢だとかどこで知りましたとか。例えばそれをある程度こちらのほうで把握していれば、そこのところで感想だけ入れればもう十分みたいな。そうなれば楽なのかなと思うんですよね。
小山内：アンケートを書くのが嫌だというお母さんがいました。あの時間が嫌だという。
浅　野：自分でもそうなので。アンケートが一番嫌なんですよね。
小山内：逆に受講中に疑問があれば、そこで消化できたらなといつも思うんですけど。

鈴　木：そうですね。あとアンケートの後、また何か１つ欲しいですよね。
小山内：何かね。
藤　田：例えば内容のわかっている講座について、ぜひこういう点は触れてほしいとか、こういうテーマに興味があるのでそういう内容を入れてほしいとか、事後のアンケートじゃなくて事前に要望を寄せるというのはどうでしょう。
小山内：とてもいいと思います。 ある先生の講座の時に、事前に紙が渡されて質問など書いて出してくださいといわれて、それを出すと最後に先生が全部読んで答えるんですよ。それがすごく温かいというか。
鈴　木：ありがたいですね。
藤　田：事前にメールなどで寄せていただくと…。メールだと簡単に気軽に書ける。
深　作：そうですね。申し込み欄に、そういう一覧はつくってもいいかもしれないですね。
小山内：質疑応答の時間がちょっとでもいいから入っているといいですね。
深　作：質疑応答の時は出しづらくて、終わってから個人的に来る方が結構多いんですよね。
藤　田：講師の方のもっている雰囲気とありますよね。私が関わった講座では、最中でも質問とかがあり、それはそれで１つのやり方として良いと思っています。参加者がもっとこういうことも知りたい､あるいは感想としてこういうことをいいたい、そういう場をもっと多くつくったりしたいと思いますね。
浅　野：そうですね。

深　作：私たちが思っていた以上に、皆さんからの本当にストレートな声をお聞かせいただき、早速生かせるもの、これからみんなで検討していくもの、いろいろな示唆に富むものがたくさん出てきました。ぜひこれからもいろいろとご参加いただいて、ご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。今日はありがとうございました。

文責：深作　拓郎

Ⅱ. 事　業　報　告

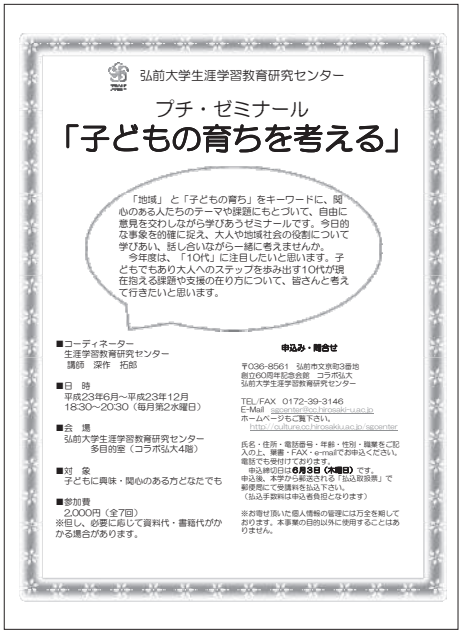
1．生涯学習教育研究センター主催・共催事業

プチ・ゼミナール「子どもの育ちを考える」

対 象 者	子どもに興味・関心のある方どなたでも	受講者数	延べ　72名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	生涯学習教育研究センター多目的ホール		

日　　時	講　師	所　　属	実施概要
2011年6月8日 水　18：30 ～ 20：30 2011年7月13日 水　18：30 ～ 20：30 2011年8月10日 水　18：30 ～ 20：30 2011年9月14日 水　18：30 ～ 20：30 2011年10月12日 水　18：30 ～ 20：30 2011年11月9日 水　18：30 ～ 20：30 2011年12月14日 水　18：30 ～ 20：30	深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	「地域」と「子どもの育ち」をキーワードに、関心のある人たちのテーマや課題にもとづいて、自由に意見を交わしながら学びあうゼミナールです。今日的な事象を的確に捉え、大人や地域社会の役割について学びあい、話し合いながら一緒に考えませんか。 今年度は、「10代」に注目したいと思います。子どもでもあり大人へのステップを歩み出す10代が現在抱える課題や支援の在り方について、皆さんと考えて行きたいと思います。

実施風景



弘前大学生涯学習教育研究センター

プチ・ゼミナール

「子どもの育ちを考える」

「地域」と「子どもの育ち」をキーワードに、関心のある人たちのテーマや課題にもとづいて、自由に意見を交わしながら学びあうゼミナールです。今日的な事象を的確に捉え、大人や地域社会の役割について学びあい、話し合いながら一緒に考えませんか。
今年度は、「10代」に注目したいと思います。子どもでもあり大人へのステップを歩み出す10代が現在抱える課題や支援の在り方について、皆さんと考えて行きたいと思います。

■コーディネーター
生涯学習教育研究センター
講師　深作　拓郎

■日　時
平成23年6月～平成23年12月
18:30～20:30（毎月第2水曜日）

■会　場
弘前大学生涯学習教育研究センター
多目的室（コラボ弘大4階）

■対　象
子どもに興味・関心のある方どなたでも

■参加費
2,000円（全7回）
※但し、必要に応じて資料代・書籍代がかかる場合があります。

申込み・問合せ

〒036-8561　弘前市文京町3番地
創立60周年記念会館　コラボ弘大
弘前大学生涯学習教育研究センター

TEL/FAX　0172-39-3146
E-Mail　sgcenter@co.hirosaki-u.ac.jp
ホームページもご覧下さい。
http://u.fukuzu.hirosaki.ac.jp/sgcenter

氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入の上、葉書・FAX・e-mailでお申込ください。
電話でも受付けております。
申込締切日は**6月3日（木曜日）**です。
申込後、本学から郵送される「払込取扱票」で郵便局にて受講料をお込下さい。
（払込手数料は申込者負担となります）

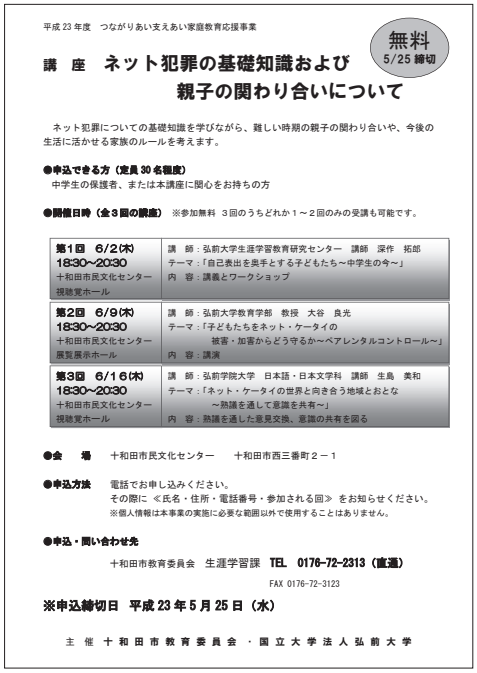
※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

平成23年度つながりあい支えあい家庭教育応援事業
「ネット犯罪の基礎知識および親子の関わり合いについて」

対 象 者	中学生の保護者または、地域参加者など	受講者数	延べ　76名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	十和田市教育委員会
会　　場	十和田市民文化センター視聴覚ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年6月2日		深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	自己表出を奥手とする子どもたち －中学生の今－
木	18：30 ～ 20：30			
2011年6月9日		大谷　良光	教育学部　教授	ネット・ケータイの被害・加害から子どもをどう守るか　～ネット時代のペアレンタルコントロール～
木	18：30 ～ 20：30			
2011年6月16日		生島　美和	弘前学院大学　講師	ネット・ケータイの世界と向き合う地域とおとな　～熟議を通して意識を共有～
木	18：30 ～ 20：30			

実施風景



平成 23 年度　つながりあい支えあい家庭教育応援事業

無料
5/25 締切

講　座　ネット犯罪の基礎知識および親子の関わり合いについて

ネット犯罪についての基礎知識を学びながら、難しい時期の親子の関わり合いや、今後の生活に活かせる家族のルールを考えます。

●申込できる方（定員 30 名程度）
中学生の保護者、または本講座に関心をお持ちの方

●開催日時（全３回の講座）　※参加無料　３回のうちどれか１～２回のみの受講も可能です。

第1回　6/2(木) **18:30～20:30** 十和田市民文化センター 視聴覚ホール	講　師：弘前大学生涯学習教育研究センター　講師　深作　拓郎 テーマ：「自己表出を奥手とする子どもたち～中学生の今～」 内　容：講義とワークショップ
第2回　6/9(木) **18:30～20:30** 十和田市民文化センター 展覧展示ホール	講　師：弘前大学教育学部　教授　大谷　良光 テーマ：「子どもたちをネット・ケータイの被害・加害からどう守るか～ペアレンタルコントロール～」 内　容：講演
第3回　6/16(木) **18:30～20:30** 十和田市民文化センター 視聴覚ホール	講　師：弘前学院大学　日本語・日本文学科　講師　生島　美和 テーマ：「ネット・ケータイの世界と向き合う地域とおとな～熟議を通して意識を共有～」 内　容：熟議を通した意見交換、意識の共有を図る

●会　　場　十和田市民文化センター　　十和田市西三番町２－１

●申込方法　電話でお申し込みください。
その際に ≪氏名・住所・電話番号・参加される回≫ をお知らせください。
※個人情報は本事業の実施に必要な範囲以外で使用することはありません。

●申込・問い合わせ先
十和田市教育委員会　生涯学習課　**TEL　0176-72-2313（直通）**
FAX 0176-72-3123

※申込締切日　平成 23 年 5 月 25 日（水）

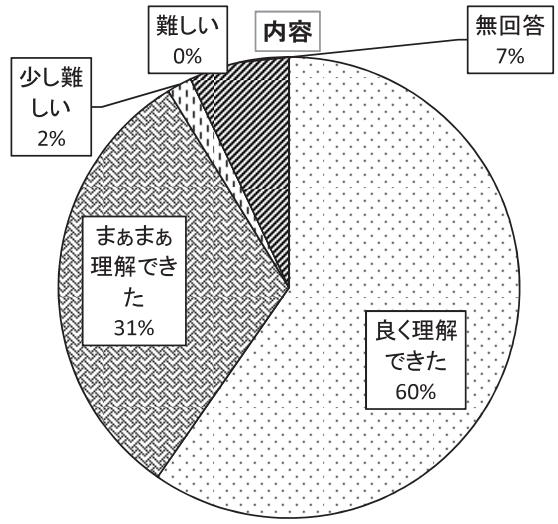
主 催　十和田市教育委員会・国立大学法人弘前大学

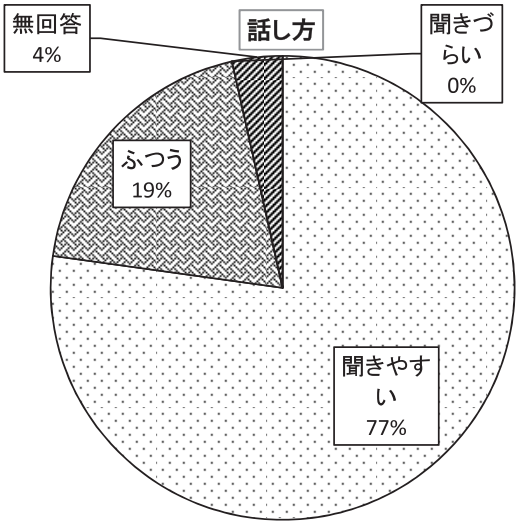
H23 平成23年度つながりあい支えあい家庭教育応援事業「ネット犯罪の基礎知識および親子の関わり合いについて」

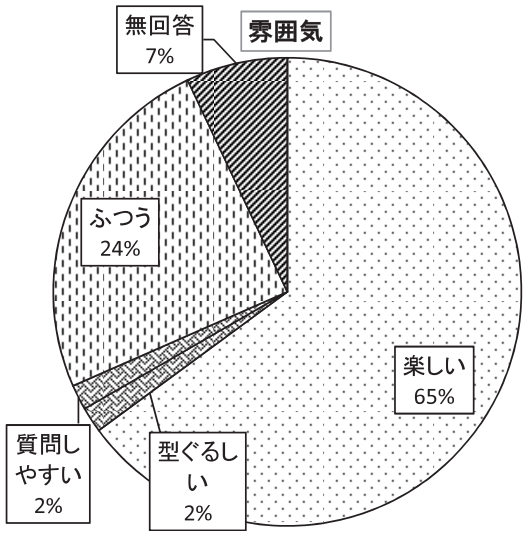
（十和田市民文化センター視聴覚ホール）

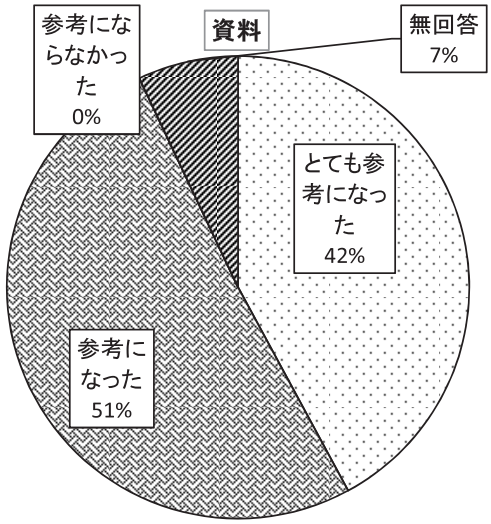
平成23年6月2日～6月16日
有効回答者数　57名　【男性　17名、女性　35名、無回答　5名】

今回の講座はいかがでしたか？









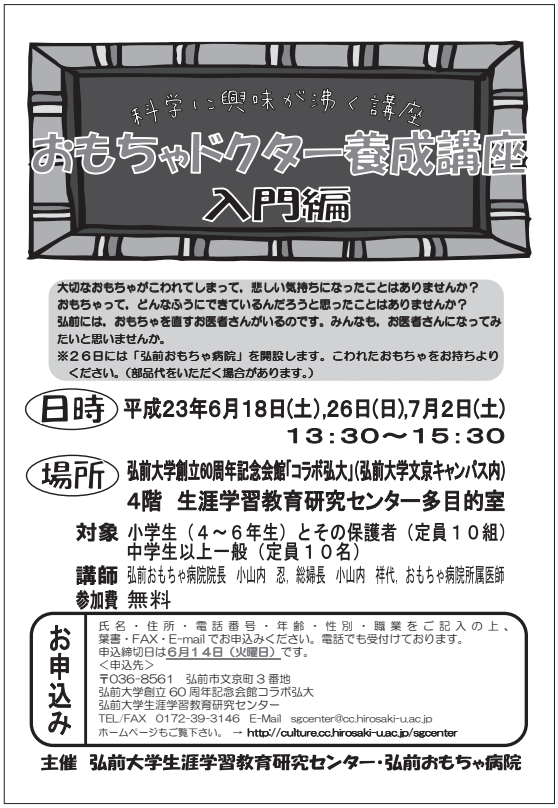
・パソコン・ケータイのあやうさを再確認できたような気がする。
・携帯・ネットこのような視点で考えることができてよかったです。
・学生さんの説明が事例をふまえての説明でわかりやすかった。ゲーム機で有害サイトにアクセスできることは知らなかったので危機感を感じた。
・ケータイ･ネットの被害や、それ防ぐ方法がある事を知りました。初めて聞く言葉等もありましたが、本当に為になりました。ありがとうございました。
・我家の家族は宇宙人かな？と思わせる内容をききました。
・限られた人しかお話しない。20名そこそこの参加人数でしたので、出来たらみなさん一人ひとりから聞きだすような事をして今日のテーマに合った事をメーンにしてひきだすようにすればいいのでは。

「科学に興味が沸く講座」おもちゃドクター養成講座・入門編

対 象 者	小学生（4年生～6年生）中学生以上一般	受講者数	延べ　12名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	弘前おもちゃ病院
会　　場	生涯学習教育研究センター多目的ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年6月18日		小山内　忍	弘前おもちゃ病院院長	大切なおもちゃがこわれてしまって、悲しい気持ちになったことはありませんか？おもちゃって、どんなふうにできているんだろうと思ったことはありませんか？弘前には、おもちゃを直すお医者さんがいるのです。みんなも、お医者さんになってみたいと思いませんか。※26日には「弘前おもちゃ病院」を開設します。こわれたおもちゃをお持ちよりください。（部品代をいただく場合があります。）
土	13：30 ～ 15：30			
2011年6月26日		小山内祥代	弘前おもちゃ病院総婦長	
日	13：30 ～ 15：30			
2011年7月2日			弘前おもちゃ病院所属医師	
土	13：30 ～ 15：30			

実施風景

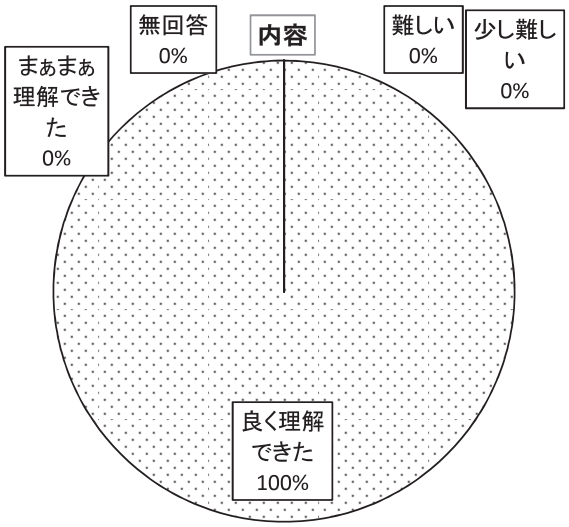


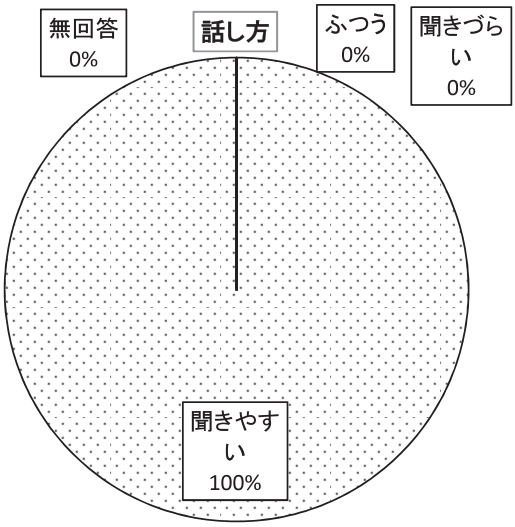
H23　「科学に興味が沸く講座」おもちゃドクター養成講座・入門編

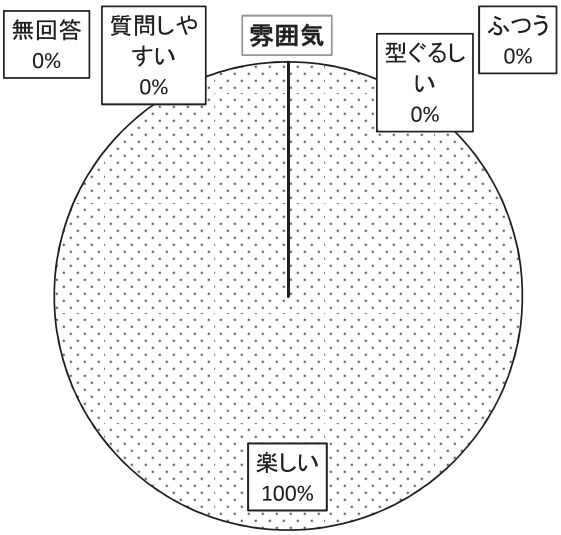
（コラボ弘大４階　生涯学習教育研究センター）

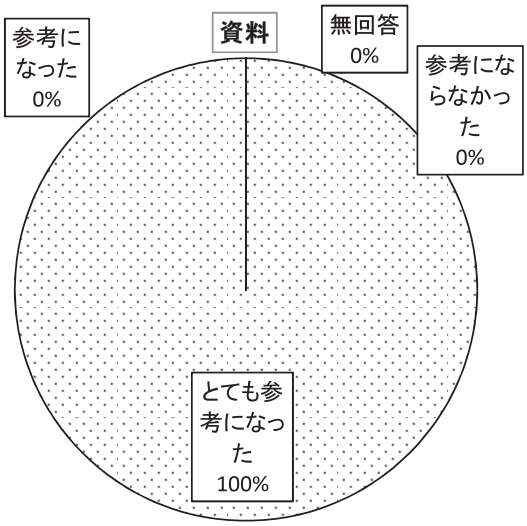
平成23年６月18日～７月２日
有効回答者数　２名　【男性　２名、女性　０名、無回答　０名】

今回の講座はいかがでしたか？









・今回参加させていただいて、いろいろと参考になりました。次回も参加したいと思います。
・とても楽しい講座でした。しかし、参加者が３名とは、少し残念な気がしました。予算等をかけて実施する講座なので。
・今回は入門編ですが、今後は中級編、上級編等の予定はあるのでしょうか？また、終了後に修了証が発行されるのでしょうか？（職場へ自己研修終了の報告のため）

レクチャーコンサート「マイ・ショパン・イヤー」

対象者	一　般	受講者数	延べ　524名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	創立50周年記念会館 みちのくホール（コンサート）　会議室１（託児室）		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年7月16日		浅野　　清	生涯学習教育研究センター長 教育学部　教授	昨年、ショパン生誕200年を迎えて素晴らしい演奏に触れる機会が多くありました。ショパンの音楽を聴いていると、改めてその名曲の多様さに驚かされます。『レクチャー・コンサート』ではその謎にせまるためのキーワードを基に音楽の発見と演奏を楽しみます。
土	11：00 ～ 12：00			
2011年8月20日				
土	11：00 ～ 12：00			
2011年10月29日				
土	11：00 ～ 12：00			
2011年12月10日				
土	11：00 ～ 12：00			

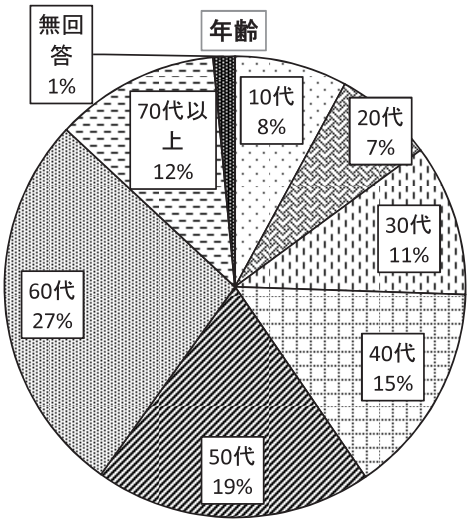
実施風景

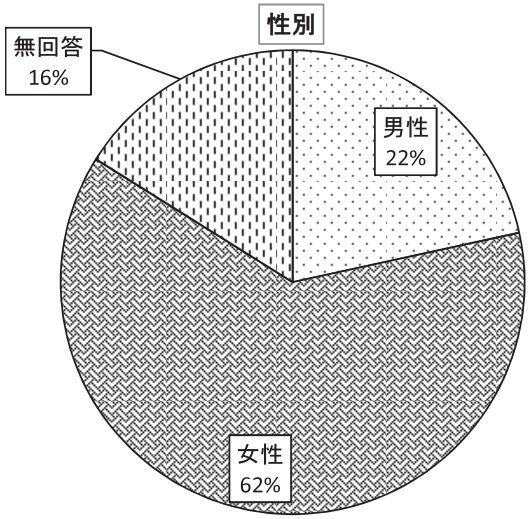
H23　レクチャーコンサート「マイ・ショパン・イヤー」

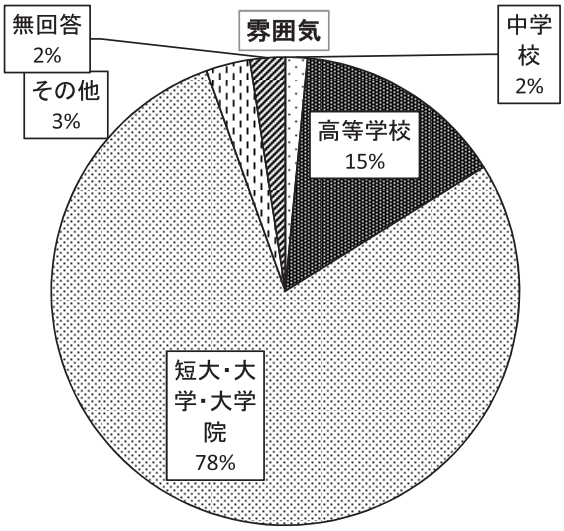
（創立50周年記念会館　みちのくホール）

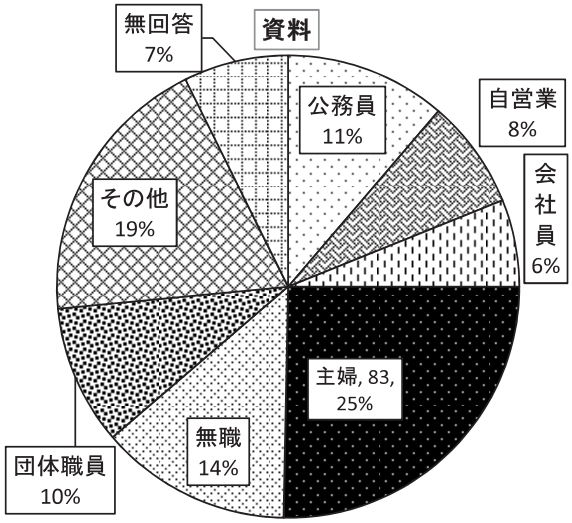
平成23年7月16日～12月10日
有効回答者数　329名　【男性　71名、女性　205名、無回答　53名】

今回の講座はいかがでしたか？









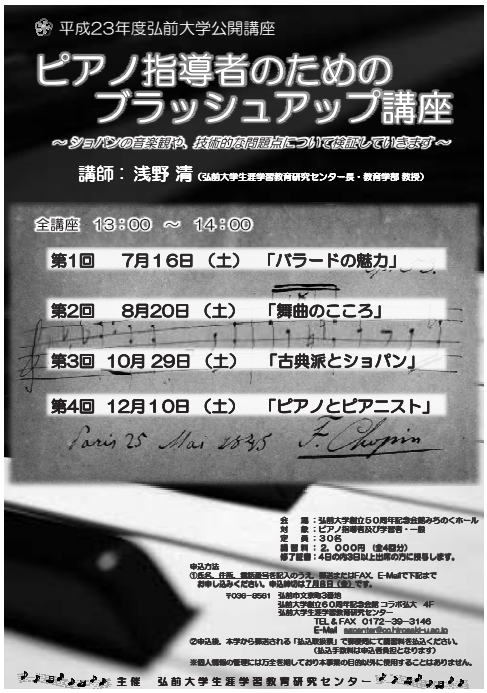
・感動的な、胸揺さぶられる演奏曲ばかりでした。「夜想曲」はブルース調的な所もあり、素敵でした。「雨だれ」は震災時の立ち尽くしていた人々を思い出して来ました。
・若い頃は好きになれなかったショパンですが、年を重ねるごとにしっくり身体になじむようになってきました。ショパンの短く駆け足で過ぎていった人生を思うと、一曲一曲がとても重みのあるものに感じられます。短い時間でしたが、とてもよい時間を持つことができました。ありがとうございました。
・ピアノ曲にまつわる先生のお話が楽しいので演奏も聴きたいですが、お話しもたくさん聴きたいです。
・レクチャーがすごく良い。初めて聴く曲でも充分雰囲気を味わうことができました。

公開講座「ピアノ指導者のためのブラッシュアップ講座」

対 象 者	ピアノ指導者及び学習者・一般	受講者数	延べ　86名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	創立50周年記念会館 みちのくホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年7月16日		浅野　　清	生涯学習教育研究センター長 教育学部　教授	昨年、ショパン生誕200年を迎えて素晴らしい演奏に触れる機会が多くありました。ショパンの音楽を聴いていると、改めてその名曲の多様さに驚かされます。本講座では技術面の問題や作曲家の音楽観について検証していきます。
土	13：00 ～ 14：00			
2011年8月20日				
土	13：00 ～ 14：00			
2011年10月29日				
土	13：00 ～ 14：00			
2011年12月10日				
土	13：00 ～ 14：00			

実施風景

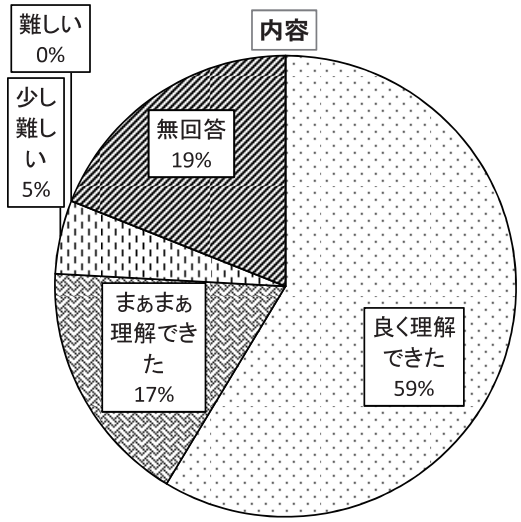


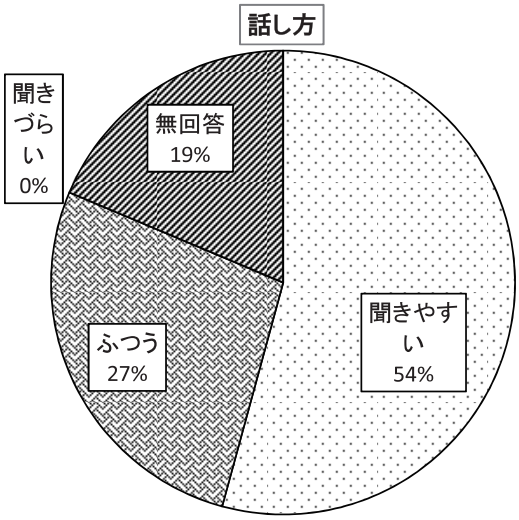
H23　公開講座「ピアノ指導者のためのブラッシュアップ講座」

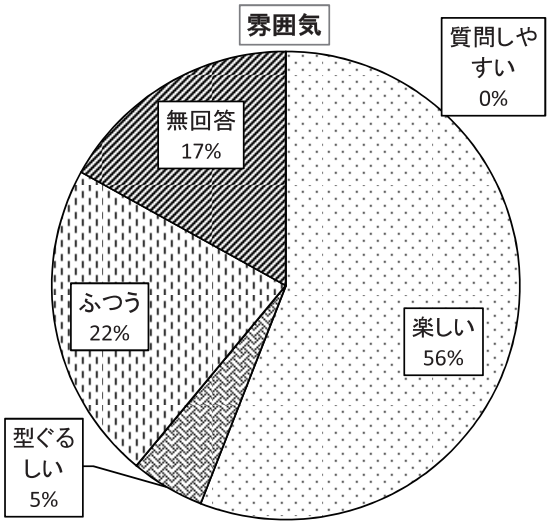
（創立50周年記念会館 みちのくホール）

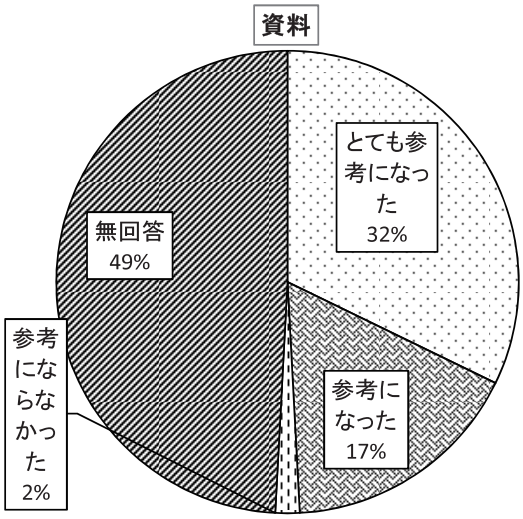
平成23年7月16日～12月10日
有効回答者数　59名　【男性　4名、女性　46名、無回答　9名】

今回の講座はいかがでしたか？









・今回のようにコンサートと連結した内容だととても実になります。
・普段の生活の中でピアノの練習に時間をとるのが難しくても先生の講座やレッスンで教わったことがきっかけとなりあきらめていた曲がひけるようになったり、手をどう使うか楽譜をどう読みとるのかの勉強になります。
・甘いメロディーだけでなく、他の視点・注目点を知れたことが大きな糧となりました。
・毎回１回ずつ、浅野先生のお話を聞いて勉強できる機会があったらどんなに素晴らしいかと思います。
・今ショパンに取り組んでいるので、今回の講座は楽しみにしていました。また今日教えて貰った事を、自分の演奏に生かしたいです。

講演会「保育現場における子どもや保護者との関わり方について考える」

対 象 者	市内保育園の保育者、一般	受講者数	延べ　87名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	青森市子どもしあわせ課
会　　場	青森市福祉増進センター　大会議室		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年7月22日		増田　貴人	教育学部　准教授	日々の保育実践を振り返る
金	14：00 ～ 16：00			
2011年8月25日		北宮　千秋	保健学研究科 准教授	配慮を必要とする子どもと保護者の実情と関わりについて
木	14：00 ～ 16：00			
2011年10月17日		安藤　房治	教育学部　教授	障がい児の保育を通して小学校や関係組織との連携を考える
月	14：00 ～ 16：00			

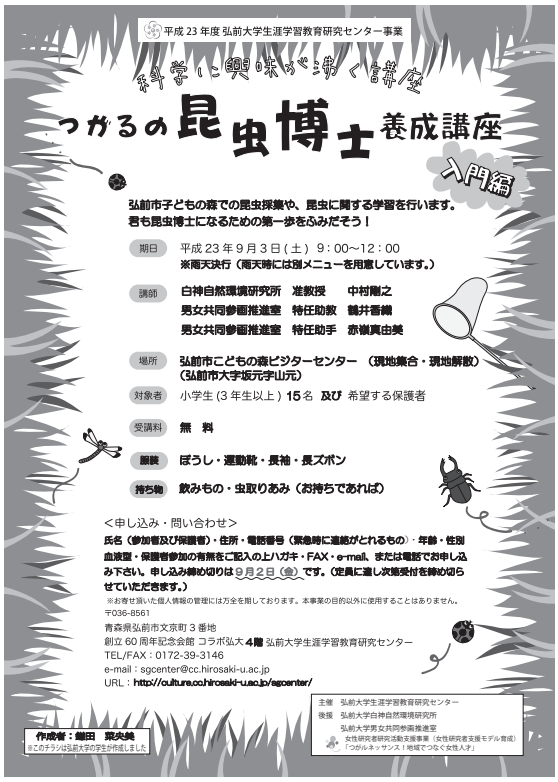
実施風景

「科学に興味が沸く講座」つがるの昆虫博士養成講座・入門編

対 象 者	小学生（3年生以上）及び希望する保護者	受講者数	3名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	弘前大学男女共同参画推進室
会　　場	弘前市こどもの森ビジターセンター		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年9月3日		中村　剛之	白神自然環境研究所 准教授	弘前市こどもの森での昆虫採集や、昆虫に関する学習を行います。君も昆虫博士になるための第一歩をふみだそう！
土	9：00　～　12：00	鶴井　香織	男女共同参画推進室 特任助教	
		赤嶺真由美	男女共同参画推進室 特任助手	

実施風景

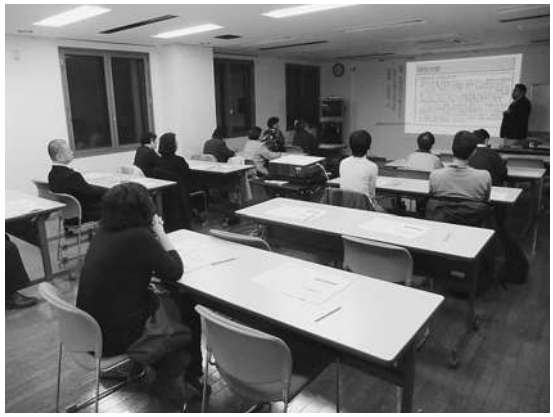


講演会「外国事情と日本」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　43名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	大間町教育委員会
会　　場	大間町公民館		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年9月21日	水　18：30 ～ 20：00	小山　宣子	国際交流センター 准教授	留学生の生活事情
2011年10月12日	水　18：30 ～ 20：00	曽我　　亨	人文学部　教授	アフリカの遊牧民に学ぶ
2011年11月15日	火　18：30 ～ 20：00	石塚　哉史	農学生命科学部 准教授	中国産食品の輸入と日本

実施風景

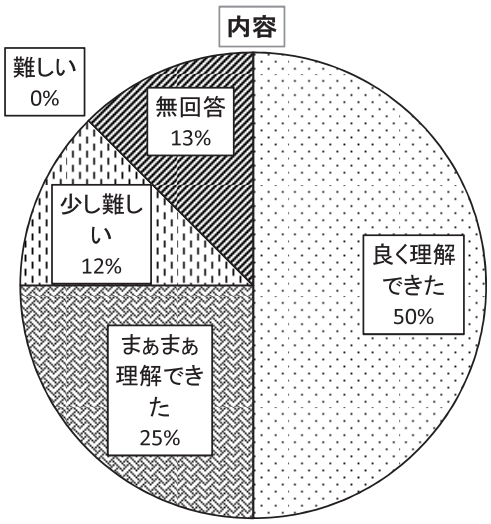


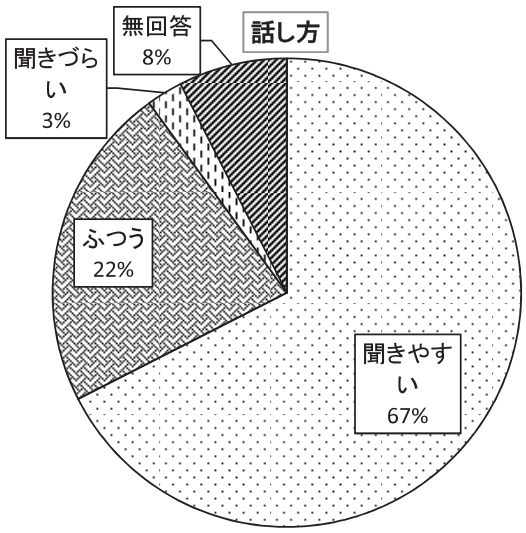
H23　講演会「外国事情と日本」

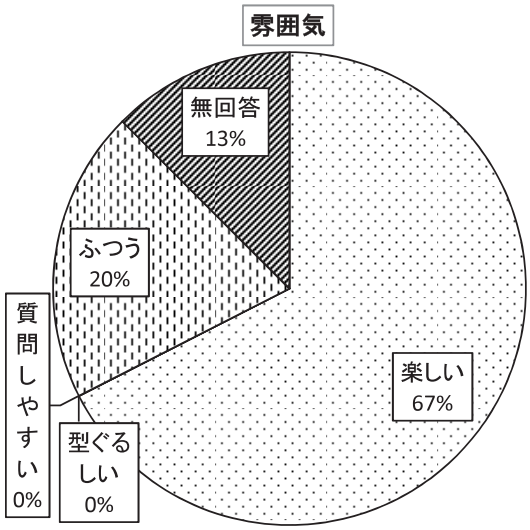
（大間町公民館）

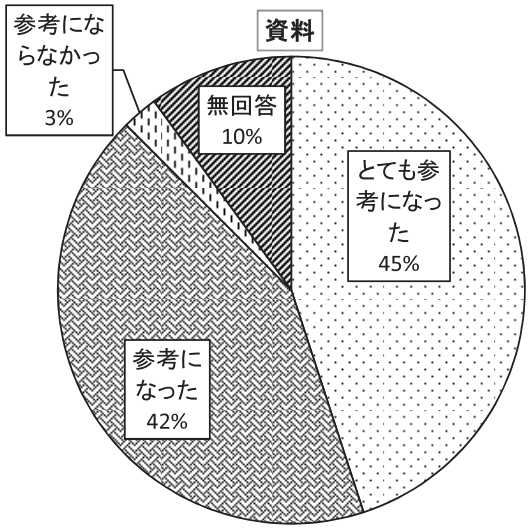
平成23年9月21日～11月15日
有効回答者数　40名　【男性　4名、女性　22名、無回答　14名】

今回の講座はいかがでしたか？









・中国・韓国の留学生事情がよく理解できた。
・人間関係について牧畜民から得るものは大きい。
・地域性、生活の面でもスーダンクシ族の違いがすごいなと感じました。
・ユーモアたっぷりの話し方で楽しかった。大変勉強になりました。ありがとうございました。
・本日の「演題」中国食品という事で来ましたが……毎日食べる食品がほとんど輸入と知りなんとなく心配です。
・食品企業と国内農業が共存共栄で製作が必要と感じました。

講演会「活性化する青森の今とこれから」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　69名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	むつ市教育委員会
会　　場	むつ市下北文化会館		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年9月29日	木　18：30 ～ 20：30	佐々木純一郎	大学院地域社会研究科　教授	地域ブランドと地域経済
2011年10月6日	木　18：30 ～ 20：30	藤崎　浩幸	農学生命科学部　准教授	新幹線開業によるグリーンツーリズムの今後の展開
2011年10月20日	木　18：30 ～ 20：30	鶴井　香織 赤嶺真由美	男女共同参画推進室　特任助教 男女共同参画推進室　特任助手	「リケ女で地域を盛り上げる!? ―二人の女流昆虫博士の研究―」

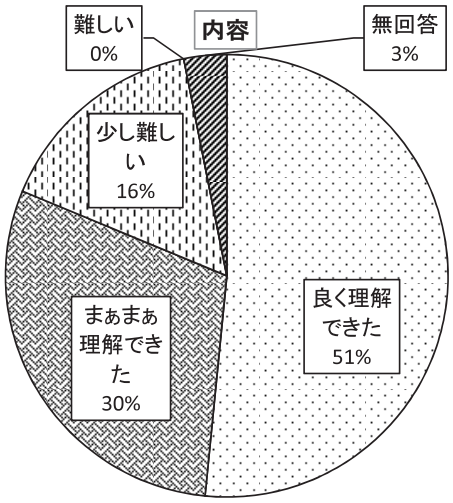
実施風景

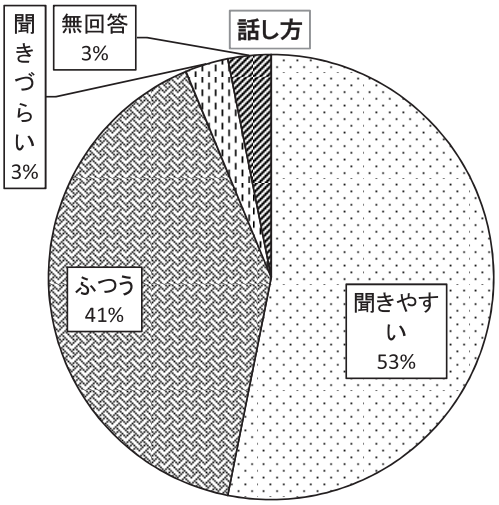
H23　講演会「活性化する青森の今とこれから」

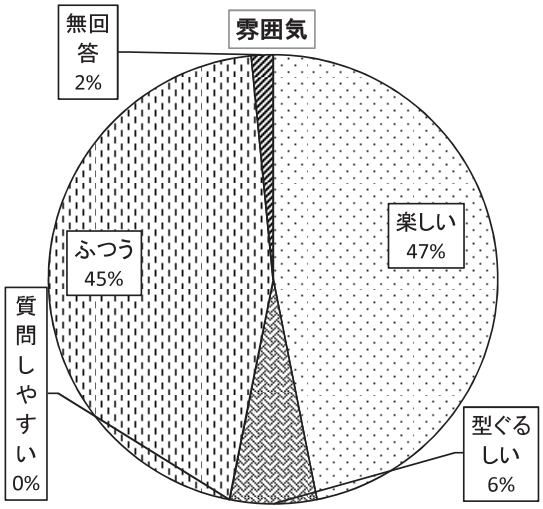
（むつ市下北文化会館）

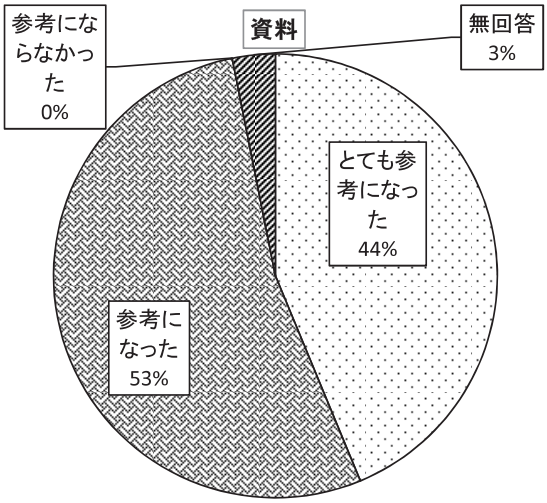
平成23年9月29日～10月20日
有効回答者数　64名　【男性　26名、女性　28名、無回答　10名】

今回の講座はいかがでしたか？









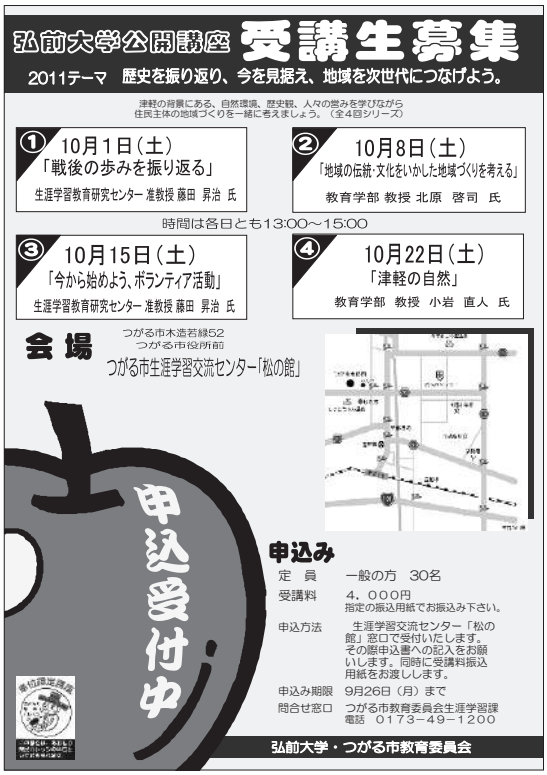
・老若男女を問わずに、理解しやすい内容で、具体例が身近なものであったおかげもあり、本当に良い時間を過ごせたと思う。講義に参加している人たちも、経営、経済に関係している人も多く、質疑応答も非常に濃いものであり、本当によかった。
・内容は少し難しかったですが、面白いものでした。私は大学への進学を考えていて、地域政策学部へ進もうと考えているので、今回の講演は私の目指す道に非常に近いもので大変為になりました。ありがとうございました。
・おもしろく楽しいまちづくりができればと思います。定住の要件と思います。
・下北の今後の活性化について、非常に参考になった。
・今まで聴いたことのないことがたくさんあって、ためになりました。グリーンツーリズムは利益を求めていくと、成り立たなくなるため、とても難しい考えだと思いました。
・新幹線開業は、グリーンツーリズム、観光には、関係ないと思っていたが、3時間の距離感がわかった。
・話の内容は難しいけれど、物事を探求することの大切さがわかったように思う。
・色々と面白かったです。ありがとうございました。個人的にはもの知りおじさんにつめられるお2人の姿が面白かったです（笑）

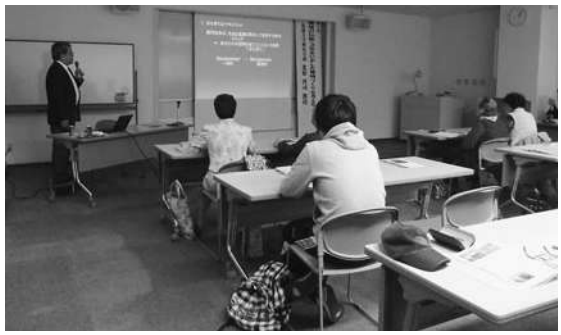
公開講座「歴史を振り返り、今を見据え、地域を次世代につなげよう」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　41名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	つがる市教育委員会
会　　場	つがる市生涯学習交流センター（松の館）		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年10月1日	土　13：00 ～ 15：00	藤田　昇治	生涯学習教育研究センター　准教授	戦後の歩みを振り返る
2011年10月8日	土　13：00 ～ 15：00	北原　啓司	教育学部　教授	地域の伝統・文化をいかした地域づくりを考える
2011年10月15日	土　13：00 ～ 15：00	藤田　昇治	生涯学習教育研究センター　准教授	今から始めよう、ボランティア活動
2011年10月22日	土　13：00 ～ 15：00	小岩　直人	教育学部　准教授	津軽の自然

実施風景



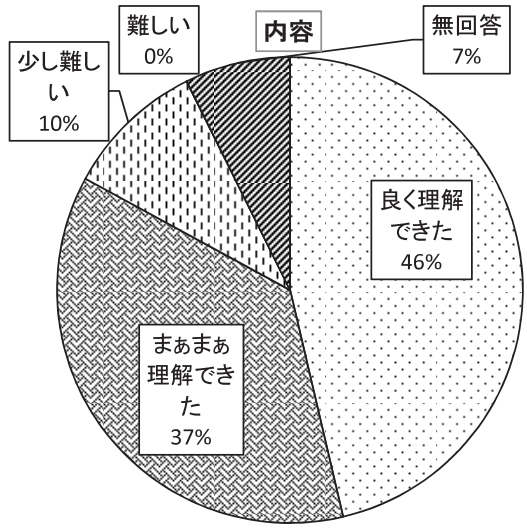


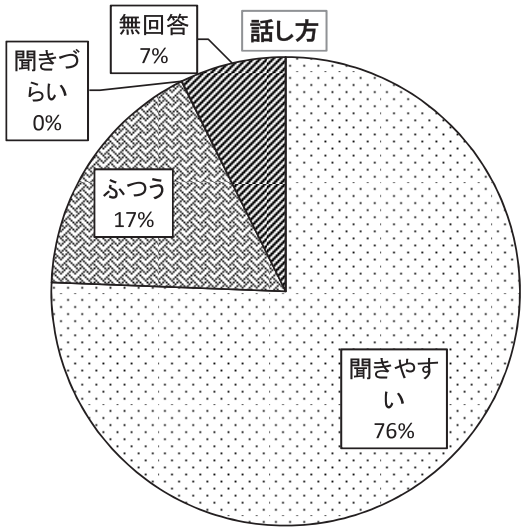
H23　公開講座「歴史を振り返り、今を見据え、地域を次世代につなげよう」

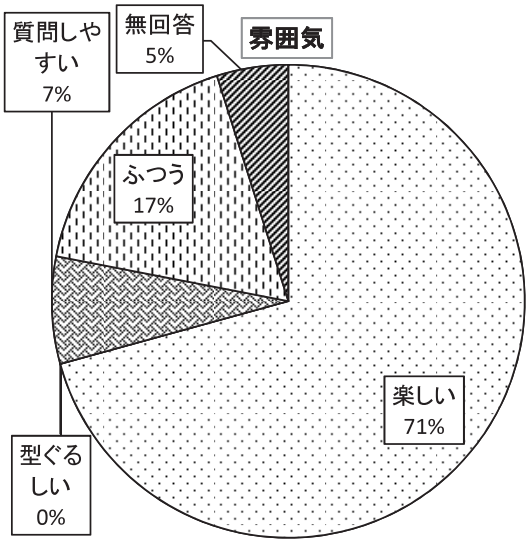
（つがる市生涯学習交流センター（松の館））

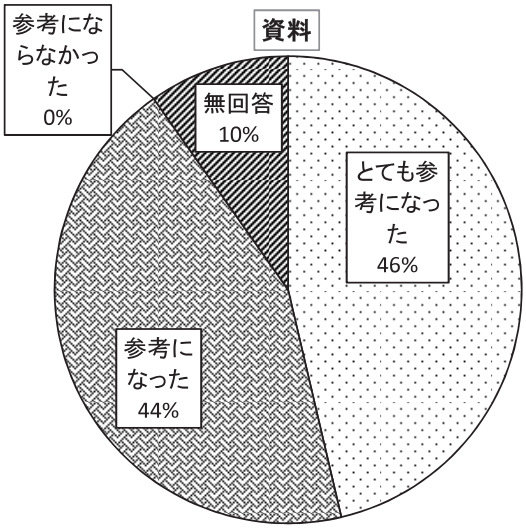
平成23年10月１日～11月９日
有効回答者数　41名　【男性　12名、女性　16名、無回答　13名】

今回の講座はいかがでしたか？









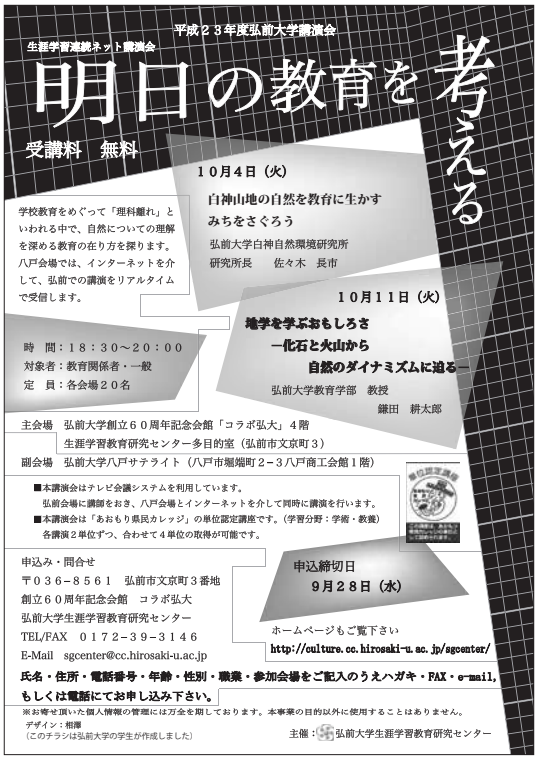
・地元津軽をさまざまな角度から見直すよい機会となりました。ありがとうございました。
・この地に住む住人として、子から孫へどんな地域を残せるのかと考えながらこの講座の受講を決めました。そんな自分の想いと講座内容がドンピシャリだったので、楽しく聴くことができました。行政に携わっている方々にも、是非きいてもらいたい内容だなと思いました。
・15年位ボラをさせてもらって先生の話はとても納得しました。お話の内容は、まさにその通りだと思いました。十人十色、考え方の違いもあります。
・無関心な事が多いので、とても勉強になりました。自然を視る目が開けたように思う。

ネット講演会「明日の教育を考える」

対 象 者	教育関係者・一般	受講者数	延べ（八戸会場 4／弘前会場 26）30名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	生涯学習教育研究センター/弘前大学八戸サテライト		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年10月４日		佐々木長市	白神自然環境研究所 研究所長	白神山地の自然を教育に生かす道をさぐろう
火	18：30 ～ 20：00			
2011年10月11日		鎌田耕太郎	教育学部　教授	地学を学ぶおもしろさ －化石と火山から自然のダイナミズムに迫る－
火	18：30 ～ 20：00			

実施風景

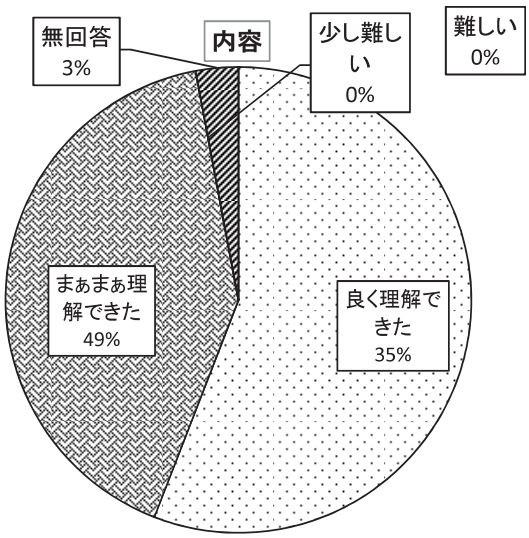


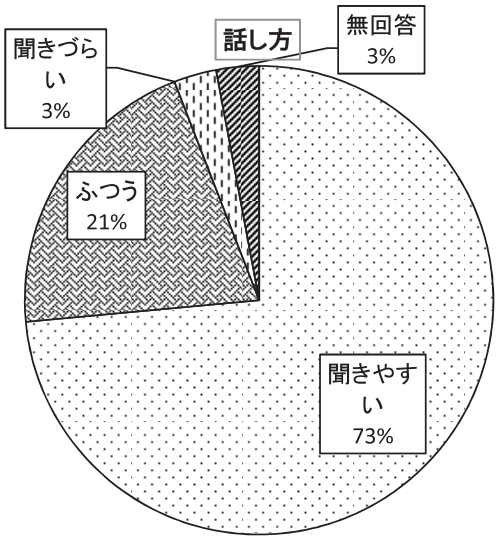
H23　ネット講演会「明日の教育を考える」

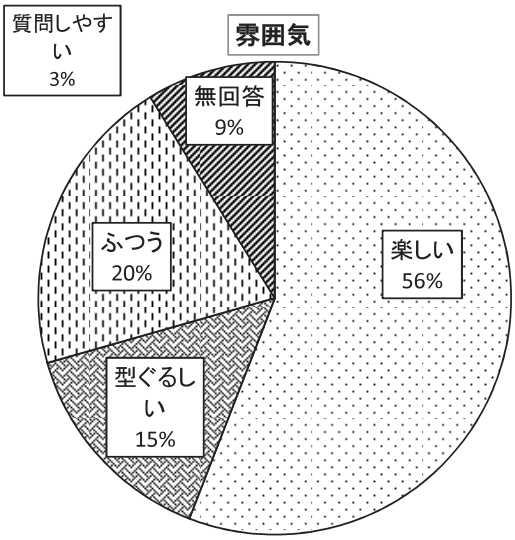
（コラボ弘大４階　生涯学習教育研究センター，八戸サテライト）

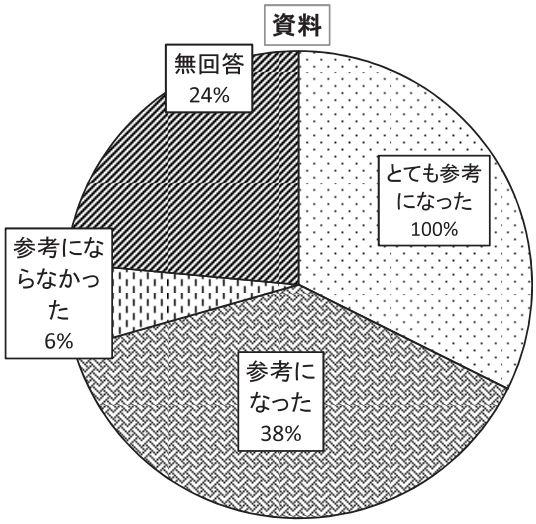
平成23年10月４日～10月11日
有効回答者数　34名　【男性　16名、女性　16名、無回答　２名】

今回の講座はいかがでしたか？









・恐竜から鳥類への進化のつながりがわかりやすかった。
・内容が多く時間が短すぎた。もう少し、何回かに分けて講義をうけたかった。
・火山について、また次回もう一度機会があれば……と思います。
・白神についてこんなに良いお話をしてくださるのに、受講生が少ないのはもったいないと思います。
・プロジェクターで示した資料の地図などコピーが手許にあればより理解しやすいかと思います。
・「3.11」を契機に自然エネルギーに対する相乗効果が高まることを祈るのみです。関心事がメディアで毎日報道されている時こそ、楽しめるような響き方が効果的と思われます。関係各位に御期待と再なるお願を致しております。
・火山についての時間をふやしてほしかった。ちょっと化石についての時間を取りすぎたみたい。

青年語楽塾「～わんつかあずばってなんぼか本気で～」

対 象 者	板柳町内の20～30代の青年男女	受講者数	延べ　20名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	板柳町教育委員会
会　　場	板柳町多目的ホールあぷる		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年8月28日		弘前大学学生	弘前大学学生	ワークショップ「自分が本気になれること」
日	13：30 ～ 15：30			
2011年9月25日		藤田　昇治	生涯学習教育研究センター　准教授	講演と語り合い「本音を語れる他人（ひと）を増やそう」
日	13：30 ～ 15：30			

実施風景

講演会「病にそなえ健康を保持するコツ」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　84名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	三戸町教育委員会
会　　場	ジョイワーク三戸		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年7月3日		戸塚　　学	教育学部　教授	手軽にできる運動で健康を保持しよう
金	13：30 ～ 15：00			
2011年7月24日		若林　孝一	大学院医学研究科 教授	脳卒中と認知症を知る
木	13：30 ～ 15：00			

実施風景

公開講座「高齢化社会と生涯学習」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　39名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	三沢市教育委員会
会　　場	三沢市公会堂　第６・７集会室		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年10月７日	金　18：30 ～ 20：30	藤田　昇治	生涯学習教育研究センター　准教授	健康を保持するための生涯学習
2011年10月14日	金　18：30 ～ 20：30	米内山千賀子	保健学研究科　講師	高齢者の生活と健康
2011年10月21日	金　18：30 ～ 20：30	深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	「これからの子育て・孫育てのコツ教えます」
2011年10月28日	金　18：30 ～ 20：30	増田　貴人	教育学部　准教授	こども・高齢者の交流について考える

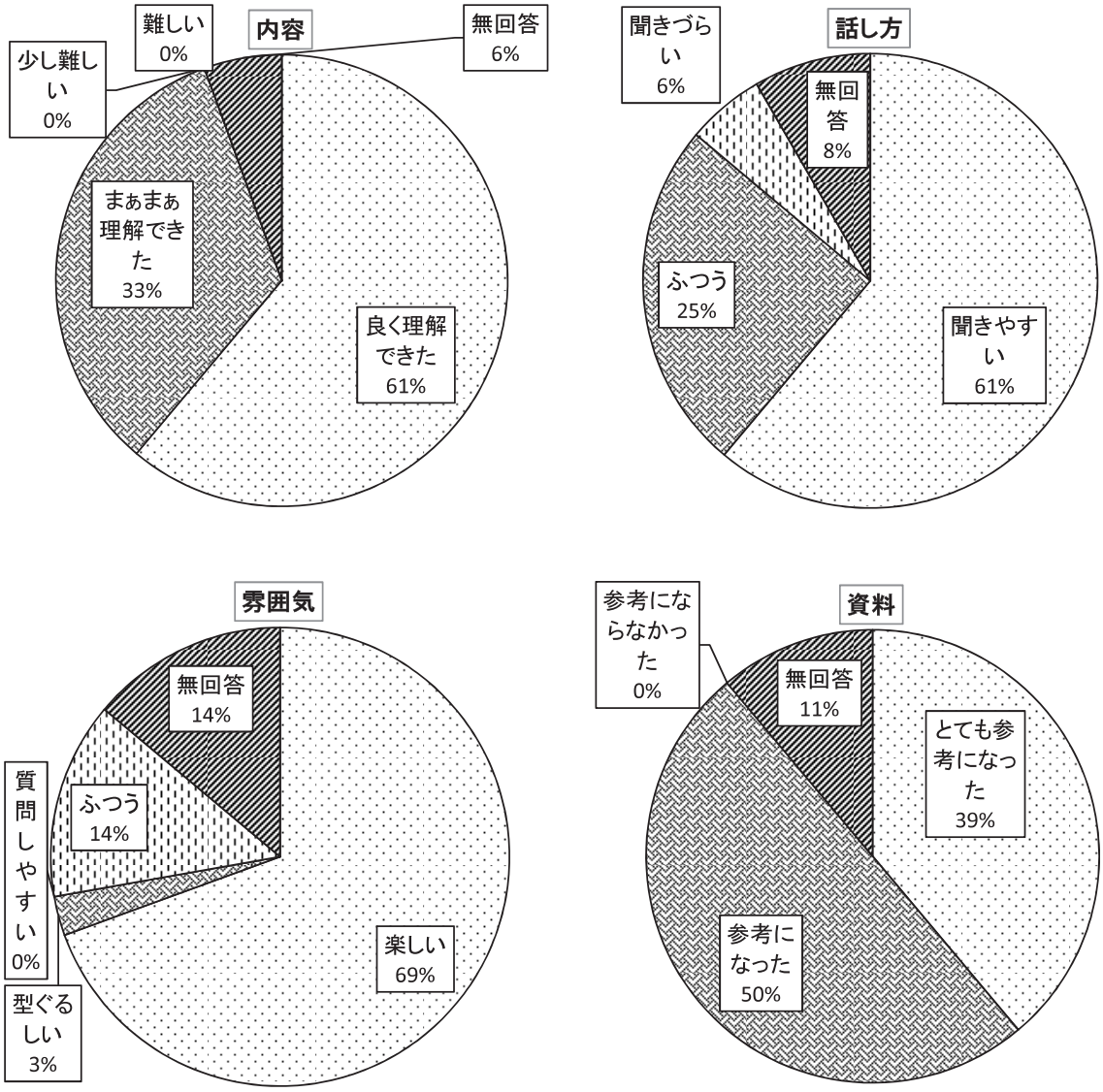
実施風景

H23　公開講座「高齢化社会と生涯学習」

（三沢市公会堂　第6・7集会室）

平成23年10月7日～10月28日
有効回答者数　36名　【男性　6名、女性　20名、無回答　10名】

今回の講座はいかがでしたか？



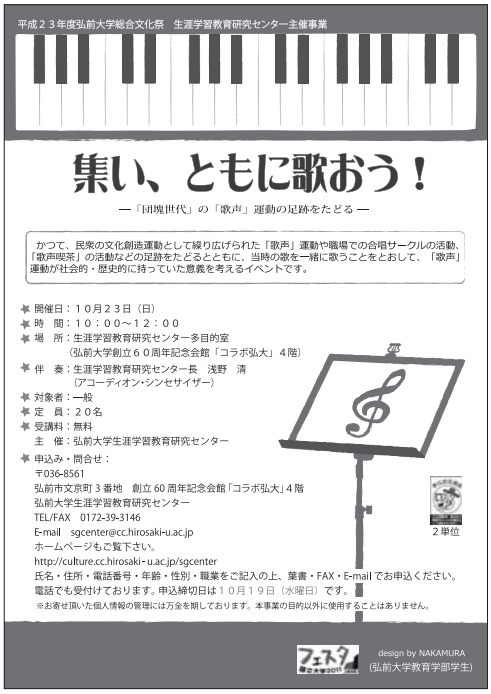
・「生涯発達」とてもびっくりした。インパクトのあることばだと思った。時間がたつのが早かったです。
・寝たきりゼロへの10カ条の中で第6条は、「手は出さず、目を離さず」が老人でも子どもでも同じあてはまるもので、共通する事、大切である事が改めて分かりました。
・例題がたくさんあり、内容が豊富で大変勉強になりました。
・平成23年度の公開講座は日常生活に大変参考になる内容でした。ありがとうございました。

総合文化祭事業
「集い、ともに歌おう！ ―「団塊世代」の「歌声」運動の足跡をたどる―」

対 象 者	一般	受講者数	25名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	生涯学習教育研究センター多目的ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年10月23日		藤田　昇治	生涯学習教育研究センター　准教授	かつて、民衆の文化創造運動として繰り広げられた「歌声」運動や職場での合唱サークルの活動、「歌声喫茶」の活動などの足跡をたどるとともに、当時の歌を一緒に歌うことをとおして、「歌声運動」が社会的・歴史的にどのような意義をもっていたのか、ということを考えます。
日	10：00 ～ 12：00			

実施風景


平成２３年度弘前大学総合文化祭　生涯学習教育研究センター主催事業

集い、ともに歌おう！

―「団塊世代」の「歌声」運動の足跡をたどる ―

かつて、民衆の文化創造運動として繰り広げられた「歌声」運動や職場での合唱サークルの活動、「歌声喫茶」の活動などの足跡をたどるとともに、当時の歌を一緒に歌うことをとおして、「歌声」運動が社会的・歴史的に持っていた意義を考えるイベントです。

- 開催日：１０月２３日（日）
- 時　間：１０：００～１２：００
- 場　所：生涯学習教育研究センター多目的室
  （弘前大学創立６０周年記念会館「コラボ弘大」４階）
- 伴　奏：生涯学習教育研究センター長　浅野　清
  （アコーディオン・シンセサイザー）
- 対象者：一般
- 定　員：２０名
- 受講料：無料
  主　催：弘前大学生涯学習教育研究センター
- 申込み・問合せ：
  〒036-8561
  弘前市文京町３番地　創立 60 周年記念会館「コラボ弘大」４階
  弘前大学生涯学習教育研究センター
  TEL/FAX　0172-39-3146
  E-mail　sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp
  ホームページもご覧下さい。
  http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/sgcenter
  氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入の上、葉書・FAX・E-mail でお申込ください。
  電話でも受付けております。申込締切日は１０月１９日（水曜日）です。
  ※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

２単位

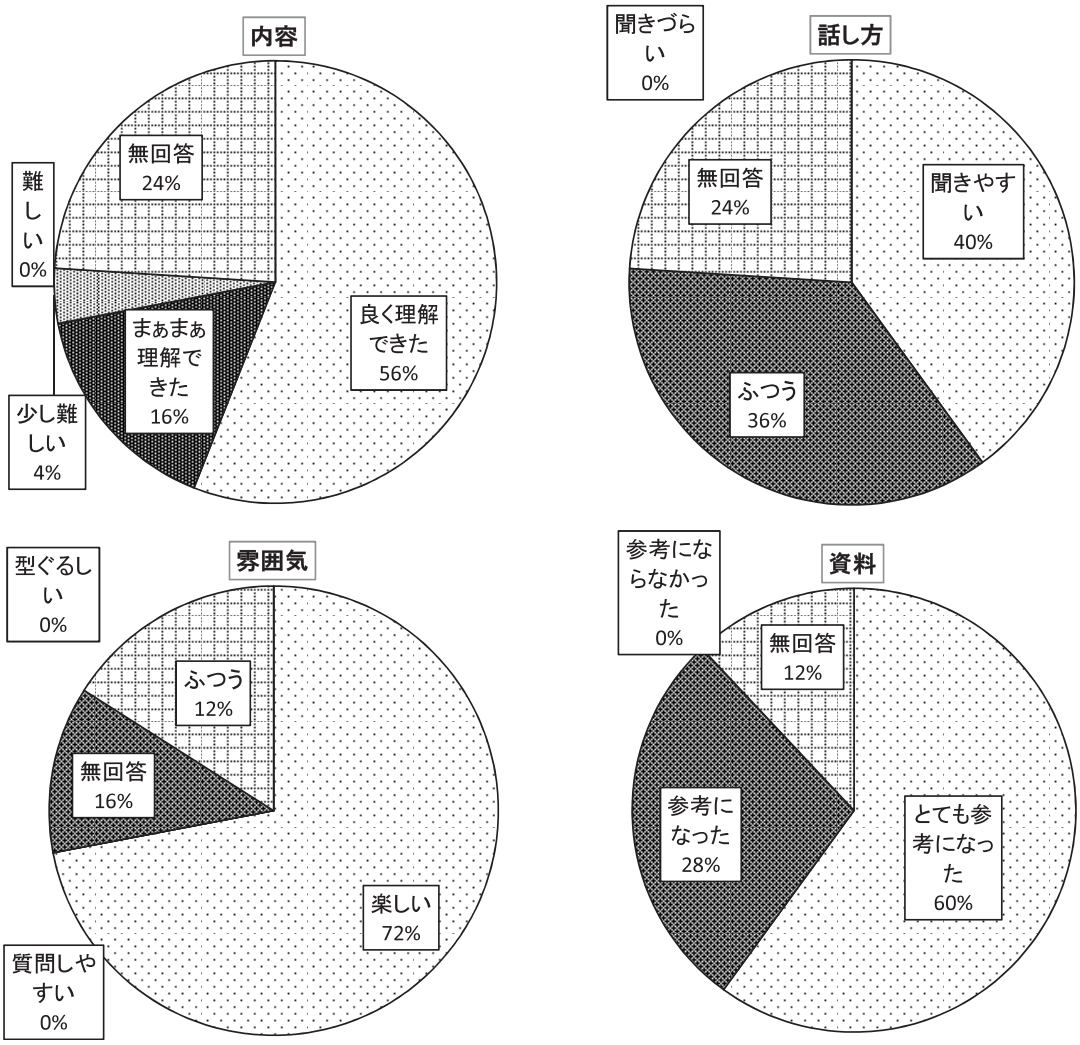
design by NAKAMURA
（弘前大学教育学部学生）

H23 総合文化祭事業
「集い、ともに歌おう！―「団塊世代」の「歌声」運動の足跡をたどる―」

（コラボ弘大4階　生涯学習教育研究センター）

平成23年10月23日
有効回答者数　25名　【男性　7名、女性　14名、無回答　4名】

今回の講座はいかがでしたか？



・久し振りに大声で歌を歌えてとても楽しい時間を過ごせて幸せでした。もし来年もありましたら是非参加したいと思いました。
・「うた」の歴史的背景をもっと知りたかった。
・「団塊世代」の「歌声」運動の足跡をたどるというテーマになっていますが、もう少し説明して頂ければうれしかった。
・歌詞が長い曲は途中をカットしてもいいのでは？
・とても楽しく歌いました。来年も是非参加しいたいと思っております。PRをもう少しして人数を多くすると楽しいかも。
・青春時代に戻ったような気がしました。何十年ぶりかで歌いました。
・「荒城の月」自分で歌いたい、と思うより、すばらしい声の方がいらっしゃるので、皆さんのを聴きたい。という想いです。
・各曲のエピソードや時代の背景など、作詞家・作曲家のこと、もう少し教えて頂けると嬉しいです。
・再度この企画をアンコール
・80’90’の歌。来年まで待てないので忘年会でも……。

平成23年度つながりあい支えあい家庭教育応援事業
「子どもと大人の関係性を考える」

対 象 者	学童期（小学1年～3年）の保護者または、一般市民	受講者数	延べ　52名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	十和田市教育委員会
会　　場	十和田市民文化センター　展覧展示ホール		

日　　時	講　師	所　　属	実施概要
2011年11月8日 火　18：30 ～ 20：30	長﨑　由紀	岩手県保健福祉部児童家庭科	「遊び」を通して信頼の絆を創る ―プレイリーダー“ゆっきい”が考える子どもと大人の関係性―
2011年11月16日 水　18：30 ～ 20：30	増田　貴人	教育学部　准教授	母子関係とは
2011年11月22日 火　18：30 ～ 20：30	深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	子どもを見守りながら、大人と子どもの関係性を考える

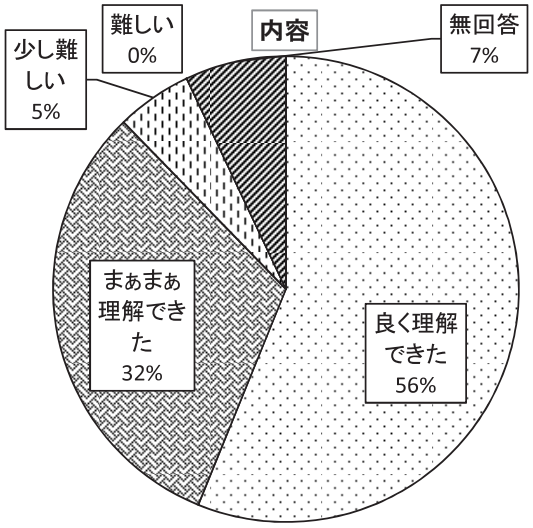
実施風景

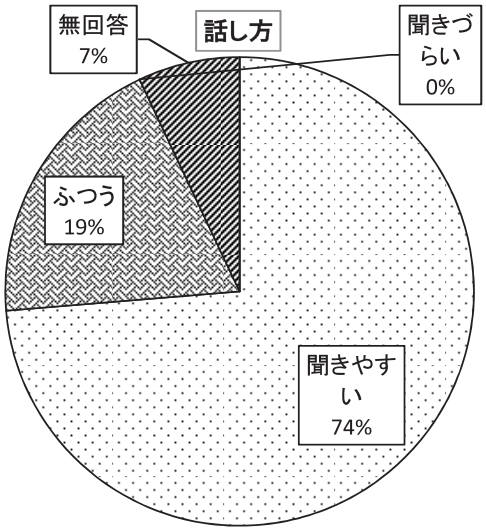
H23 平成23年度つながりあい支えあい家庭教育応援事業「子どもと大人の関係性を考える」

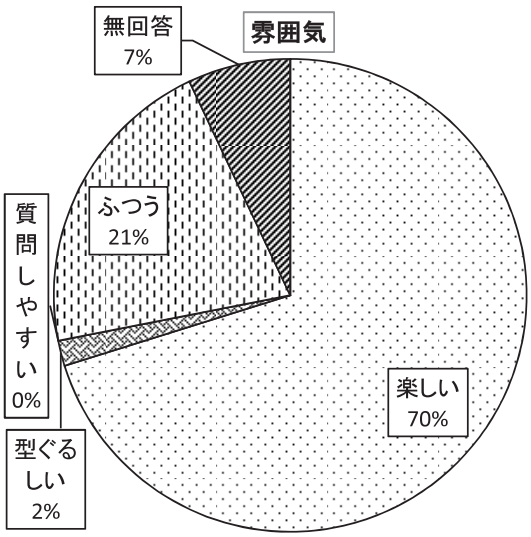
（十和田市民文化センター　展覧展示ホール）

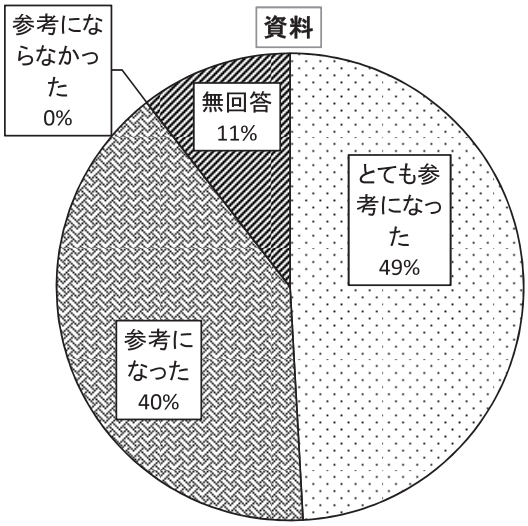
平成23年11月８日～11月22日
有効回答者数　57名　【男性　２名、女性　53名、無回答　２名】

今回の講座はいかがでしたか？







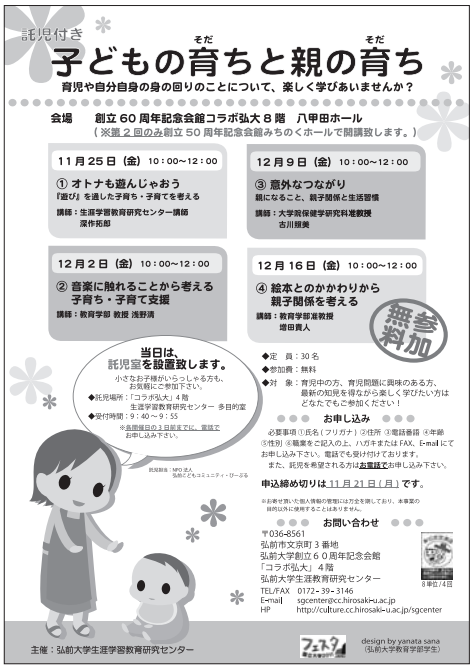


託児付の育児支援連続講座「子どもの育ちと親の育ち 」

対 象 者	未就学の子どもを育児中の方々	受講者数	延べ　64名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	創立60周年記念会館コラボ弘大8階八甲田ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年11月25日	金　10：00 ～ 12：00	深作　拓郎	生涯学習教育研究センター講師	オトナも遊んじゃおう ―「遊び」を通した子育ち・子育てを考える
2011年12月2日	金　10：00 ～ 12：00	浅野　　清	教育学部　教授	音楽に触れることから考える子育ち・子育て支援
2011年12月9日	金　10：00 ～ 12：00	古川　照美	保健学研究科 准教授	意外なつながり ―親になること、親子関係と生活習慣―
2011年12月16日	金　10：00 ～ 12：00	増田　貴人	教育学部准教授	絵本とのかかわりから親子関係を考える

実施風景

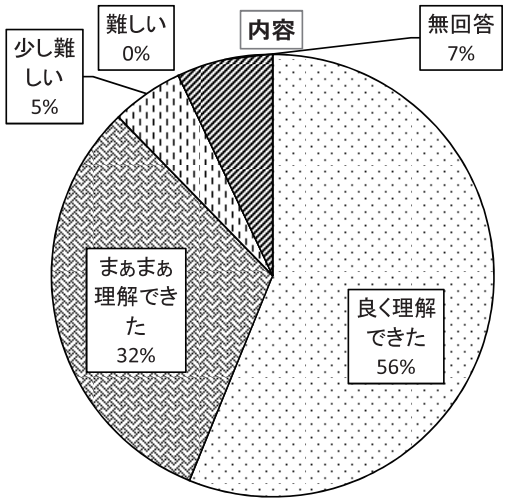


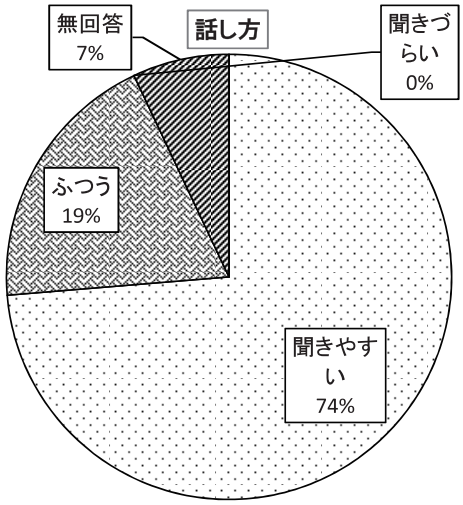
H23　託児付の育児支援連続講座「子どもの育ちと親の育ち 」

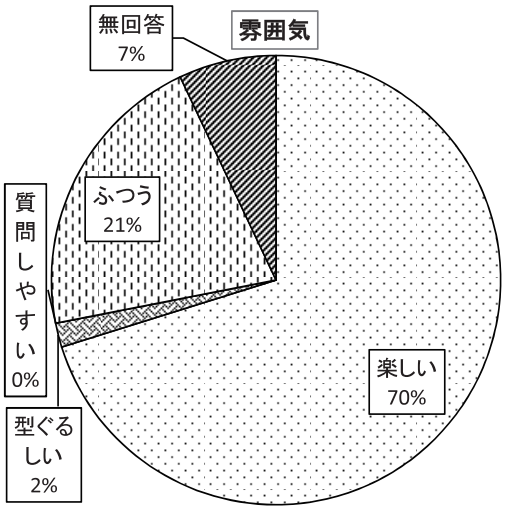
（創立60周年記念会館コラボ弘大８階八甲田ホール）

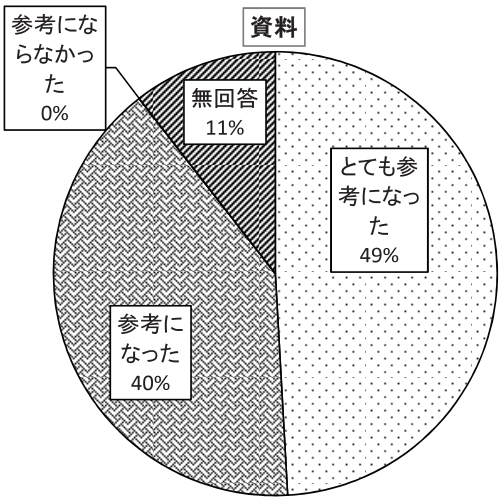
平成23年11月25日～12月16日
有効回答者数　57名　【男性　2名、女性　53名、無回答　2名】

今回の講座はいかがでしたか？









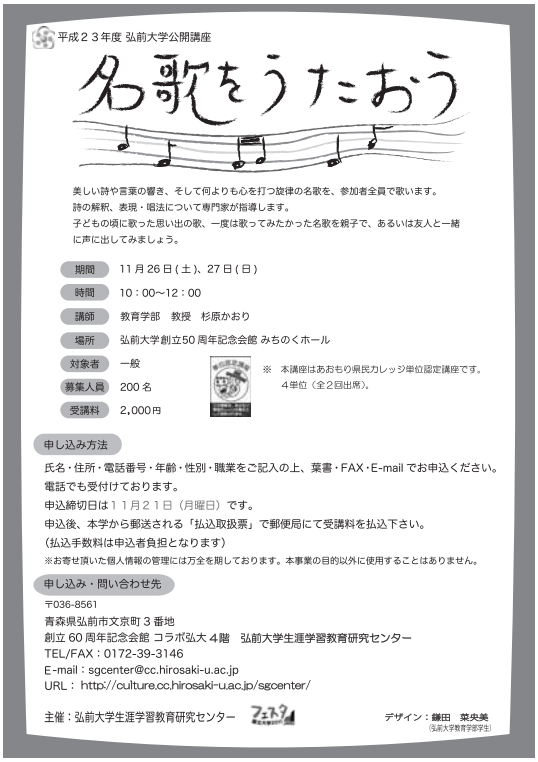
・保育サポーターをしています。つい先日、他のサポーターさんが「最近の子どもは褒められるから、（自分の能力の限界をしらない？）何でもできると思っている。一回できるともうやらない（努力しない？向上心が無い？）という話をしていた。ほめるとはどういうことなのか考えていました。
・もっともっと子どもと大人もできるゲーム等やりたかった。少ない素材でとっても盛り上がるようなあそびをしたかった。
・音楽から自由に感じてイメージすることは楽しいと思いました。日頃からそういった時間を作って音楽に親しみたいと思います。最後のピアノの演奏、とても感動しました。
・自分なりの聴き方で良いんだなぁと思いました。でも、もう少し“子育て”と音楽についてのお話を聞きたかったです。
・生活習慣が密接な関係があるのが勉強になりました。私も子供ができてから夜型から朝型に変わらなければならなかったけど、朝型にした方が体に良く、健康面でだいぶ風邪もひかず体質改善しました。今日の講座を夫に見せて夜型から朝型に直したいと思います。
・共発達という言葉を知りました!!お互いに働きかける影響しあっている子育ては実は自分育て親育て（ち）とっても素敵なお話でした。ありがとうございました。

公開講座「名歌をうたおう」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　31名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	創立50周年記念会館 みちのくホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年11月26日		杉原かおり	教育学部　教授	美しい詩や言葉の響き、そして何よりも心を打つ旋律の名歌を、参加者全員で歌います。詩の解釈、表現・唱法について専門家が指導します。子どもの頃に歌った思い出の歌、一度は歌ってみたかった名歌を親子で、あるいは友人と一緒に声に出してみましょう。
土	10：00 ～ 12：00			
2011年11月27日				
日	10：00 ～ 12：00			

実施風景



平成２３年度 弘前大学公開講座

名歌をうたおう

美しい詩や言葉の響き、そして何よりも心を打つ旋律の名歌を、参加者全員で歌います。
詩の解釈、表現・唱法について専門家が指導します。
子どもの頃に歌った思い出の歌、一度は歌ってみたかった名歌を親子で、あるいは友人と一緒に声に出してみましょう。

期間　11月26日（土）、27日（日）
時間　10：00～12：00
講師　教育学部　教授　杉原かおり
場所　弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール
対象者　一般
募集人員　200名
受講料　2,000円

※ 本講座はあおもり県民カレッジ単位認定講座です。
４単位（全２日出席）。

申し込み方法

氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入の上、葉書・FAX・E-mail でお申込ください。
電話でも受付けております。
申込締切日は１１月２１日（月曜日）です。
申込後、本学から郵送される「払込取扱票」で郵便局にて受講料を払込下さい。
（払込手数料は申込者負担となります）
※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

申し込み・問い合わせ先

〒036-8561
青森県弘前市文京町３番地
創立 60 周年記念会館 コラボ弘大４階　弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL/FAX：0172-39-3146
E-mail：sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL： http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/sgcenter/

主催：弘前大学生涯学習教育研究センター　フェスタ

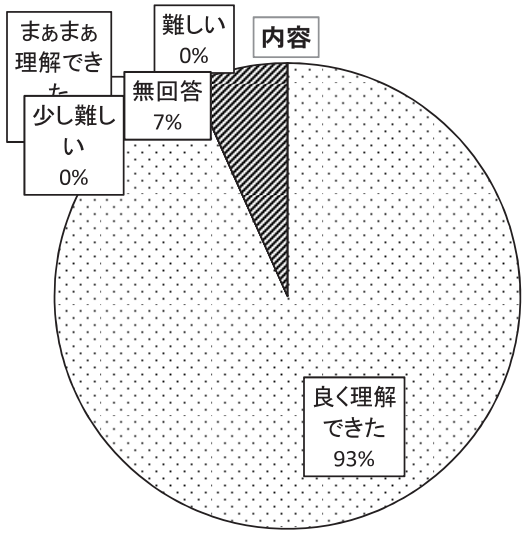
デザイン：鎌田　菜央美
（弘前大学教育学部学生）

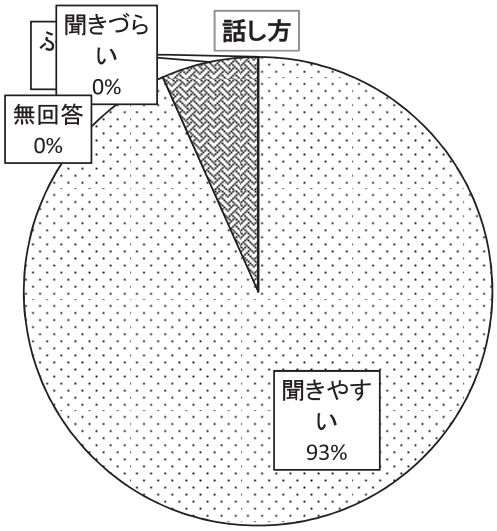
H23　公開講座「名歌をうたおう」

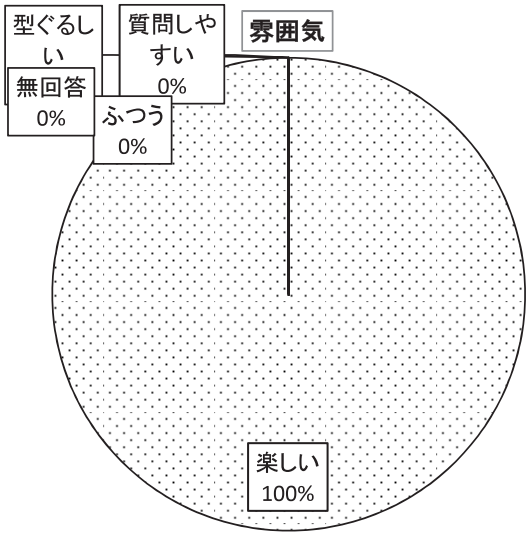
（創立50周年記念会館 みちのくホール）

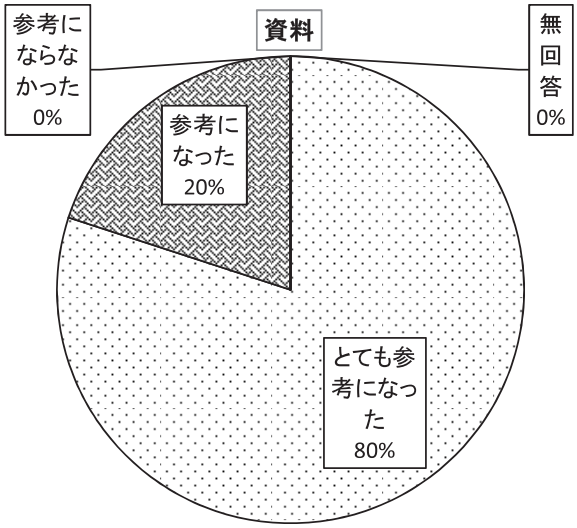
平成23年11月26日～11月27日
有効回答者数　15名　【男性　4名、女性　11名、無回答　0名】

今回の講座はいかがでしたか？









・たいへん楽しく参加させていただきました。最後のウィーンわが夢のまちでは、歌っている最中、感動して涙が出てきました。ありがとうございました。
・回数もっとあったらうれしいです。声を出したのは1年ぶりでした。来年度も楽しみにしています。（できることなら40歳ほど若くなって、杉原先生の生徒になりたいです。）友人をさそおうと思ったのですが、弘前音楽祭と日付がかちあっていて、もしかしたら他にも来れない人があったかも……。
・とても楽しく、よく勉強させて頂きました。歌についてもっと深く（テクニックを含めて）知りたくなりました。

あおもり観光人財育成講座

対 象 者	観光業・観光行政に従事している方	受講者数	延べ　149名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	青森県
会　　場	弘前市商工会議所		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年11月29日		保田　宗良 茶谷　孝治	人文学部　教授 フリー・プロデューサー （さるく博プロデューサー）	観光業の現状と東北新幹線開通後の特徴 長崎と大阪の事例から学ぶ
火	9：00　～　16：00			
2011年12月1日		藤崎　浩幸 森崎　鉄郎	農学生命科学部 准教授 ＪＲ東日本盛岡支社 営業部長	グリーンツーリズム 北東北の連携による観光振興を考える
木	9：00　～　16：00			
2011年12月6日		横石　知二 木村　　聡 大社　　充	株式会社いろどり 代表取締役 八戸せんべい汁研究所　事務局長 NPO法人グローバルキャンパス	地域の魅力の商品化を図る 全国ブランドの売り出しかた 観光は地域づくり・人づくり
火	9：00　～　16：00			
2011年12月8日		今井二三夫 西﨑　直子	観光コンベンション協会 専務理事兼事務局長 アオーネ白神十二湖	「着地型観光業」への脱皮を図る 今ホテル業に求められるもの ―アオーネ白神十二湖の実践から―
木	9：00　～　16：00			

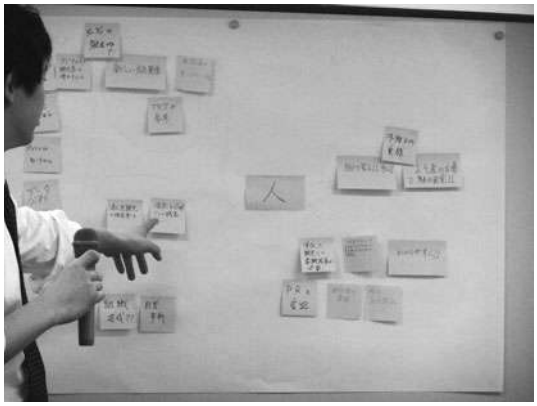
あおもり観光人財育成講座シンポジウム

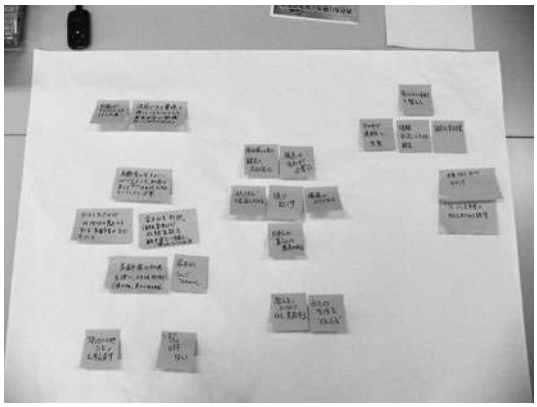
対 象 者	観光業・観光行政に従事している方	受講者数	10名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	青森県
会　　場	弘前商工会議所		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2012年2月16日		保田　宗良	人文学部教授	受講者によって形成されたワーキング・グループ（①「黒石つゆやきそば」の売り出し方について、②観光地における「二次交通」の整備の課題について、③ネットによる「弘前の魅力」の情報発信について、④観光に関連する調査・データ収集の在り方について）の、それぞれの活動の成果を発表する。
木	13：30　～　15：30			

実施風景

あおもり観光人財育成講座





あおもり観光人財育成講座研究発表会

【陸奥新報（5）】 平成24年2月17日（金）

飲食店格付け提案も

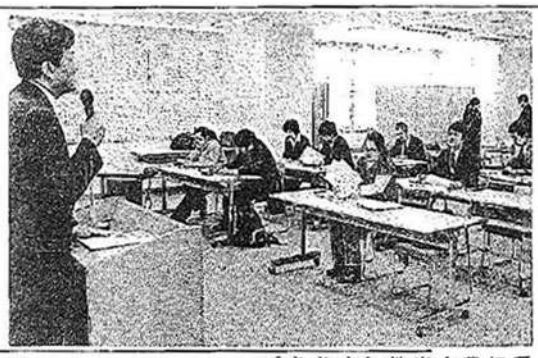
あおもり観光人財育成講座 研究成果を発表

弘前

2011年度あおもり観光人財育成事業「あおもり観光人財育成講座」の受講者による研究成果発表会が16日、弘前商工会議所会館で開かれた。同講座は魅力ある観光地域づくりのために、地域の観光資源を発掘し、地域づくりに活用するための専門的知識を持ち、具体的な事業を実践できる観光地域づくりの核となる「企画・調整者」の育成が目的で、県が弘前大学に委託して実施。観光業や観光行政などに従事する21人が受講した。

受講者は県内外のマーケティングや観光業の専門家らから昨年11、12月に計4日間の講義を受けた後、四つのワーキンググループに分かれ実習に臨んだ。

この日の発表会では、三つのグループが実習での研究成果を報告。このうち黒石市内で「黒石つゆやきそば」を提供する店舗の満足度を調査したグループはアンケートの結果を報告。店舗を格付けする「黒石やきそばミシュラン」を検討してもよいのでは」と提案し、「各店舗が競争し合い、もてなしに興味関心を持ったら一層リピーターの確保につながると感じる」とした。（齋藤一郎）



受講生がグループごとに研究成果を披露した発表会

東奥日報 2012年（平成24年）2月18日 土曜日

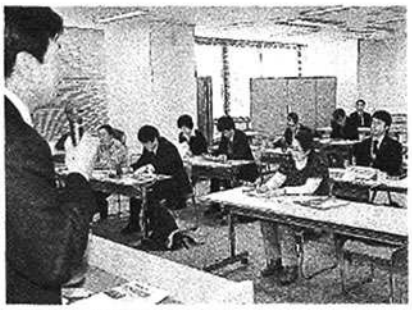
地理に不案内な観光客向け

「タクシー停留所」いかが

人財育成講座 受講生が提案

弘前

本年度の「あおもり観光人財育成講座」の受講生21人による研究成果発表会が16日、弘前市の弘前商工会議所会館で開かれた。タクシーによる新サービスの展開など、観光活性化を目指すアイデアなどについて、3グループが発表した。（岩佐谷雅之）



受講生がさまざまなアイデアを出し合った研究成果発表会

発表会には、観光業などに携わる11人の受講生が参加した。

このうち、弘前観光コンベンション協会主査の齋藤正伸さん（48）らのグループは、地理に不案内な観光客向けとして、弘前市内の各観光スポットにタクシー専用の停留所を設ける新サービス「観光お助けタクシー（仮称）」を提案した。

各停留所を通し番号で表記し、停留所にはタクシー会社の電話番号や市内をエリアごとに区分した地図とともに、エリアごとの料金（定額制）も表示する。

齋藤さんは「電話で停留所の番号を伝えるだけでタクシーが迎えに行く。定額制なので、観光客に安心して利用してもらえる」と説明した。

このほか、「黒石やきそば」提供店の接遇などの調査結果や、インターネット活用による地域の魅力発信をテーマにした発表があった。

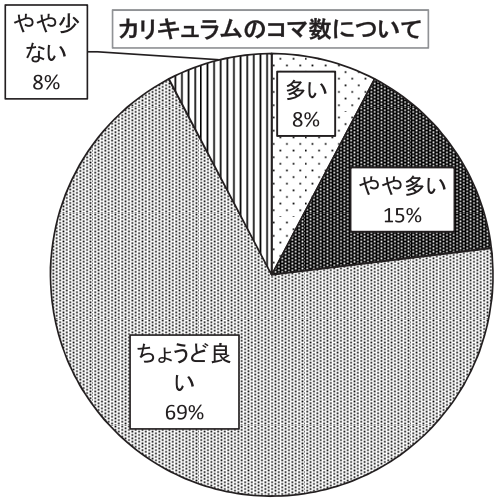
同講座は地域観光の核となる「企画・調整者」育成の一環で弘大が弘大に委託し、昨年11月から今回の発表会まで計6日間実施した。

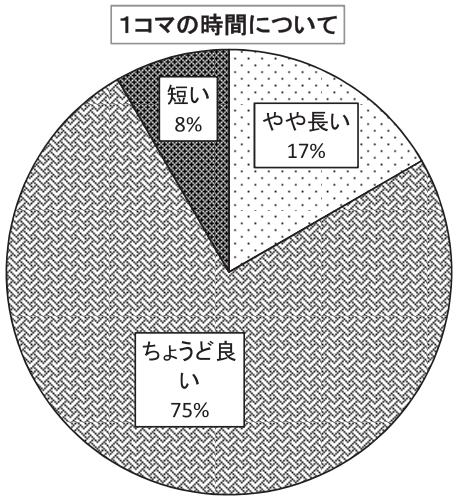
H23　あおもり観光人財育成講座

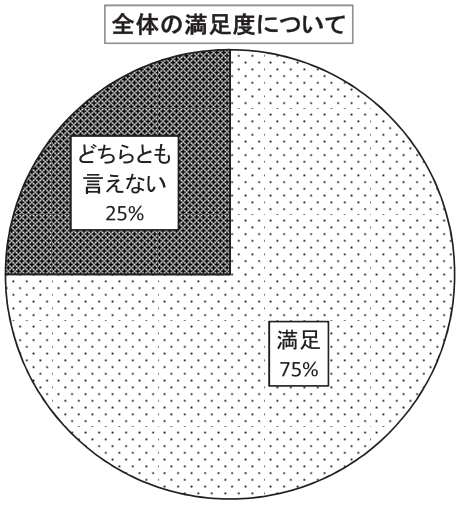
（弘前市商工会議所）

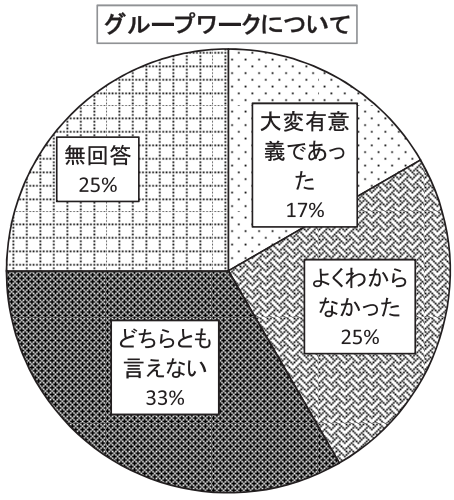
平成23年11月29日～12月８日
有効回答者数　13名

今回の講座はいかがでしたか？









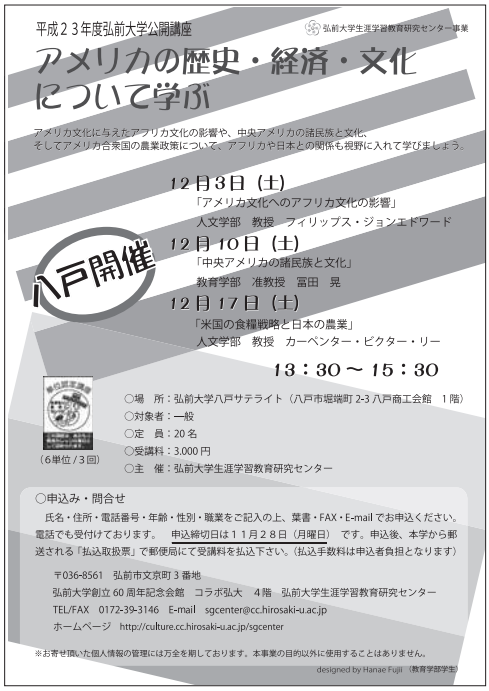
・ワークショップも必要だとは思うが、講師のお話をもう少し聴きたかった。
・講義のプログラムの順番についても一考が必要かと感じた。
・受講者は、知識レベル同等の業界の人たちを集めるべき。→話が合わない。弘前観光の事情を話しづらい。
・グループワークより講師とのディスカッション形式が良いと思う。
・少ない時間に詰め込みすぎのような気がする。
・講座の成果を出すのであれば、講座期間は、もう少しスパンで実施すべき。
・前半は、各講義ごとにグループワークをやったが、講師の話をもっと聴きたかった。
・後半は、講師主導で質疑応答形式や、講師の講義内容に沿ったグループワークであったので勉強になった。
・朝から夕方までの講義だと、仕事に支障が出るときもあるので、実施時間を考えて欲しい。
・講座を通じて知り合った人とのつながりを大切にしていきたい。

公開講座「アメリカの歴史・経済・文化について学ぶ」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　46名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	弘前大学八戸サテライト		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年12月3日	土　13：30 ～ 15：30	フィリップス・ジョンエドワード	人文学部　教授	アメリカ文化へのアフリカ文化の影響
2011年12月10日	土　13：30 ～ 15：30	冨田　　晃	教育学部　准教授	中央アメリカの諸民族と文化
2011年12月17日	土　13：30 ～ 15：30	カーペンター・ビクター・リー	人文学部　教授	米国の食糧戦略と日本の農業

実施風景


平成２３年度弘前大学公開講座

弘前大学生涯学習教育研究センター事業

アメリカの歴史・経済・文化について学ぶ

アメリカ文化に与えたアフリカ文化の影響や、中央アメリカの諸民族と文化、そしてアメリカ合衆国の農業政策について、アフリカや日本との関係も視野に入れて学びましょう。

八戸開催

12月3日（土）
「アメリカ文化へのアフリカ文化の影響」
人文学部　教授　フィリップス・ジョンエドワード

12月10日（土）
「中央アメリカの諸民族と文化」
教育学部　准教授　冨田　晃

12月17日（土）
「米国の食糧戦略と日本の農業」
人文学部　教授　カーペンター・ビクター・リー

13：30～15：30

（6単位 / 3回）

○場　所：弘前大学八戸サテライト（八戸市堀端町 2-3 八戸商工会館　1階）
○対象者：一般
○定　員：20名
○受講料：3.000円
○主　催：弘前大学生涯学習教育研究センター

○申込み・問合せ
氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入の上、葉書・FAX・E-mail でお申込ください。電話でも受付けております。　申込締切日は１１月２８日（月曜日）　です。申込後、本学から郵送される「払込取扱票」で郵便局にて受講料を払込下さい。（払込手数料は申込者負担となります）

〒036-8561　弘前市文京町３番地
弘前大学創立 60 周年記念会館　コラボ弘大　４階　弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL/FAX　0172-39-3146　E-mail　sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp
ホームページ　http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/sgcenter

※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

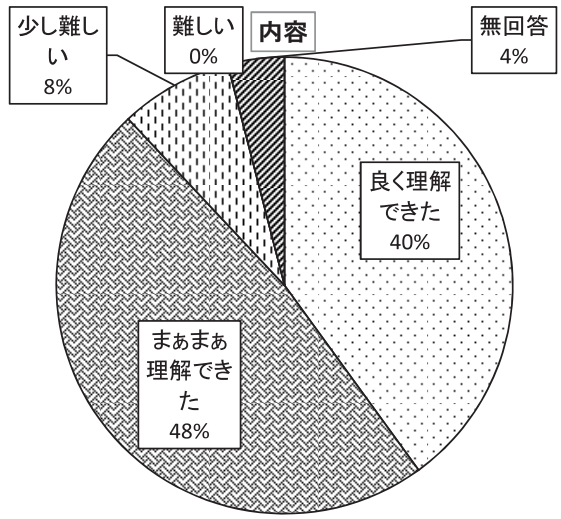
designed by Hanae Fujii（教育学部学生）

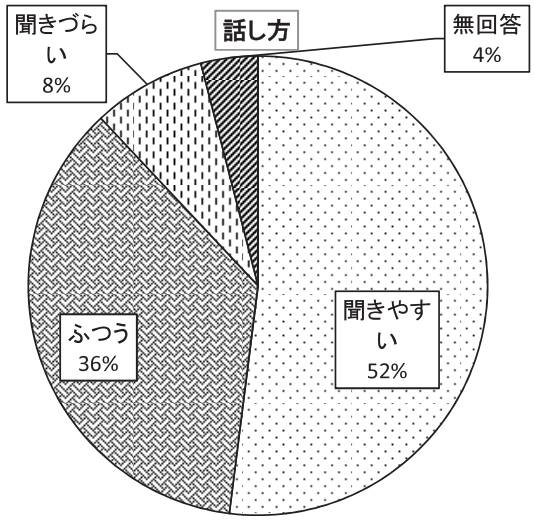
H23　公開講座「アメリカの歴史・経済・文化について学ぶ」

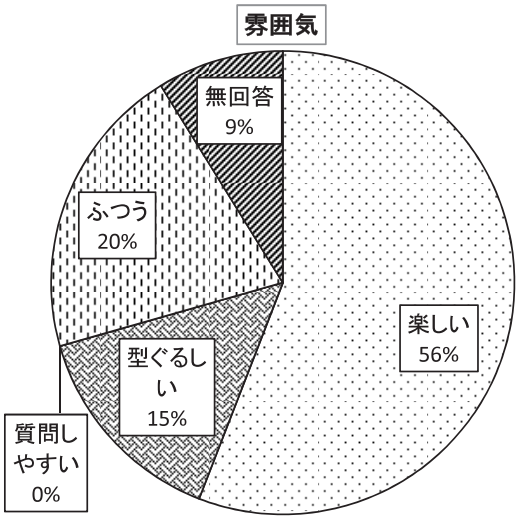
（弘前大学八戸サテライト）

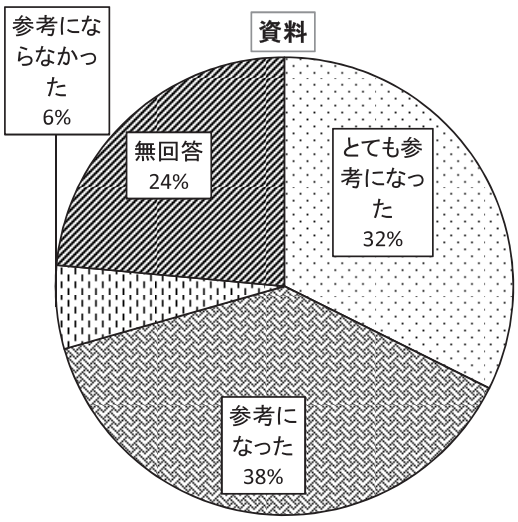
平成23年12月３日～12月17日
有効回答者数　25名　【男性　17名、女性　２名、無回答　６名】

今回の講座はいかがでしたか？









・奴隷についてからゆきさん及び、ギリシャローマ時代にも奴隷があったと講義中に発言があったが、ギリシャ、ローマ時代は敗戦国の人々が奴隷となったもので、アフリカの場合は、圧倒的な戦力をもった国々が戦わず、公然と広範囲に多人数を商品として、奴隷狩りをしたこととは、事情が異なる。なお、過酷な船上での長旅とその後の残酷な生活を強いられるアフリカの人々の身になって思い、「正義とは」を、もう一度問い質す機会を与えてくれた講座であった。
・いつも感動に接し、感謝申し上げます。ぜひ、又、このような機会を切望しております。宜しくお願い致します。ありがとうございました。
・とっても楽しかった。音楽の力は世界共通なんですね。心はひとつ。つながっているんだと再確認させていただきました。
・講師自己紹介が非常に良かったです。TPPに関係内容について時間が欲しかったです。

パパ・ママたちの井戸端会議

対 象 者	育児中のパパ・ママ	受講者数	延べ　22名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	
会　　場	生涯学習教育研究センター多目的ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年11月２日	水　10：00 ～ 12：00	深作　拓郎 小山内祥代	生涯学習教育研究センター	平日の午前中、主に０～４歳児を育児中のパパ・ママを対象としたラフな井戸端会議を開催します。託児室を設置しますので、小さなお子様がいらっしゃる方も、どうぞお気軽にご参加ください。
2011年11月９日	水　10：00 ～ 12：00	深作　拓郎 小山内祥代	コーディネーター：生涯学習教育研究センター	
2011年11月16日	水　10：00 ～ 12：00	深作　拓郎 小山内祥代	生涯学習教育研究センター	

実施風景

公開講座「健康と運動について理解を深めよう」

対 象 者	一般	受講者数	31名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	鶴田町教育委員会
会　　場	鶴田町公民館		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年12月18日		木村　博人 赤池あらた	医学研究科　教授 保健学研究科　助手	お口の健康こそ健康の柱 健やかに生活するため知っておきたいリハビリ体操
日	13：00 ～ 16：10			

実施風景

平成２３年度弘前大学公開講座

健康と運動について理解を深めよう

趣　旨　「食べる」ということは生命活動の基本であり、「お口」を健康に保つことの重要さを学びましょう。また、健康を保持するための運動の在り方について理解を深めましょう。

期　間　平成２３年１２月１８日（日）

期　間　13：00～16：10

講　師　①お口の健康こそ健康の柱
木村　博人（大学院医学研究科 教授）
②健やかに生活するため知っておきたいリハビリ体操
赤池　あらた（大学院保健学研究科 助手）

場　所　鶴田町公民館（北津軽郡鶴田町鶴田沖津 189-1）

対象者　一般　　募集人数　５０名

受講料　2,000 円　　ただし鶴田町民は 1,000 円
※　受講料は 2,000 円ですが、鶴田町民の方には受講料の一部（1,000 円）を助成いたします。鶴田町教育委員会に受講申込書がございますので、印鑑をご持参いただき、受講料 1,000 円を添えて直接窓口でお申し込み下さい。

主　催　弘前大学生涯学習教育研究センター・鶴田町教育委員会

申込み　氏名（フリガナ）・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入の上、葉書またはＦＡＸで下記までお申し込み下さい。電話でも受け付けております。
鶴田町民の方は、印鑑をご持参のうえ、直接鶴田町教育委員会までお越し下さい。
申込み締め切りは１２月１４日（水曜日）です。

（申込先）
鶴田町教育委員会　社会教育班　〒038-3503 鶴田甲瀬 200-1
TEL/FAX　0173-22-2111（内２１２）
※　お寄せいただいた個人情報の管理には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

desing by Kon Rino

五戸町医学講座「インフルエンザについて」

対 象 者	一般	受講者数	32名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	五戸町教育委員会
会　　場	五戸町立公民館		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年12月21日		高梨　信吾	保健管理センター所長	インフルエンザの原因や予防の仕方（予防接種、手洗い、うがい、等々）について学びましょう。
水	13：30 ～ 15：00			

広報チラシ

平成２３年度　第６回
五戸町民大学講座
（五戸町医学講座）

予防の秘訣、わかります。

今日からできる

今年こそ

みんなで

予防、インフルエンザ。

予防接種　手洗い　うがい

などなど・・・

日　時：**12** 月 **21** 日（水）午後 **1** 時 **30** 分～午後 **3** 時

場　所：五戸町立公民館　１階　小ホール

参加費：無　料

参加方法：事前申込は必要ありません。当日会場へお越しください。

講座内容

●講　師：高梨　信吾さん（弘前大学保健管理センター　所長）

●演　題：「インフルエンザについて」

◎送迎バスあります。裏面をご覧下さい。

問合先：五戸町教育委員会　教育課　社会教育班
電　話：**62－7965**

送迎バスご案内

上市川中央バス停　12：15 発
（川内中学校前バス停、切谷内下バス停、兎内信号経由）

志戸岸交差点　12：45 発
（豊間内コミセン経由）

浅田支所　12：55 発

倉石診療所　13：10 発
（倉石支所前バス停、小渡平公園前バス停経由）

今後の日程

１月　講演　講師　和田　素賀子 さん（元 JICA シニアボランティア）
内容　国際協力の現場から（ネパールについて）

日時：1月27日（金）全地区合同　午後1時30分～午後3時
場所：五戸町立公民館　1階　小ホール

２月　講演　講師　堀内　彩子 さん（三沢市先人記念館　学芸員）
内容　斗南藩について（part２）
○斗南藩の成立についてや、会津から青森までの苦難の歴史を分かりやすく解説します。

日時：2月15日（水）中央地区　午後1時30分～午後3時
場所：五戸町立公民館　1階　小ホール

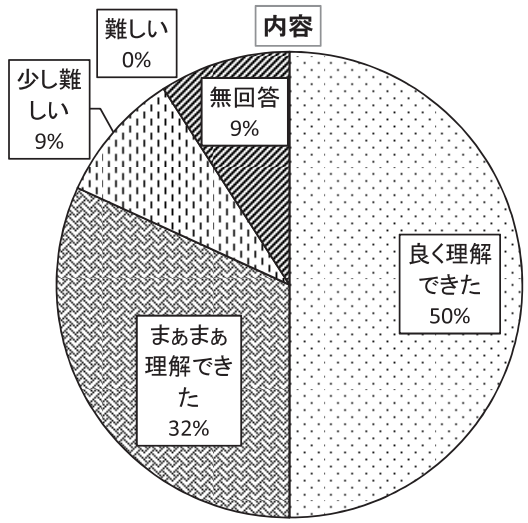
日時：2月29日（水）倉石・川内・豊間内・浅田地区　午後1時30分～午後3時
場所：倉石コミュニティセンター　1階　和室

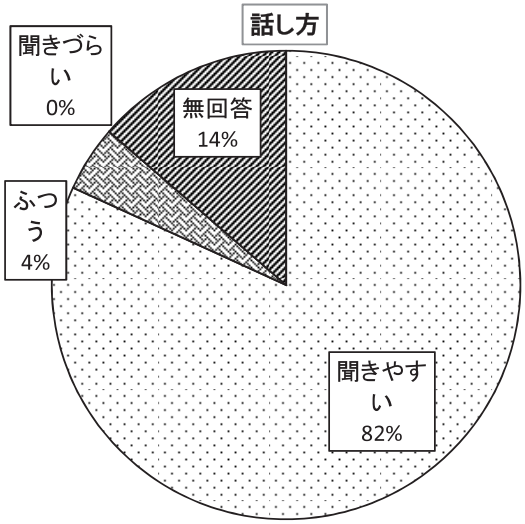
H23　五戸町医学講座「インフルエンザについて」

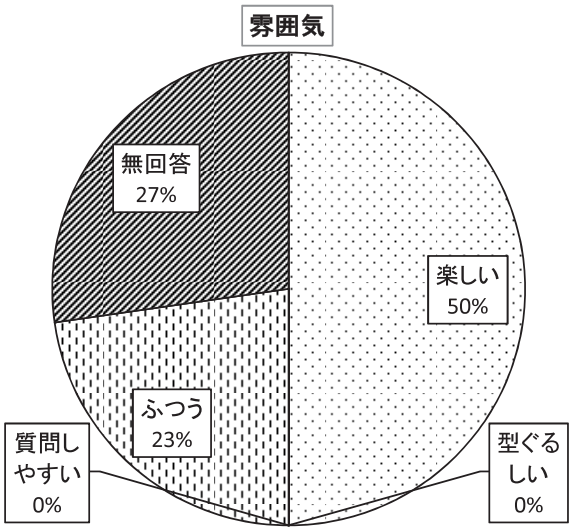
（五戸町立公民館）

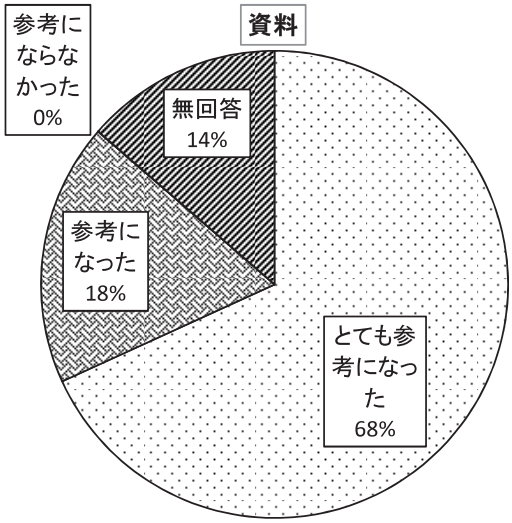
平成23年12月21日
有効回答者数　22名　【男性　2名、女性　10名、無回答　10名】

今回の講座はいかがでしたか？









・たいへんよかったです。
・貴重な講義を有難うございました。（スライド等も）

ネット講演会「宇宙の謎はここまで解明されてきた」

対象者	一般	受講者数	八戸会場28名、弘前会場8名
主　催	生涯学習教育研究センター	共　催	
会　場	弘前大学八戸サテライト／生涯学習教育研究センター多目的室		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2012年2月17日		葛西　真寿	理工学研究科　教授	「はやぶさ」の活躍などで宇宙への関心が高まっています。宇宙の謎がどこまで解明されてきたか学びます。 弘前会場では、インターネットを介して、八戸での講演をリアルタイムで受信します。
金	18：30 ～ 20：00			

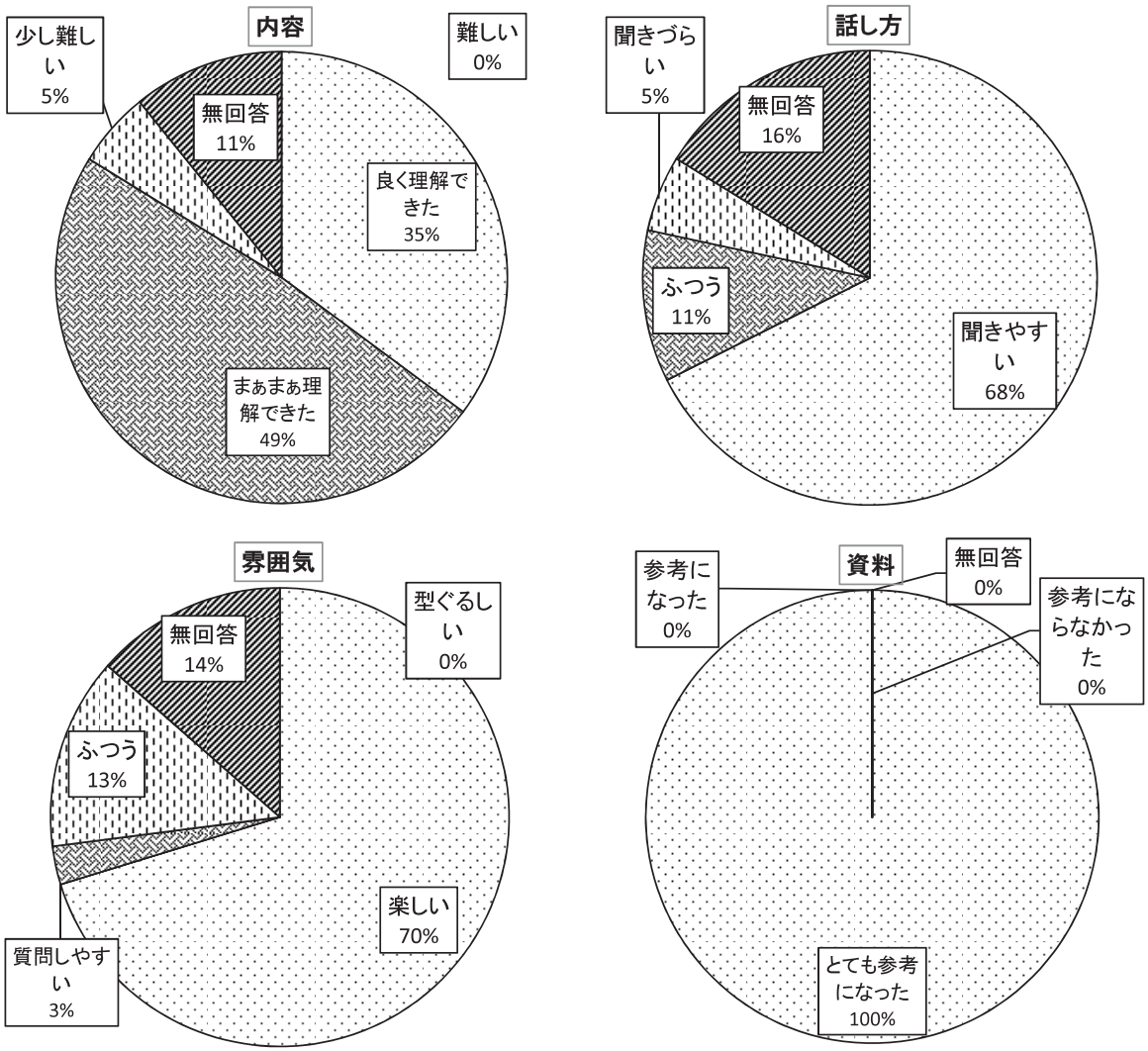
実施風景

H23　ネット講演会「宇宙の謎はここまで解明されてきた」

（弘前大学八戸サテライト／生涯学習教育研究センター多目的室）

平成24年２月17日
有効回答者数　37名　【男性　19名、女性　14名、無回答　4名】

今回の講座はいかがでしたか？



・勉強になりました。これからまだまだ解明されるべきものがたくさんあるんだなと思いさらに宇宙に関する興味がわきました。本当にありがとうございました。
・ハッブルの法則のたとえ話が分かりやすくて良かったです。資料がわかりやすいので助かりました！
・“活き”のいい先生でとても楽しく学べました。ありがとうございました。
・視覚的でとてもわかりやすい講義でした。エキサイティング!!このような講義を受けられる学生さんがうらやましい!!
・こんなにも楽しい天文学があったことに驚き!!　もう一度大学に入りたい気分に。
・宇宙の謎について今後もお願いします。ブラックホールとか暗黒物質とか、科学のロマンとかは楽しいですから。
・参加者が30人前後であれば、講演の前に質問用紙をくばりその中で講師がおもしろいと思った質問を何問か選んで答えたらおもしろいと思う。
・～知るを楽しむ～　なぜ？どうして？と気づかずにいた。この頃ですが、新しいことをきかせて頂きました。ありがとうございます。

託児付き「子育ち・子育て井戸端会議」

対 象 者	一般	受講者数	延べ　22名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	中泊町教育委員会
会　　場	中里地域子育て支援センター　　小泊地域子育て支援センター		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年10月5日		深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	地域住民が一堂に会し、子どもの育ちや家庭教育に関する学習を深めることで、地域の子育ち・子育て環境をより充実させていくことを目指します。開場に託児室を設置します。
水	10：00 ～ 12：00			
2011年10月26日		深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	
水	10：00 ～ 12：00			

実施風景

弘前市公民館職員等研修会

対 象 者	公民館等社会教育関係職員	受講者数	30名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	弘前市教育委員会
会　　場	弘前市総合学習センター		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年6月17日		藤田　昇治 藤田公仁子	生涯学習教育研究センター　講師 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門	世代間交流で地域もいきいき
金	13：30 ～ 16：30			

講演会「保育現場における子どもや保護者との関わり方について考える」

対 象 者	市内保育園の保育者・一般	受講者数	87名
主　　催	生涯学習教育研究センター・青森市子どもしあわせ課	共　　催	青森市子どもしあわせ課
会　　場	青森市福祉増進センター　大会議室		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年7月22日 8月25日、10月17日		増田　貴人 北宮　千秋 安藤　房治	教育学部　准教授 保健学研究科　講師 教育学部　教授	保育現場における子どもや保護者との関わり方について考える
金	13：30 ～ 16：30			

大学ー地域連携セミナー

対 象 者	青森県立田子高等学校　受講希望生徒	受講者数	37名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	あおもり県民カレッジ
会　　場	田子高等学校（三戸郡田子町）		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年9月5日		小磯　重隆	学生就職支援センター　准教授	大学進学の意義
月	15：00 ～ 16：30			

家庭教育支援講座「子どもの育ちと親の育ち 」

対 象 者	一般	受講者数	60名
主　　催	生涯学習教育研究センター	共　　催	つがる市教育委員会
会　　場	稲垣西小学校		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年12月2日		深作　拓郎	生涯学習教育研究センター　講師	子どもの育ちと親の育ち
金	14：20 ～ 15：20			

その他の活動

・2011年10月22日・23日　全国国立大学生涯学習系センター研究協議会
・2012年3月2日　東北地区大学開放・生涯学習教育研究協議会

2．学部・大学院の主催事業など

（1）人文学部

公開勉強会「小学校学習指導要領・外国語活動編を学ぼう！」					
対象者	小学校教員、学生、一般			受講者数	延べ　15名
主　催	青森グローバル教育研究会（代表：奥野浩子）			共　催	弘前大学人文学部
会　場	弘前大学人文学部4階多目的ホール				
日　時		講　師	所　属	実施概要	
2011年5月22日		佐藤　明彦	前青森県教育庁学校教育課指導主事 現今別中学校教頭	平成23年4月から全面実施される「新学習指導要領」のポイントと外国語活動のあり方を学ぶ。	
日	13：30 ～ 16：30				

第1回　野田村復興支援交流活動活動報告会					
対象者	一般市民、学生			受講者数	延べ　100名
主　催	弘前大学人文学部ボランティアセンター			共　催	
会　場	コラボ弘大8階　八甲田ホール				
日　時		講　師	所　属	実施概要	
2011年6月10日		山下　祐介	首都大学東京 准教授	東日本大震災の発生をうけて設立された弘前大学人文学部ボランティアセンターは、弘前市やNPO団体などと連携して、4月から岩手県野田村の復興支援・交流活動を行ってきた。今回の報告会は、これまでの活動を振り返るとともに、今後の活動をいっそう力強いものにすべく、行われるものである。	
金	17：00 ～ 20：00				

公開講演会 「小学校で二つの外国語を教えること～東京韓国学校初等部の実践～」					
対象者	学生、小学校教員、一般			受講者数	延べ　20名
主　催	青森グローバル教育研究会（代表：奥野浩子）			共　催	弘前大学人文学部
会　場	弘前大学人文学部4階多目的ホール				
日　時		講　師	所　属	実施概要	
2011年8月6日		李　和枝	前東京韓国学校初等部　教頭 現同校教諭	小学校レベルで外国語を二つ教えて、イマージョンも取り入れている東京韓国学校の実情や問題点を知ること。	
土	10：00 ～ 12：00				

第11回ビジネス講座「新時代の地域雇用政策」

対象者	一般市民、学生	受講者数	延べ　50名
主　催	弘前大学人文学部雇用政策研究センター	共　催	
会　場	弘前大学創立50周年記念会館岩木ホール		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2011年10月5日		鹿内　葵	NPO法人スポネット弘前　理事	当センターは、諸分野の専門家などを招き、ビジネス講座を開催いたします。今年度は介護や福祉、社会教育、まちづくりといった地域社会に貢献する分野で活動しているNPOなどの社会的企業に携わっておられる方々を中心にお招きし、新たな地域雇用創出の可能性を模索したいと考えて開催する。
水	18：00 ～ 20：00			

第10回EPRCフォーラム　日本と韓国の地域間労働移動

対象者	一般市民	受講者数	延べ　80名
主　催	弘前大学人文学部雇用政策研究センター	共　催	弘前大学人文学部同窓会 弘前大学経済学会
会　場	弘前大学人文学部4階多目的ホール		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2011年10月21日		金　榮鐵	啓明大学校経済金融学科　教授	当センターはこれまで、地域経済活性化と雇用政策に関して研究をより多角的に行うために、スウェーデンやフィンランド、韓国の研究者と研究交流を進めてきた。当フォーラムは、地域経済にとって大きな課題となっている地方から都市部への人口流出について多角的な検討を行うために、韓国の人口流出の実態とその対応策に関する取り組みを理解するとともに、韓国と日本においてより有効な政策を模索すべく、「日本と韓国の地域間労働移動」と題して、第10回「雇用政策研究センターフォーラム」を開催した。
金	18：00 ～ 20：00	嚴　昌玉	慶北大学校ビジネス経済学科　教授	
		朴　佑植	慶北大学校ビジネス経済学科　教授	
		魯　洸旭	嶺南大学校地域革新研究所　研究教授	
		朴　相雨	慶北大学校ビジネス経済学科　教授	
		宋　鐘昊	慶北大学校ビジネス経済学科　教授	

シンポジウム「市民・裁判員の視点から見た裁判員裁判」

対象者	市民一般	受講者数	延べ　70名
主　催	弘前大学人文学部	共　催	弘前大学教育学部
会　場	弘前大学人文学部校舎4階多目的ホール		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2011年10月23日		守屋　克彦	弁護士　元裁判官	施行から3年目を迎えた裁判員制度を、講演、青森県の裁判員裁判に関する現状報告、裁判員経験者の講話や座談会を通じて、市民・裁判員の視点から検証します。
日	13：00 ～ 17：00	小泉　敏彦	青森地方検察庁　弘前支部長	
		猪原　健	弁護士	
		大沢　幸治	東奥日報社　記者	
		田口　真義	裁判員経験者	
		山本　一恵	裁判員経験者	
		宮崎　秀一	弘前大学教育学部　教授	
		平野　潔	弘前大学人文学部　准教授	
		飯　考行	弘前大学人文学部　准教授	

シンポジウム「東日本大震災後の青森県、岩手県の雇用、労働法政策」

対象者	市民一般	受講者数	延べ　40名
主　　催	弘前大学人文学部	共　　催	INS雇用研究会
会　　場	弘前大学人文学部校舎4階多目的ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年11月5日		紺屋　博昭	鹿児島大学法科大学院　准教授	東日本大震災後の青森県、岩手県の雇用、労働法政策をテーマに、今後の地域での非正規雇用から正規雇用への移行を含む働き方とその規律のあり方を検討します。
土	15：00 ～ 18：00	金戸　伸幸	岩手県商工労働観光部雇用対策　労働室	
		村井　　淳	盛岡市商工観光部参事兼　企業立地雇用課	
		及川　　隆	盛岡市商工観光部企業立地雇用課	
		君　　一哉	江別市経済部商工労働課	
		石橋はるか	陸奥新報社　記者	
		油川　安孝	社会保険労務士	
		佐藤　　俊	青森県商工労政部労政・能力開発課	
		秋元　　哲	弘前市商工観光部商工労政課　仕事おこし雇用支援室	
		飯　　考行	弘前大学人文学部　准教授	

津軽学「震災と生きる　津軽と災害」

対象者	本学学生、市民一般	受講者数	延べ　一名
主　　催	弘前大学人文学部	共　　催	津軽に学ぶ会
会　　場	弘前大学人文学部校舎4階多目的ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年11月7日		辻　誠一郎	東京大学　教授	公開講座・津軽学「津軽と災害」を開催します。この講座は、人文学部と津軽に学ぶ会の共催です。平成23年度は震災をテーマにした公開講座です。
月	14：00 ～ 17：00	赤坂　憲雄	学習院大学　教授	
		李　　永俊	弘前大学人文学部　教授	
		土岐　　司	㈲エコ・遊　代表取締役	
		白石　睦弥	弘前大学特別研究員	
		作道　信介	弘前大学人文学部　教授	
		山下　祐介	首都大学東京　准教授	

国際講演会「フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の地中海」

対象者	一般市民及び学生	受講者数	延べ　100名
主　催	文化財論講座及び人文学部	共　催	
会　場	弘前大学コラボ弘大八甲田ホール（15日）　弘前大学総合教育棟301（16日）		

日時		講師	所属	実施概要
2011年11月15日		ジョアキーノ・ファルソーネ	イタリア　パレルモ大学文学部　教授	一般市民及び学生への啓蒙的な目的及び内外の研究者の研究上の交流のために、一般にはなじみのない内容である「ローマ時代のフェニキアとカルタゴ」をテーマに、イタリア、チュニジア、レバノン及び国内から研究者を招き考古学に関する国際講演会を弘前大学で開催した。新発見のレバノン、世界遺産ティールの城壁や、地下墓壁画、ギリシア語の「呪いの鉛板」解読についての発表などを行った。
火	10：00 ～ 17：00	パオラ・スコンツォ	ドイツ　エベルハルド・カールズ大学IANES・PD　特別研究員	
2011年11月16日				
水	10：00 ～ 17：00	ハッサン・バダウィ	レバノン大学助教授	
		ナーデル・シクラウィ	レバノン古物総局調査官	
		泉　拓良	京都大学大学院　教授	
		西山　要一	奈良大学　教授	
		宮坂　朋	弘前大学　教授	
		辻村　純代	国士舘大学　共同研究員	
		前野　弘志	広島大学　准教授	

中国思想文化特別講座

対象者	学生・教職員・一般市民	受講者数	延べ　60名
主　催	弘前大学人文学部中国思想研究室	共　催	
会　場	弘前大学総合教育棟101		

日時		講師	所属	実施概要
2011年12月8日		王　中江	北京大学哲学系　教授	海外（中国大陸、台湾）の中国思想史研究の第一線で活躍する王中江教授、黄克武教授を招いて、それぞれ「出土簡帛と古代中国文明」、「厳復の翻訳と近代中国」と題する公開講演を行った。
木	16：00 ～ 19：00	黄　克武	台湾中央研究院近代史所研究員　所長	

学生発未来への挑戦フォーラム

対象者	一般市民、学生	受講者数	延べ　100名
主　催	青森県・弘前大学人文学部雇用政策研究センター	共　催	八戸大学
会　場	青森市文化観光交流施設　ねぶたの家　ワ・ラッセ		

日時		講師	所属	実施概要
2011年12月22日		木村　農也	㈲白神アグリサービス　代表取締役	「青森県基本計画未来への挑戦」に掲げる、青森県のめざす姿を実現するために何をすべきかを大学生の視点で考え、政策提言を行うことを目的に行われた。
木	15：00 ～ 17：15	藤代　典子	㈱ノースビレッジウエルネス　代表取締役	

公開講演会　「どうなった？どうなっていく？小学校英語」

対 象 者	小学校教員、学生、一般	受講者数	延べ　30名
主　　催	青森グローバル教育研究会（代表：奥野浩子）	共　　催	弘前大学人文学部
会　　場	弘前大学創立50周年記念会館　岩木ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2012年3月4日		小川　隆夫	聖学院大学講師 元埼玉県公立小学校教諭	小学校で外国語活動が必修化されてほぼ一年の時期に、「コミュニケーション能力」と「小学校英語の今後」について考える。
日	10：00 ～ 12：00			

第２回　野田村復興支援交流活動活動報告会「チーム・オール弘前の１年間とこれから」

対 象 者	一般市民、学生	受講者数	延べ　100名
主　　催	弘前大学人文学部ボランティアセンター	共　　催	
会　　場	コラボ弘大8階　八甲田ホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2012年3月9日		室崎　益輝	関西学院大学　教授	東日本大震災の発生をうけて設立された弘前大学人文学部ボランティアセンターは、弘前市やNPO団体などと連携して、4月から岩手県野田村の復興支援・交流活動を行ってきた。今回の報告会は、これまでの活動を振り返るとともに、今後の継続的な活動をどのような進めるべきかを検討することを目的に行われたものである。
金	17：30 ～ 20：30			

裁判員の経験に触れる　裁判員経験者座談会

対 象 者	市民一般	受講者数	延べ　30名
主　　催	澁谷友光、田口真義	共　　催	弘前大学人文学部
会　　場	ねぶたの家　ワ・ラッセ2階イベントホール		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2012年3月24日		澁谷　友光	裁判員経験者	裁判員制度の実施から3年を迎えるにあたり、模擬裁判員裁判で裁判員を疑似体験し、裁判員経験者座談会でその声に触れ、経験者同士の交流をはかることで、青森県内で、裁判員の経験を広く伝え、分かちあうことを目的としています。
土	13：30 ～ 17：00	田口　真義	裁判員経験者	
		児島　　薫	裁判員経験者	
		飯　　考行	弘前大学人文学部准教授	

（2）教育学部

現職教員のための指導力向上講座『デスモスチルスを探そう』					
対 象 者	現職教員および教育関係者			受講者数	延べ　1名
主　　催	弘前大学大学院教育学研究科			共　　催	
会　　場	弘前大学八戸サテライト				
日　　時		講　師	所　　属	実施概要	
2011年7月29日 金　13：00 ～ 15：00		鎌田耕太郎	教育学部理科教育講座　教授	デスモスチルス類は1500万年ほど前の日本や樺太、北米西岸にのみ生息していた束柱目に分類される動物です。県内では最近その仲間のパレオパラドキシアの寛骨と胸椎の化石が見つかりました。講座ではその奇妙な姿形と謎の多い復元姿勢や骨格の特徴を紹介し、発見された地層の情報を整理することで次の産出地を推理し、候補地を探ります。また博物館で展示される恐竜や大型哺乳類の骨化石の見方のコツも教示します。	

現職教員のための指導力向上講座『ニセ科学を見抜くために』					
対 象 者	現職教員および教育関係者			受講者数	延べ　6名
主　　催	弘前大学大学院教育学研究科			共　　催	
会　　場	弘前大学教育学部				
日　　時		講　師	所　　属	実施概要	
2011年8月2日 火　13：00 ～ 16：00		長南　幸安	教育学部理科教育講座　教授	世の中にはいろいろな情報が飛びかっています。その中には、科学的にもっともらしいことを示して、効果があるといわれていたり、信じられていたりすることが多数あります。「科学的」といわれると、正しいことのように思ってしまいます。今回は、このような現象を取り上げて、科学的に本当に根拠のあることなのかを検証します。また間違った情報にだまされないためには、どのような考え方が必要なのかについても考えます。	

現職教員のための指導力向上講座『小学英語：Basics and New Ideas』					
対 象 者	現職教員および教育関係者			受講者数	延べ　10名
主　　催	弘前大学大学院教育学研究科			共　　催	
会　　場	弘前大学教育学部				
日　　時		講　師	所　　属	実施概要	
2011年8月1日		A.S.Rausch	教育学部英語教育講座 准教授	小学校での英語カリキュラムにおける英語の物語をテーマとするものです。小学校英語教育のニーズと実際の状況の上で物語の利用方法を紹介します。内容は、（1）カリキュラム全体を物語で構成する方法；（2）英語のインプットを増やすための物語の利用；（3）物語を基本にした個別のアクティベティの活用。受講者は英語の技能は必要ありません。実際、物語の利用は英語に自信がない方が英語クラスを始めるための一つの方法です。	
月	13：00 ～ 16：00				

（3）大学院医学研究科

公開講座「腎疾患と腎移植」					
対 象 者	一般			受講者数	延べ　150名
主　　催	弘前大学大学院医学研究科			共　　催	
会　　場	医学部コミュニケーションセンター				
日　　時		講　師	所　　属	実施概要	
2011年9月2日		米山　高弘	泌尿器科講師	日本人の成人約8人に1人が慢性の腎臓病を患っているとされ、新たな国民病と言われています。腎臓の働きが弱まると心臓や血管にも負担がかかり、いろいろな病気のもとになります。腎臓病がさらに悪化すると慢性腎不全という状態になり、血液透析や腎移植などの治療が必要となります。現在、血液透析を受けている患者さんは国内で約30万人、青森県内で約3000人いらっしゃいます。慢性腎不全とその治療法に関して皆様の理解を深めて頂くことを目的として、一般向けの公開講座を企画致しました。	
金	18：00 ～ 20：00	鳴海　俊治	先進移植再生医学講座　准教授		
		藤田　　雄	キャリアパス支援センター　助教		

「健康・医療講演会」～高齢化社会を迎えて～					
対象者	一般			受講者数	延べ　195名
主　催	弘前大学大学院医学研究科			共　催	大館市立総合病院
会　場	ホテルクラウンパレス秋北（秋田県大館市）				
日　時		講　師	所　属	実施概要	
2011年10月29日		水沼　英樹	産科婦人科学講座 教授	弘前大学大学院医学研究科では、毎年県内の医療機関等と協力し、地域の皆様の健康増進に役立てていただくために、学外公開講座「健康・医療講演会」開催しております。今年度は、大館市（共催：大館市立総合病院）において開催しました。	
土	14：00 ～ 16：00	横山　　徹	大館市立総合病院 整形外科部長		

（4）被ばく医療総合研究所

市民公開講座「放射線を考える」					
対象者	市民			受講者数	延べ　157名
主　催	弘前大学放射線安全機構			共　催	被ばく医療総合研究所 医学部附属病院高度救命救急センター
会　場	弘前大学医学部コニュニケーションセンター				
日　時		講　師	所　属	実施概要	
2011年4月1日		床次　眞司	被ばく医療総合研究所 放射線物理学部門　教授	市民に、放射線に対する正しい知識と対処法を知ってもらうことを目的とする。	
金	18：00 ～ 19：30	吉田　光明	被ばく医療総合研究所 放射線生物学部門　教授		
		浅利　　靖	医学部附属病院　高度救命救急センター長		

（5）農学生命科学部

「農業廃棄物から宝物を探す」					
対象者	一般市民			受講者数	延べ　36名
主　催	弘前大学農学生命科学部地域連携推進室			共　催	
会　場	農学生命科学部　302講義室				
日　時		講　師	所　属	実施概要	
2011年10月23日		片方陽太郎	農学生命科学部 教授	「捨てるリンゴ種子に何がある？“宝探しの実験から”」 廃棄するしかないリンゴ種子に何があるのか？まさに宝物を探すことを、実験データをまじえて紹介します。ドキドキ、ワクワクした小さな研究から遭遇した体験談です。 「農業残渣の古くて新しい活用：Biochar（炭）の可能性」 農業残渣の古くて新しい活用法。地球温暖化・エネルギー問題対策として、青森県で発生する農業残渣から作った炭の持つ可能性を紹介します。	
日	13：30 ～ 15：30	園木　和典	農学生命科学部 准教授		

「リンゴを科学する」

対象者	一般市民	受講者数	延べ　124名
主　　催	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター	共　　催	弘前市
会　　場	弘前中央公民館岩木館大ホール		
	リンゴの栽培方法、樹・果実の生理、病害虫防除、土壌肥料、品種、流通、海外事情等で、リンゴ農家に直接あるいは間接に役立つ話をする。2日間で6回講座を開く。		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年12月5日		福田　博之	元　農学生命科学部 教授	「リンゴわい化栽培のあれこれ」
月	10：00 ～ 16：10	荒川　　修	農学生命科学部　教授	「リンゴ果実の着色生理～リンゴ果実の着色と異常気象～」
		藤田　　隆	農学生命科学部　助教	「リンゴ主要病害 －星影のもたらした悪二つ、黒星病と赤星病－」
2011年12月6日		張　　樹槐	農学生命科学部　教授	「リンゴ果実の機械選果や果実品質の非破壊測定について」
火	10：00 ～ 16：10	伊藤　大雄	農学生命科学部附属生物共生教育研究センター　准教授	「リンゴの減農薬栽培と農薬ドリフトの低減」
		成田　拓未	農学生命科学部特別研究員	「中国における日本産りんごの消費動向」

「親子体験学習」～触れ合おう、人と自然と農業に～

対象者	一般市民	受講者数	延べ　47名
主　　催	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター	共　　催	
会　　場	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場・藤崎農場		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年5月21日		弘前大学農学生命科学部教員　他		金木農場では、親子が一緒になって田植え・稲刈り・精米し白米にするまでのコメ作りの一連作業を学び、また、稲ワラを利用したワラぞうり作りを学ぶ。この他に、農場で飼育している羊を使って、羊の毛刈り体験も行う。 藤崎農場では、地域の特産であるリンゴについて学び、リンゴの摘果、リンゴの収穫体験を行う。また、藍染め体験も行っており、県下から広く参加者を募って、学区及び学年間の交流を深めるのも目的である。
土	9：30 ～ 15：30			
2011年6月18日				
土	9：30 ～ 15：30			
2011年10月1日				
土	9：30 ～ 15：30			
2011年10月15日				
土	9：30 ～ 15：30			

（6）白神自然環境研究所

セミナー①「自然史研究にとっての標本資料の大切さ」				
対象者	どなたでも		受講者数	延べ　18名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所		共　　催	
会　　場	「コラボ弘大」8階　八甲田ホール			
日　　時	講　師	所　　属	実施概要	
2011年4月26日 火　13：00 ～ 16：00	中村　剛之	白神自然環境研究所 准教授	標本資料および収集の意義についてお話しします。	

観察会「春の草花と芽吹きの観察会」				
対象者	どなたでも		受講者数	延べ　15名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所		共　　催	
会　　場	西目屋村川原平　白神自然観察園			
日　　時	講　師	所　　属	実施概要	
2011年5月10日 火　13：00 ～ 15：00	山岸　洋貴	白神自然環境研究所 助教	観察園を散策し、カタクリ等春の植物を観察します。	

セミナー②「世界遺産　知床の自然」				
対象者	どなたでも		受講者数	延べ　24名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所		共　　催	
会　　場	「コラボ弘大」8階　八甲田ホール			
日　　時	講　師	所　　属	実施概要	
2011年5月24日 火　18：00 ～ 20：00	石川　幸男	白神自然環境研究所 教授	世界遺産「知床」の魅力と現状をお伝えします。	

観察会「森の動物たち」				
対象者	どなたでも		受講者数	延べ　11名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所		共　　催	
会　　場	西目屋村川原平　白神自然観察園			
日　　時	講　師	所　　属	実施概要	
2011年6月7日 火　13：00 ～ 16：00	中村　剛之	白神自然環境研究所 准教授	観察園内を散策し、昆虫や両生類等の動物たちを観察します。	

セミナー③「白神の植物標本作成講座」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　25名
主　　催	教育学部・弘前大学白神自然環境研究所	共　　催	つがルネッサンス地域でつなぐ女性人才
会　　場	西目屋村川原平　白神自然観察園		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年6月18日		山岸　洋貴	白神自然環境研究所助教	観察園やその周辺で植物を採取し、腊葉（押し葉）標本を作ります。 参加希望の方は、連絡先まで必ずお問い合わせ下さい。
土	10：00 ～ 15：00			

観察会「夜の観察会ウォーク」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　16名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　　催	
会　　場	西目屋村川原平　白神自然観察園		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年8月6日		中村　剛之	白神自然環境研究所准教授	昼間と異なり、夜の森でしか見られない夜行性の動物を中心に、植物も含めて観察します。
土	19：00 ～ 21：00			

観察会「白神の菌類を学ぶ」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　15名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　　催	
会　　場	西目屋村川原平　白神自然観察園		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年9月20日		原田　幸雄	白神自然環境研究所名誉教授	白神自然観察園内に生育するキノコを中心に解説し、顕微鏡を用いて、日頃はなかなか目にすることができない微細な部分の観察方法を学習します。
火	10：00 ～ 15：00	殿内　暁夫	白神自然環境研究所准教授	
		山岸　洋貴	白神自然環境研究所助教	

観察会「白神の地形を学ぶ」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　2名
主　　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　　催	
会　　場	西目屋村　大川流域		

日　　時		講　師	所　　属	実施概要
2011年10月2日		檜垣　大助	白神自然環境研究所教授	日本国内でも有数な隆起量があるとともに、豊富な雪解け水や降水もある白神山地に広がる地滑り地形を観察し、植物群落の成立や変化に与える影響を学習します。
日	9：00 ～ 15：00			

観察会「縄文遺跡見学会」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　7名
主　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　催	
会　場	西目屋村川原平　縄文遺跡発掘現場		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2011年10月14日		上條　信彦	白神自然環境研究所講師	白神自然観察園に近い縄文時代の遺跡発掘現場に出かけ、縄文後期～晩期の土器片、竪穴式住居跡などを見学します。
金	13：00 ～ 15：00			

観察会「初冬の観察園散策と来年のカレンダーを作ろう」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　12名
主　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　催	
会　場	西目屋村川原平　白神自然観察園		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2011年11月26日		石川　幸男	白神自然環境研究所教授	冬季閉鎖直前の白神自然観察園で雪上を歩き、これまでに実施した観察会で観察した状態と比べ、季節の変化に応じた動植物の生活を学習します。また観察園とその周辺で撮りためた写真を用いて来年のカレンダーも作ります。
土	10：00 ～ 15：00	中村　剛之	白神自然環境研究所准教授	
		山岸　洋貴	白神自然環境研究所助教	

セミナー④「森と動物と人」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　7名
主　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　催	
会　場	西目屋村川原平　白神自然観察園		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2012年2月18日		荒井　一成	白神自然環境研究所准教授	木工を通じて木材の性質を理解するとともに、日本の森林の特徴や資源としての木材の特徴を学習します。
土	13：00 ～ 16：00			

観察会「雪山ウォーキング、動物のフィールドサイン」

対象者	どなたでも	受講者数	延べ　12名
主　催	弘前大学白神自然環境研究所	共　催	
会　場	西目屋村川原平　白神自然観察園		

日　時		講　師	所　属	実施概要
2012年3月24日		石川　幸男	白神自然環境研究所教授	春の気配が感じられる白神自然観察園内を散策し、雪解けを間近にひかえた動植物の姿や痕跡を観察します。
土	10：00 ～ 12：00	中村　剛之	白神自然環境研究所准教授	
		山岸　洋貴	白神自然環境研究所助教	

（7）総合情報処理センター

<table>
<tr><th colspan="6">「大改造!！写真でビフォーアフター」　―デジカメ写真を編集しよう―</th></tr>
<tr><td colspan="2">対 象 者</td><td colspan="2">小学校高学年以上</td><td>受講者数</td><td>延べ　11名</td></tr>
<tr><td colspan="2">主　　催</td><td colspan="2">弘前大学総合情報処理センター</td><td>共　　催</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">会　　場</td><td colspan="4">弘前大学総合情報処理センター</td></tr>
<tr><td colspan="2">日　　時</td><td>講　師</td><td>所　　属</td><td colspan="2">実施概要</td></tr>
<tr><td colspan="2">2011年12月17日</td><td rowspan="2">佐藤　友暁</td><td rowspan="2">総合情報処理センター
准教授</td><td colspan="2" rowspan="2">フリーソフト（無料で配布されているソフトウェア）である、GIMPを使用して、デジタルカメラで撮影した写真の編集技術を学びます。</td></tr>
<tr><td>土</td><td>13：30 ～ 16：00</td></tr>
</table>

Ⅲ．センター関連規則等

1. センター関連規則

(1) 弘前大学生涯学習教育研究センター規程

（平成16年４月１日制定
規程第144号
最終改正：平22.5.17）

（趣旨）

第１条　この規程は，国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第１号。以下「管理運営規則」という。）第６条第２項の規定に基づき，弘前大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という。）に関し，必要な事項を定める。

（目的）

第２条　センターは，学内共同教育研究施設として，生涯学習に関する教育（医学及び保健に関することを含む。）及び研究を行い，弘前大学（以下「本学」という。）の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。

（業務）

第３条　センターは，次の各号に掲げる業務を行う。

(1) 生涯学習に関する教育内容及び教育方法の研究
(2) 社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施
(3) 生涯学習指導者の養成
(4) 生涯学習に関する情報の収集及び提供
(5) 生涯学習に関する相談事業
(6) 生涯学習に関する調査・研究報告書等の刊行
(7) メディカルコミュニケーションセンターの業務に関すること。
(8) その他生涯学習に関すること。

（職員）

第４条　センターに，次の各号に掲げる職員を置く。

(1) センター長
(2) 専任教員
(3) その他必要な職員

（センター長の選考等）

第５条　センター長は，本学の教授をもって充てる。

２　センター長の選考は，管理運営規則第29条第２項に規定する別に定める委員会の推薦に基づき，学長が行う。

３　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

４　センター長は，センターの業務を掌理する。

（専任教員の選考）

第６条　センターの専任教員の選考は，教育研究評議会の議に基づき，学長が行う。

（センター協力教員）

第７条　センターに，センターが行う事業を円滑に実施するため，センター協力教員を置くことができる。

2　センター協力教員の任期は，担当する業務が終了するまでの期間とする。
3　センター協力教員は，学長が任命する。
（運営委員会）
第8条　センターの管理運営に関する事項を審議するため，弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。
2　運営委員会の組織及び運営については，別に定める。
（事務）
第9条　センターの事務は，学術情報部共同教育研究課において処理する。
（その他）
第10条　この規程に定めるもののほか，センターの運営に関し必要な事項は，センター長が別に定める。

附則
この規程は，平成16年4月1日から施行する。

附則
この規程は，平成16年10月1日から施行する。

附則
この規程は，平成21年2月9日から施行する。

附則
この規程は，平成21年5月28日から施行し，改正後の規定は，平成21年4月1日から適用する。

附則（平成22年5月17日規程第53号）
この規程は，平成22年5月17日から施行する。

(2) 弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規

（平成16年４月１日制定
最終改正：平21．4．1）

（趣旨）

第１条　この内規は，国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第１号）第95条及び弘前大学生涯学習教育研究センター規程第８条の規定に基づき，弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第２条　運営委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) センター長

(2) センターの専任教員

(3) 各部局から推薦された教員各１名

(4) 学長が指名する教員以外の職員１名

(5) その他委員長が必要と認めた職員

２　前項第３号の委員は，学長が任命する。

（委員の任期）

第３条　前条第３号の委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。

２　前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第４条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

２　委員長は，会議を招集し，その議長となる。

３　運営委員会に副委員長を置き，委員長が指名する委員をもって充てる。

４　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代理する。

（会議）

第５条　運営委員会は，委員の過半数の出席をもって成立する。

２　運営委員会の議事は，出席委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。

（委員の代理出席）

第６条　委員に事故があるときは，当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

（委員以外の出席）

第７条　運営委員会が必要と認めたときは，委員以外の者を会議に出席させ，意見を聴くことができる。

（専門委員会）

第８条　運営委員会に専門的事項を調査し，又は企画，立案若しくは実施をするため，専門委員会を置くことができる。

２　専門委員会の名称，組織及び運営については，運営委員会が別に定める。

（庶務）

第９条　運営委員会の庶務は，学術情報部共同教育研究課において処理する。

（その他）

第10条　この内規に定めるもののほか，センターの運営に関し必要な事項は，運営委員会が別に定める。

附　則

この内規は，平成16年４月１日から施行する。

附　則

この内規は，平成16年10月１日から施行する。

附　則

この内規は，平成17年10月28日から施行し，平成17年４月１日から適用する。

附　則

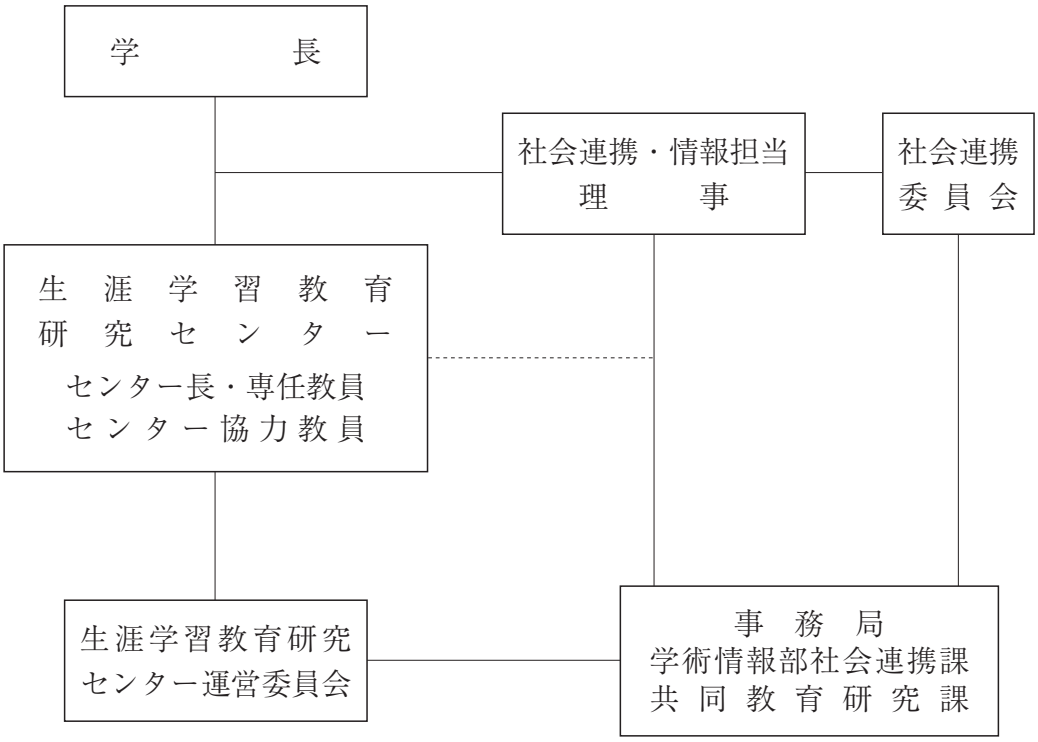
この内規は，平成19年４月１日から施行する。

附　則

この内規は，平成21年４月１日から施行する。

2. 機構・組織

センターの運営は，各部局から推薦された委員，学長が指名する教員以外の職員１名，センター長並びに専任教員が構成員となった「弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会」で，全学的な視野から検討されることになっています。



○生涯学習教育研究センター運営委員会

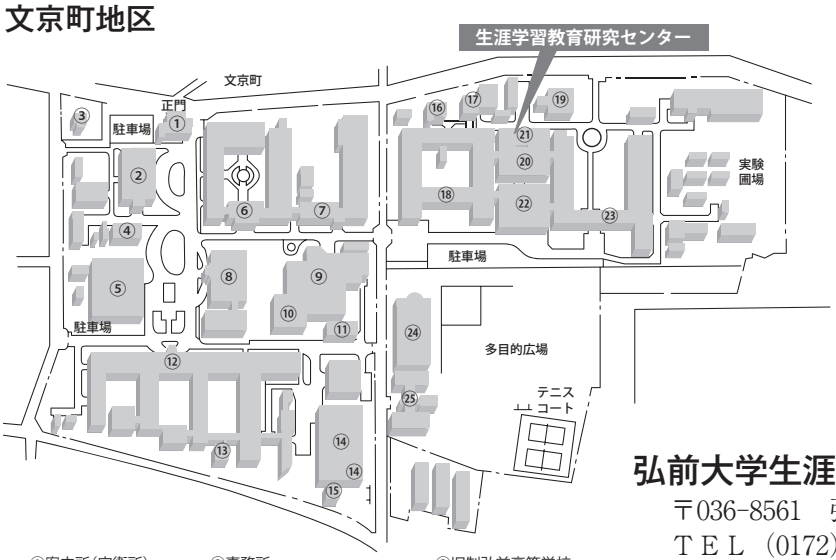
生涯学習教育研究センター	教　授	浅　野　　清
生涯学習教育研究センター	准教授	藤　田　昇　治
生涯学習教育研究センター	講　師	深　作　拓　郎
人文学部	教　授	池　田　憲　隆
教育学部	教　授	佐　藤　三　三
医学研究科	教　授	廣　田　和　美
保健学研究科	准教授	木　立　るり子
理工学研究科	教　授	吉　澤　　篤
農学生命科学部	准教授	武　田　共　治
学術情報部社会連携課	課　長	齋　藤　伸　雄

○センター協力教員

教育学部	准教授	増　田　貴　人（23.4.1~24.3.31）
教育学部	教　授	石　川　善　朗（23.7.1~24.3.31）
保健学研究科	准教授	古　川　照　美（23.4.1~24.3.31）

3. 地図・連絡先

文京町地区



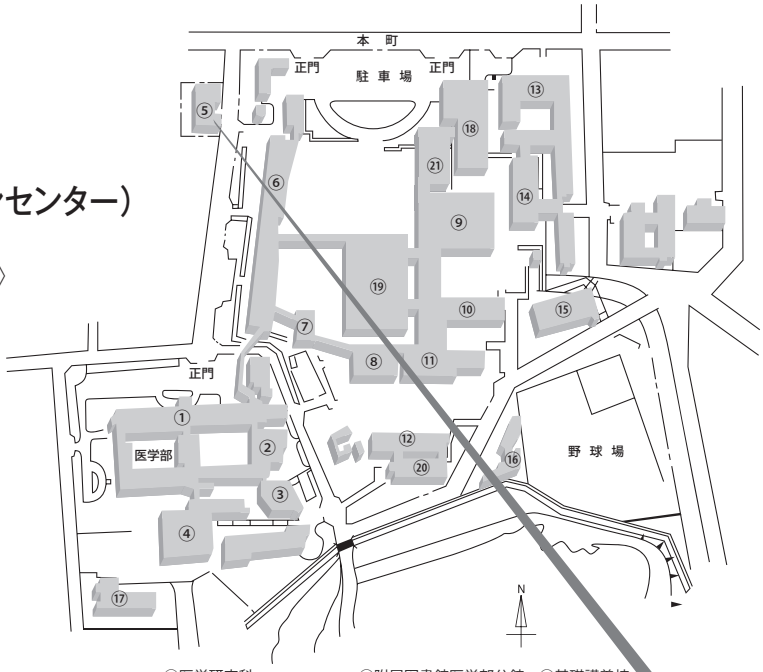
①案内所（守衛所）　②事務所　③旧制弘前高等学校外国人教師館
④保健管理センター　⑤創立50周年記念会館　⑥総合教育棟
⑦人文学部校舎　⑧附属図書館　⑨学生食堂
⑩大学会館　⑪合宿所及びサークル共用施設　⑫教育学部校舎
⑬教育学部附属教育実践総合センター　⑭第一体育館　⑮弓道場
⑯地震火山観測所　⑰総合情報処理センター　⑱理工学部１号館
⑲遺伝子実験施設　⑳附属コラボレーションセンター
㉑創立60周年記念会館コラボ弘大　㉒理工学部２号館　㉓農学生命科学部校舎
㉔第二体育館　㉕武道館

弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8561　弘前市文京町３番地
ＴＥＬ（0172）39－3146〈直通〉
ＦＡＸ（0172）39－3146

事務局
学術情報部社会連携課社会連携グループ
〒036-8561　弘前市文京町３番地
ＴＥＬ（0172）39－3904，3910
ＦＡＸ（0172）39－3919

本町地区

分室（医学部コミュニケーションセンター）
〒036-8203　弘前市本町40－1
ＴＥＬ（0172）39－5240〈直通〉
ＦＡＸ（0172）39－4056



①医学研究科　②附属図書館医学部分館　③基礎講義棟
④附属動物実験施設アイソトープ総合実験室　**⑤医学部コミュニケーションセンター**
⑥臨床研究棟　⑦臨床講義棟　⑧エネルギーセンター
⑨中央診療棟　⑩第二病棟　⑪第一病棟
⑫一般管理棟　⑬保健学研究科　⑭総合研究棟
⑮体育館　⑯医学部会館　⑰本町地区共同利用施設（附属高度先進医学研究センター）
⑱立体駐車場　⑲外来診療棟　⑳ひろだい保育園
㉑高度救命救急センター

編　集　後　記

「東日本大震災」から１年３ヶ月が過ぎた。一部では確実に復興が進行しているが、地域によっては未だに復興の方向性も見いだせないでいる。原発の影響ということでも、昨年と比較した場合には、多くの地域で農産物に心配ないとされているが、里山から継続的に放射性物質が排出されている例もある。また、最近、八戸で水揚げされた魚から規準量を超えた放射性物質が検出されており、除染作業も課題が多い。「復興」の展望や原子力発電にかわる持続可能なエネルギー開発の展望も示されてはいない。

こうした状況にあって、地域における大学の果たすべき役割は、とりわけ地方の国立大学の果たすべき役割は、非常に大きなものになっている。様々な地域課題・生活課題に取り組み、住民や行政・ＮＰＯ等と「協働」で学び、課題解決を目指すことが求められている。この『年報』がそうした活動に少しでも活用されれば、と願うところである。

（文責：藤田）

発行　平成 24 年 8 月 31 日

弘前大学生涯学習教育研究センター
年報　第 15 号

発行　弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8561　弘前市文京町３番地
☎（0172）39－3146
印刷　やまと印刷株式会社
〒036-8061　弘前市神田４丁目４－５
☎（0172）34－4111

ANNUAL REPORT
CENTER FOR RESEARCH AND EDUCATION OF LIFELONG LEARNING
HIROSAKI UNIVERSITY
NO.15, 2012

CONTENTS

Academic Articles

Development of Career Education and Open University
FUJITA Shoji ……1

Development of Child and parent Support programs Using University Resoures; Analyzing the Tendency of the Child-Care Generation
FUKASAKU Takurou
MASUDA Takahito
KOGAWA Terumi
OJIMA Miwa ……13

Possibility that We Learn from Community : Report of the Project to Train Community-Development-Leader for High School Students
NAKAZAWA Chikashi ……45

Report

【Discussion】What do Citizens Expect from Lifelong Learning?
—Education and Research Center for Lifelong Learning, Hirosaki University— ……55

Activity Reports: Center for Research and Education of Lifelong Learning ……65

The Faculties and Other On-campus Organizations ……110

Rules and Organization……123